
死神と蝶々

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神と蝶々

【Nコード】

N1392B

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

街で起る殺人事件。行方不明になったクラスメイト。雅斗は親友と共に彼女を捜す。それは淡い恋心ではなく、彼女の生死を確かめるために……。

序章（前書き）

- ・この作品の中には多少グロテスクな表現が含まれます。
苦手な方は注意してお読み下さい。
- ・実在の団体、人物とは一切関係がありません。

序章

蝶が舞っていた。

ぼんやりと光る糸で翅の形を創り浮かんだり消えたりしている蝶は人の目には見えていない。それはまるで何かに惹かれるようにゆっくりと暗くなり始めた大学内を舞っていた。

やがて蝶は目的の場所を見つけたかのように研究室の窓へと吸い込まれるようにして消える。

若い男が話し終えコーヒーを飲み干すと向かい側の席に座った壮年の男が思案するように口ひげを撫でた。

「それで君みたいな子がこの研究室に入ったのか」

「僕みたいなの？」

青年の問いに男は軽く微笑んだ。

「君は普通なんだ・・・良い意味でね。正直君がこの研究室にいると聞いた時は何かの間違いだと思ったよ。だが、考えを改めなければならぬ。十代の大切な時期にそんな経験をして普通でいられる君は普通ではない」

断言されて青年は少しうつむいた。

先月替えたばかりの携帯電話に付けられた古い携帯ストラップを握りしめる。それは十五歳の誕生日の時に姉から贈られたストラップで、手作りの人形が付いている。貰った当初はまだポプリの匂いがしていたが、長い間付けていたせいでもう匂いは失われている。それでもそのストラップは一度金具が切れて落ちてしまっただけで、もう十年近く保っているのだ。

携帯電話を新しくしても、このストラップだけは代えられなかつ

た。

「・・・逆、じゃないかなって思うんです」

「逆？」

「僕はあんな経験をしたから、普通でいられるんだと」

男は瞬いてやがて破顔した。

「ああ、なるほど。そう言う事もあるかもしれないね」

窓の外はもうだいぶ暗くなっていた。

男は空になったマグカップを持って窓際にあるコーヒーマーカの側に置いた。ドリップが終わるのにはもう少し時間がかかりそうだ。青年にもう一杯飲むように勧めて彼のカップも預かった。

「君は死神を信じているのか？」

やや間をあけて青年ははっきりした声で答える。

「科学的には何の根拠もありませんが、ええ、僕は信じています」

「何故？」

「人を死に誘うものを死神と呼ぶなら、僕はそれを見たことがあるからです」

「何を見た？」

「言葉では説明の出来ないものです」

「では、死神とは何だ？」

「偶然も必然もなく人に平等な死を与える存在」

「神か悪魔か」

「僕にとつてはどちらでもありません」

「何を連想する？」

「試すような男の視線。」

青年はそれを受け止めて答えた。

「蝶」

不意に携帯電話が鳴った。

携帯電話には良く知った名前が表示されている。

慌てて立ち上がった青年は男に詫びて廊下に出た。

廊下はすっかり冷え込んでいたが、長い話をして興奮した彼にと

って冷氣はむしろ心地良いくらいだった。

呼吸を整えて通話ボタンを押す。

軽く手が震えるのは寒さではない。緊張しているのだ。

「お久しぶりですね」

出てきた声は自分で思っていたよりも固い。

久しぶり、と電話の向こう側から笑いを含んだような声が響く。

違いに忙しくて連絡を取っている間もなかった。何ヶ月ぶりかに聞く声は屈託もなく相変わらずの喋り口だった。

元氣なのを知って緊張がするりとほどけた。不意に口をついてでた言葉は、嫌味でもなかった。ただ純粹に相手の昇進を祝う言葉だった。

「試験合格したそうですね。おめでとうございます、警視」

0話 捜査開始

彼女はじつと壁に掛かったからくり時計を見つめていた。

定められた時間になると時計の中から人形たちが現れて、踊ったり音楽を奏でたりするタイプのからくり時計だった。

あと数分で動き出す、と言ったところで時計の針は止まっている。動かないのを知らずに待ち続ける子供のように彼女はじつとその時計を見つめていた。

その彼女を見守っている伊東はいつか彼女が「可愛い人形のダンスが見たいわ」と言い出すのではないかと内心冷や冷やしながら立っていた。

その発言はこの場には相応しくない。

「ふうん……動かないのね」

彼女は言って伊東の方を向く。

「壊れているの？ それとも電池切れ？」

「調べてみなければ分かりませんが」

「なら、鑑識さんに頼んで調べてもらって。お人形の歌が聴きたいの」

ダンスではなかったが、彼は少し目眩がして頭を押さえる。

どうしてこの人はこうも不謹慎なことが平気で言えるのだろうか。

このからくり時計の主人は今朝殺されたばかりなのだ。先に起きた二件の事件同様の形で発見され、連続殺人事件の可能性が強まっていた。まだ、遺体が床に転がっていた痕跡が残されているのに、目の前の女性は不謹慎にもからくり時計ばかりを気にしている。これで名刑事と呼ばれるのだから日本の警察も落ちたものだ。

気怠そうな雰囲気のある彼女の名前は岩崎愛。制服を着ていれば女子高生と言ってもあまり無理のない外見をしているのだが、実際は三十路を越えていて小学五年生の息子がいると聞かされて驚いた。

女性でこの年で警部というのだからキャリアかそうでなければよほどの天才なのだろうが、普段の勤務態度を見ていてもとても警部には見えない。いや、警官にすら見えない。

事件性のある死体が発見された時だけは現場に出てくるのだが、それ以外は寝ているか本を読み続けているだけという究極のマイペース不良婦人警官だ。初めて彼女を見た時は啞然としたのだが、所長に「彼女はそのままでもいい」と言われていたので口を噤んだ。

わがままで気ままな警官。殺人課の刑事ということもあつて一般市民の前に出ることはあまり無いのだが、この人が派出所にいたのなら、非難の声があがってもおかしくない。

警部と呼ばれるのが嫌で所長にまで「愛ちゃん」と呼ばせる。彼女のわがまは大抵通ってしまう。実力があつてなのか、それとも女の武器を使っているのか。彼はまだどちらなのか判断出来なかった。

彼女がちゃんと仕事をしていることを殆ど見ていない伊東はこんな人の部下になってしまった自分を不憫に思った。

「それで、イトメちゃん、被害者はいつもの通り？」

「はい、死亡後に腹部が切り裂かれていたそうです。前二件と同様に首筋に歯牙で噛まれたような跡が見られます」

毒物ははっきりしていないが、死体の状況から神経系の毒物による中毒死であることは間違いない。毒のある動物に噛ませて殺害した後、腹部を切り裂いて逃走、というのが本部の意見だ。もしも腹部が切り裂かれていなければただの事故として処理されていた可能性も高い事件。派手に切り刻む訳でもなく、死体を隠すわけでもない。珍しいケースでもある。

手帳に書いたメモを覗き込んで岩崎は小さく唸る。

「ふうん。吸血鬼が人間を解体でもしたのかしら？ どう思う、イトメちゃん？」

「気色悪いことを聞かないで下さい。・・・それにそのイトメって嫌がらせですか？」

根が真面目な伊東はこういう態度を取られると上司にもかかわらずつつい攻撃的になってしまう。数年前の自分だったらもう辞表を提出していたかもしれない。

「さつきね、部長が、伊東め、せっかく愛ちゃんと組むのにあの態度は何だ！、って怒ってたからイトメちゃん」

説明がよく分からないのだが、どこから突っ込めばいいのかもよく分からない。

「目が細いつていう嫌味じゃないんですか？」

「やだ、ひよつとして気にしているの？ 格好良いじゃない、私のダンナも目が細い人だけどとっても格好いいわよ、今度写真見せてあげる」

「結構です！」

鋭く言つて踵を返す。

怒ったところでどうせけろつとしているような人だから怒ったところで意味がない。警官同士がケンカしている場合でもない。ここは自分が大人になってこらえるしかない。

意を固めた時、後ろから言葉がかかる。

「鑑識に時計のこと頼んでね」

「時計の修理屋に頼んだ方が良いんじゃないですか？」

「おバカね、あなたそれでも警官？ おじいさんの古時計じゃあるまいし持ち主の死亡推定時刻にタイミング良く壊れる時計なんてあると思つているの？」

「あ・・・」

「疑わしいものを全て調べるのが私たちの仕事、現場に100回でも足を運べつて言葉あるけど100回も足を運ばなきゃ事件解決出来ないならだめだめよ。いい、伊東くん、事件を解決したいのなら少しのヒントも見逃しちゃだめよ」

血が上つて大切な事を忘れるところだった。

伊東は表情を引き締める。

「はい」

「毒物による殺人。自分の獲物だと言わんばかりの傷。ただの快樂殺人なら次第に派手になっていても良いはずなのに、程度は一定。猟奇的と呼ぶには少し物足りない感じがするわね」

「不謹慎ですが、確かにそうですね」

「この事件は」

岩崎は腰に手を当てて部屋を睥睨する。

「私たちが知っているような事件じゃない。そして、私の勘が正しければ、人知を越えた何かが潜んでいる事件」

「え？」

「心霊事件なのよ」

1話 変わらない日常、些細な変化

時計は既に八時近くを指していた。

学校の始業時間は八時五十分。どうせギリギリの電車に乗るのだから急いでも意味がないのだが、いつもこのタイミングで母親に急かされるのだ。

「雅斗、そろそろ出ないと遅刻するわよ」

電車が遅れでもしない限り遅刻はしないだろう。現に高校入学してから今まで遅刻したのは大雨で遅れた一度だけだ。それもやむを得ない事情のために遅刻としてカウントされていないことくらい母親も知っているはずだ。

それでも注意しなくてはならないのはこの人の性分だろう。

雅斗はホットカフェオレを飲みながら新聞のニュースに軽く目を通す。目立った記事は『アイドル藤岡眞由美結婚』『インフルエンザ流行』『連続殺人事件に』の三つ。このくらいを頭に入れておけば時事話題に困ることはないだろう。

記事に目を通し、意識してたたき込む。

「ほら、まーちゃん、早くしないと遅刻するわよ」

「まーちゃんって呼ぶなっつての」

母親に急かされて仕方なく家を出ることにした。

本当に毎日面倒だ。

自宅を出て自転車を走らせるとすぐに頬が冷たくなった。この辺は雪の多い土地ではないが、やはり冬は寒い。雪国育ちの経験のある雅斗にしてみればコートを着る必要はないのだが、街にはコートを着込んだ人であふれている。せいぜいブレザーの下に着たセーターとマフラー、手袋くらいの防寒具で済んでいる雅斗の方が珍しい

ようだ。

駅の駐輪場に自転車を放り込んで駅の階段を一気に駆け上がると、むしろ熱いくらいの熱気が制服の中にこもった。首元まできっちり締めてあったネクタイをゆるめると彼はようやく息を吐く。

この時間はちょうどラッシュを過ぎた辺りで比較的駅は空いている。ホームに降りるとちょうど向かいのホームから電車が走り出したところだった。

今日はいつもより少し早い。

「あれ、有賀くん？」

「ああ、天野か。珍しいな」

声をかけてきた少女に雅斗は笑顔で答えた。

同じクラスの、天野真里だ。

高校入学した当初、出席番号が近いという理由で何度か会話をしたが、そのくらいしか接点がない。学校内では彼女の人気は高い方で、彼女狙いの男子も結構いる。ただ、頭も良く人当たりのいい彼女は高嶺の花で、積極的にアピールしてくる強者は少ない。そうではなくても「クラスの女子」という鋼鉄の壁が彼女の周りには存在しているのだ。

「おはよう、有賀くんはいつもこの電車なの？」

「ああ、天野は寝坊？」

雅斗とは違い天野はいつも早く登校しているらしい。少なくともこの時間に彼女に会うのは初めてだった。

「そうなの、昨日夜更かししちゃって」

「勉強でもしてたのか？」

「まさか。ネットでゲームしていたらはまっちゃったの」

「へえ、意外」

彼女はゲームとかやらないイメージがある。

ましてネットゲームのような俗世的なイメージは皆無だった。勉強しているか、読書をしているか。そうでなければ古い外国の恋愛映画でも見ていそつだ。

「ネットゲームするんだ。何の？」

「チェス」

「なるほど」

それならまだイメージの範囲。

「強い人がいて、なかなか勝てなかったの」

「へえ、勝てない相手いるんだ」

彼女は頭が良い。頭が良いと言うことがチェスが強いということに直結する分けではないが、彼女の口ぶりからは相当強い相手だと言ったことが読みとれる。案外とプロという可能性もあるだろう。そもそもネットゲームは匿名性の高いゲームだ。

「日本人らしいけど、凄く強い」

「そりゃ是非とも一度勝負したいな」

「有賀くんもチェスするの？」

「まあ、昔はな」

「アドレス教えようか？」

「ああ、ぜひ」

鞆の中からメモ帳とペンを取り出して彼女はURLをとIDらしき番号とアルファベットを綴った。

シンプルなメモ帳の上で踊るファンシーなウサギ付きのペンが少し気になった。彼女の趣味だろうか。それとも誰かにもらったのだろうか。

考え込んでいるとメモを差し出された。

「はい、上のIDがその強い人。下が私のID。もし見かけたら声をかけてね、チャットも出来るから」

「ああ」

短く返事をしたところで電車が入ってきた。

外気に晒されていた頬が冷たくなり始めていた。

毎朝、彼は予鈴がなる直前で校門をくぐってくる。

それを見送って朝練を終えるのが尚の日課だった。

一年の有賀雅斗。クールで頭が良く、アイドルのように顔立ちの整った彼はその他大勢の男子生徒達とは異なっただけの空気を持つ。彼の周りだけが特別だった。

他の女子、とりわけ尚の周りにいる陸上部の後輩達は彼よりも彼と良く一緒にいる金髪の男・・・一色と言っただろうか・・・彼の事の方にきやあきやあ言っている。尚に言わせればつき合っても浮気をしそうな軽い男なんか雅斗の足下にも及ばないと思う。多少顔は良いがそれだけの男だ。

もちろん彼の方が良いという女子もいたが、一緒に騒ぐ気にはなれなかった。奇跡でも起こらない限り自分のものにならない芸能人なんかとは違って雅斗は自分の手の届く範囲にいるのだ。わざわざ牽制し合わなければならぬ仲間を増やす気にはなれない。

ナオは彼の姿を認めて校門の近くまでラストスパートをかけた。

(・・・あれ?)

いつもの「雅斗」を見るつもりだった彼女は不意に足を止めた。隣に、違う誰かがいる。

金髪ではない。男じゃない。長い髪の女。

遠くからでもそれが誰であるか分かって彼女は唇を噛んだ。

(天野真里)

アイドル崩れのような名前と、いかにもお嬢様な外見を持つ一年長い黒髪に甘やかされて育ったような世間知らずな顔。皆彼女を可愛いと持て囃したが、尚はどうしても好きになれなかった。

あの仮面の下にどんな顔を持っているか分かったもんじゃない。ちやほやされていい気になっているあの女も、それを取り巻く連中も好きにはなれなかった。

その天野が、どうして雅斗と一緒にいるのだろ。

「先輩、予鈴鳴りましたよー」

息を切らして追いついてきた後輩に声をかけられてはつとする。

もう部活を終えなければならない時間だ。

「各自柔軟をして解散」

高く言って彼女はざっとグラウンドを見渡す。陸上部の部員達は彼女の声で各々歩きながら身体をほぐし教室へと向かっている。

プールが封鎖されている間、陸上部と合同練習をしている水泳部がまだ遠くで走っているのが見えて何故か無性に腹が立った。

「そのネクラ水中部！ チンタラ走ってんじゃないわよっ！」

厳しく言つと歩いて戻ってきた男子生徒達が内緒話をするように小声で言う。

「・・・怖い」

「沢田もよくやるよな。あっちにいるの江田だろ？ あいつタツパあるし、しゃべんねえし、怖いよな。人平気で殴り殺しそうじゃん」

「言ってる。俺この間あいつが背後にいてマジびびったっての」

「あいつに色々言うの沢田くらいじゃん？ そのうち死体で発見されたりしてな」

「うっわーシャレになんねえじゃん」

声を潜めていたはずがいつの間にか普通の声で喋っている。全て聞き漏らさなかった尚は男子部員達を睨む。彼らは肩をすくめて教室の方に急いでいった。

（全くどいつもこいつも）

「・・・おい」

「きゃあ！」

男子生徒に気を取られ江田が走り終えて戻ってきているのに気が付かなかった尚は、突然頭の上から降ってきた低い声に悲鳴を上げる。

黒髪、黒縁メガネの大男は尚を見下ろしていた。

「な、何よ」

「俺を目立たせるな」

威圧するような声。「平気で殴り殺しそう」という言葉を思い出して少しぞっとする。

「あ・・・、アンタが悪いんじゃない。大体ね、目立つのが嫌ならその髪切ればいいでしょ？ 男のくせに鬱陶しい！」

彼は静かにナオを見下ろした。

「・・・・・・」

「何よ、やる気？」

「・・・・別に」

江田は諦めたような表情で昇降口の方へ向かっていく。突然の江田の出現に驚いた生徒達が次々と彼に道を譲っていった。

高校生にしては体格の良すぎる彼は元から目立つのだ。それを尚のせいにしているところが気に入らなかった。何より、一瞬でも彼に怯えてしまった自分が気に入らない。

（何よ。どうこうする勇氣もないくせに）

本当に世の中の何もかもムカツク。

2話 脱皮

数学の問題を解き終えて雅斗は天野から貰ったメモを眺めた。

「green」が強者で、「AM」が天野。

そう言えば自分もインシャルが同じなのだ、と雅斗は思った。

結局あの後当たり障りのない会話をして学校に向かった。予鈴が鳴る直前に校門をくぐり、教室に着いたのはいつもと変わらない時間だった。天野が遅刻すまいと急いでいたせいだろうが、二人で来たというのにいつもと変わらない時間で少し驚く。大抵二人で歩けば、特に隣が女の子の場合は遅くなるものなのだ。

一限目は数学だ。

授業は練習問題を解くことが中心になるため、これほど退屈な時間はない。何故こんなに無駄な時間を取るのだろうか、と常々不思議に思うのだが、雅斗以外の生徒はそう思わないらしい。

この学校の生徒はスポーツ推薦枠で合格したのでなければ頭がいい人間がそろっている。そんな偏差値の高い学校と称されるこの学校ですら、彼の脳を持てあましているのだ。

そのチェスの強い人というのは雅斗をどれだけ楽しませてくれるのだろうか。そもそも彼がチェスを止めたのは自分以上の相手に出会わなくなったからだ。過度な期待はしないが、少し楽しみだった。ちらりと天野の方を見ると彼女も問題を終えているらしく、前の席に座った少女に質問をされていた。

「雅斗」

後ろからペンでつつかれて雅斗は振り返らずにノートを渡す。

「んー」

「サンキュ」

受け取って彼はノートを写し始めた。

このクラスで唯一金髪の男は一色一樹という。別に外国人という

訳ではなく、単に髪を染めているだけだ。授業というものに真面目に取り組む気などさらさらない。雅斗のノートを丸写しするとは言え、ノートを取っているだけまだマシな方だ。数学も単位に関わる「ノート提出」が無ければこんな面倒なことをしないだろう。

授業なんかよりもナンパの方が積極的に入学から七ヶ月で泣かした女は両手両足を使っても治まりきらない。タチの悪いことに顔が
いいから厄介なのだ。

彼もこの学校にいるからには頭が悪い訳じゃない、・・・はずだ。

「なあ、雅斗」

「うん？」

「天野って美人だよな」

「なんだ、お前今度は天野狙いか？」

一瞬、彼が今朝の事を見ていたのかとドキリとするが、そんなはずはない。彼は一限目を遅刻してきたのだ。

「俺が気になってるのは弟の方」

椅子から落ちるところだった。

「・・・お前、いつから趣旨替えしたんだ？」

「ん？ あ、違うぞ、俺は最初から両方オーケー・・・って、そうじゃなくて、俺疑われているんだ」

「誰に、何を？」

「天野弟に連続殺人犯じゃないかって」

「なんだそりゃ」

何のジョークかと笑って振り向いたが一樹の表情はいつになく真剣に見えた。

雅斗が僅か表情を変える。

「・・・理由は？」

「俺さー、被害者とおつきあいしていたことがあってさ」

連続殺人事件。被害者は全員若い女性。今朝の被害者は確か女子大生。最初の被害者は女子中学生で、次はOLだったはずだ。

「誰と？」

「三人全員」

それは交際関係が広い。

「ケーサツに完全にマークされたっぽい」

「当然だな」

普通に考えれば彼は限りなく黒に近い。疑うのは当然のことだ。

「俺もそう思う。けど俺じゃねえよ」

「アリバイは？」

「何度も聞かれたけど深夜にアリバイがある方がおかしいだろう？」

まあ、その前日なら女の子と一緒にだったけどー」

「さいで」

「俺天野と中学同じだったから、天野の弟知っているわけさ。中三で多少オス化した天野って感じ」

「オス化」

「マジだぜ？ 性格温厚で争いが嫌い。だけど基本的に正義感バリバリだから、間違っていると思うたら虎にだって噛みついちゃう性格」

「・・・ひょっとしてシスコン？」

「シスコン」

大体それで想像がついた。

外見が姉にそっくりと言うことは一見すれば大人しそうで、一歩間違えばパシリ役に回されそうだが、不思議とそうはされない。中身は真っ直ぐで、人当たりが良く人と形を知っている人からは可愛がられる。女子にはもてるだろうが、恋愛対象にはされていない。そういうタイプの少年だろう。

「その天野弟に殺人現場で野次馬してるところを何度か目撃された」
「何でそんなところ行くんだよ」

わざわざ疑われに行くようなものだ。

「自分とつき合ったことある女が殺されたなら少し興味湧くだろう、フツー」

「で、警察にマークされているのも感づかれて怪しまれている。ど

うせお前の事だから中学時代に天野を口説いた経験でもあるんだろ？」

「ばれたか」

一樹は舌を出して笑う。

「鈍いのかそれともかわされたのか、尽く失敗したけどな」

「で、弟は何か言ってきたのか？」

「言ってきたぞ、しかも直接『犯人なら自首して下さい』だぜ？

暗に『姉さんに近付くな』とも言われたけど」

万一彼が犯人なら逆に刺激しかねない言葉だ。

吹き出しそうになって何とか笑いを飲み込んだ。

姉を囫に利用しての陽動作戦なら頭のいい考えだけれど、話を聞いた限りの彼の性格ではあまり考えずに行動したのだろう。頭の悪い行動に呆れるを通り越して逆におかしくなる。

「それで今弟が気になるって訳だ。んで、今冷静になって天野見たら思ってたんだ」

「何を？」

「美人だな、って」

「結局それか」

「いや、これは結構重要だぞ。被害者の共通点を探したら『俺とつき合っていた』の他に、若くて美人ってのが当てはまるんだなって思っで。とするとだ」

彼はぱたんとノートを閉じて雅斗の前に差し出した。

「天野は殺人犯に狙われそうだったってことだな」

ノートを受け取りながら雅斗は微笑する。

あの天野が被害者になる、というのは結構単純な方程式にも見えた。

「あ、伊東さん」

鑑識のジャンバーを着た中年の男が小走りに近寄ってきた。

「時計の中から見つかったものですが、虫の抜け殻でした」

男は写真付きのファイルを開いて見せる。

写真に写っているのは時計の内部に寄生したような何かの皮だった。蝶が脱皮した後の抜け殻のようだったが、サイズが明らかに大きすぎた。これが挟まっていた為時計は動かなくなっていたのだ。

ヘビの抜け殻ほどの長さもない。かといって虫となるとその虫は二十センチを超える青虫になる。不自然な大きさに不自然な位置。

何かの間違いだろう。そう思って確認を急いだが、結果は不自然な事を肯定するものだった。

「種類は？」

「特定できませんが、蝶の種類ではないかと。それと、付着していた赤黒い液体ですが、血液である可能性が高いです」

普通ならば他の動物の血液か、虫の体液なのかと確認するところだろう。

しかし、伊東は半ば確信しながら問い返した。

「人の？」

自分でもどうしてそう聞いたのか分からないが、問われた側の方が少し驚いたようにする。

「ええ、そうです。今DNA鑑定を急いでいますが、人の血液であることは間違いありません」

「不自然だな。犯人がやったにしても、被害者がやったとしてもその意図が分からない」

「それを調べるのが私たちの仕事よ」

伊東は声のした方を振り向く。

少し眠そうにまぶたを押さえながら岩崎は二人に近付いた。何故か片手にはブランド品の紙袋が握られている。

鑑識がやや嬉しそうに会釈をした。

伊東は背筋を正した。

「岩崎警部」

「不正解」

「え、あ・・・岩崎さん」

「論外」

「あ、愛警部」

「可愛いけど、ちょっとダメ」

「・・・愛さん」

「認めるわ」

ようやく呼び方が気に入った彼女は微笑む。

「伊東くん、その件は後回しにして出かけるわよ。・・・原村さん
引き続きお願いします」

「はい、任せて下さいよ」

中年の男は自信ありげに頷いて科捜研の方へと走り始めた。

付いてくるように目で合図を送った愛は彼とは逆の方向へ向かって歩き始める。方向は駐車場の方だ。

「どこへ行くんですか？」

「藤岡眞由美の自宅」

「はあ？ あ、アイドルの？」

ややバカにしたような目つきで彼女は男を見上げた。

「そんな訳ないでしょう。同じ名前だけど、私たちの仲間の・・・
何をがっかりしているの？」

「いえ・・・何でもありません」

がっかりした、と言うよりは脱力したのだ。

どうも彼女と会話すると疲れる。

「厳密に言えば違うのだけど、刑事のようなものだから、同じように思ってくれて構わないわ」

「刑事のようなものって・・・」

三流小説じゃあるまいし「銃携帯を許された探偵」という訳ではないだろう。一体どんな女性なのだろうか。

どうせ説明する気など無いのだろうか、追求は諦める。

「それでどんな女性なんですか？」

「女性・・・そうねえ、綺麗な子よ。身長はあなたと変わらないんじゃないかしら？」

「・・・俺、１８０はありますよ？」

「知っているわ」

さも当然のように言い切る愛に伊東は首を傾げる。

身長１８０センチに近い女性。同性に「可愛い」でなく「綺麗」と言い切らせるのであれば容姿やスタイルはモデル並なのだろう。しかも長身ということは外国人モデル並ということだ。

アイドルの藤岡真由美は小柄でどちらかと言えば「可愛い」印象のある女の子だ。名前だけで想像すればビックリするような女性だろう。

そんな女性が殺人事件を捜査する仲間としてやっていけるのだろうか。

自分のことを名前で呼ばせる上司だけでも規格外れだというのに、これ以上変人が増えるのかと思うと、胃の奥がきりきりと痛んだ。

3話 電車の中で

連続殺人事件には興味があった。

もちろん、この事件に関してこの辺りの人間が興味を持たないはずがない。何しろ今まで「殺人」という事に無縁だったこの街が連日新聞を賑わす事件の舞台になっているのだ。

自分が被害者になるかもしれないと思っている人々は怯え、自分は無関係だと思っている人々はあれやこれやと無邪気な推論を交わしている。隣に立っている人間が殺人鬼かもしれないなんてことは考えずに。

電車に揺られながら雅斗はいつものように買ったばかりの小説を読んでいた。

蝶の館と呼ばれる屋敷で殺人事件が起きるといふありきたりな内容だった。タイトルを見た時点で陳腐な内容だろうと覚悟はしていたが、雅斗には「蝶」と名の付く本をつい買ってしまうと言う癖があるのだ。

本を読み進めながらも彼の思考は昼間一樹が話した内容のことに至る。

天野が被害者になるかもしれない。

もしも彼女が明日遺体で発見されたならどういふ気分になるだろうか。憤慨するだろうか、それとも・・・

「有賀くん」

呼ばれて彼は本から目を離す。

にこりと微笑んだ少女が隣に立っていた。

「今日はとことん縁があるのね」

「そうだな」

しおりをはさんで本を閉じると、天野は興味深そうにのぞき込んだ。

そう言えば彼女も結構な本好きだ。

「読書の邪魔しちゃった？」

「いいや。どうせもう犯人分かったから」

「推理？ あ、それ私も読んだことあるわ」

しおりの挟んである一を見て彼女は首を傾げた。

「まだ、最初の事件が起こったあたりよね？」

「ああ」

「くやしいわ、どうして犯人が分かっちゃったの？」

彼女はそう言いながらも微笑んだ。

悔しい、と言いながらも彼女は楽しそうだ。

「私、次の事件が起こる直前まで分からなかったわ」

「それでも普通早いほうだろう？ 俺は犯人が考えていること手に取るように分かるからな。特にこういうタイプの小説の場合」

分類的に言えば推理よりも犯人の猟奇的な面を楽しむというホラ

ー小説。

犯人が猟奇的であればあるほど単純で分かりやすくなる。心理状態が自分によく似ているからだ。そんなことは口が裂けても言えないが、頭の良い彼女には理解されてしまっただろう。

一瞬だけ彼女は何とも言えない複雑な表情を浮かべたが、すぐに笑顔に変わる。

出来た人だ。

「頭が良いのね、有賀くんって」

「天野に言われたくないな、全国共通模試五位」

「やだ、何で知っているの？ 中学の時の話よ」

照れたように顔を赤くした少女はうつむいた。

さらさらと流れる黒髪の間から白いうなじが見えて雅斗はぎくりとした。白磁のような肌にかかる糸のように細く黒い髪。

何を連想したのかを知って、荒くなりかけた息を詰める。

蝶だ。

黒く薄い翅に赤い斑紋を落としたような蝶。引き裂かれた翅で宙を舞い、人の死を笑うように飛び回っていたあの蝶。

（だめだ）

彼は目を閉じる。

（これ以上、思い出したら、だめだ）

思い出したのはきつと「天野が次の被害者だ」と思ってしまったからだろう。だからあの蝶の事を思い出しそうになっているのだ。見間違いだ。そう、気のせいなんだ。

「・・・どう思う？」

不意を付かれて覚えず声をあげるところだった。

見れば既に別の話題を持ち出していたらしい天野が大きな瞳でこちらを見上げている。息を吐いて取り敢えず笑みを作る。

「あ、悪い、聞いてなかった。何だった？」

「うつん、別に何でもないわ。そう言えば有賀くんのところにも来た？ 聞き込みの警察官」

「連続殺人事件の？ ああ、この辺りをしらみつぶしにしているみたいだな」

「未成年にも聞き込みつてするのね、驚いたわ」

「今は子供だつて殺人犯になれる時代だからな。天野より弟の方が長く聞き込みされなかったか？」

彼女は少し首を傾げる。

「どうして分かるの？」

「連続殺人事件の犯人には男性が多い。快樂殺人なら余計に少し考えて彼女は頷く。

「確かにそうね。なるほど、私よりも弟が疑われている訳ね」

「疑うと言うよりは可能性を確かめているレベルだけだな」

「それならもう少し女性も疑うべきだと思うわ。・・・そう言えばどうして私に弟がいるって知っていたの？」

「一樹に聞いた」

「ああ、一色くん。じゃあ、弟が一色くんを犯人じゃないかって疑っているって話も聞いたの？」

聞かれて頷く。

天野自身がその話を耳に入れていたというのは少し意外だった。彼女は弁明でもするように雅斗の瞳を見つめた。

「本気で疑っている訳じゃないのよ。ただ、一色くんってもてるでしょ？ だから一色くんの事が好きな女の子が近づくと子をとって話を弟がしていたわ。だから近付くなって念を押されたんだけど肝心な部分を濁したは何を言いたいのかはすぐに分かる。」

天野の弟は思っていたよりバカじゃない。

でもね、と彼女は笑う。

「私、そう言う人が犯人ではないと思うの」「どうして？」

「理由は無いわ、願望だもの。人をそれだけ好きになれる人に人殺しになつて欲しくないだけよ」

「優しいな、天野は」

「そんなこと無いわ」

彼女は肩をすくめる。

「でも、殺人事件だってことは、誰かが犯人なのよね。推理小説なら、一番犯人らしくない人が犯人っていうのが定番だけど・・・早く終わって欲しいわ、こんなこと」

「そうだな」

同意したように雅斗は頷く。

けれど、心中では真逆の事を考えていた。

この事件はまだ終わって欲しくない。混乱や混沌が欲しいわけではない。せっかく興味を持ち始めた事件なのだ。もしかすると自分の視界に入っている誰かが犯人かもしれない事件だ。

せめて、自分が犯人に辿り着くまではこの事件は終わって欲しくない。

次の被害者は天野。

そう言う展開も、そう悪くない。

「ここですか？」

「ええ、ここよ」

示されたのはちょっと古い感じはするものの、どこにでもある普通のマンションだった。目だったセキュリティシステムは無く、唯一の防犯らしいものは一階出入口にある管理人の部屋くらいだった。そこすらも「すぐもどります」という張り紙がされていて、今は人の気配すら無い。

藤岡真由美は一人暮らしだと言う。

こんな防犯設備も無い場所で女性が一人暮らしをされていて大丈夫なのだろうか。

愛は慣れた様子でエレベータに乗り込むと三階のボタンを押す。

「HERMES」と描かれた紙袋が僅かに揺れた。

三階まで上がると、彼女は左側二番目の部屋のインターホンを押した。壁には「ふじおか」とハートマーク入りで示されている。

奥から「はい」と弾んだ声が聞こえた。

がちやり、と扉がキーチェーンの長さの分だけ開かれる。

「おはよう、まゆみちゃん？」

「きゃー!!」

藤岡はまるで痴漢にでもあったかのような声で叫び、再び扉を閉めようとする。

しかし、

「残念でした」

愛は自分の足をドアストッパーにして勝ち誇ったように笑う。扉を閉め損なった藤岡は恨めしそうに睨んだ。

「ちよっと、ドアが閉められないじゃない!」

「話があるの。閉められたら困るでしょう?」

「け、警察呼ぶわよ」

とても不真面目な警察官「岩崎愛」はさも親切そうな笑顔で答え

る。

「あら、何かご用かしら、藤岡さん？」

「……」

言われて自分の口にしたことのばからしさに気付いた藤岡はぶすつとした。

藤岡は、確かに綺麗な人だった。ロイヤルブルーの薄手のセーターに黒いベロアの短いスカート。聞いていた通り伊東とそれほど変わらないほど長身だった。顔立ちは端正で、唇にはピンクのリップが塗られている。

だが、どう見ても男にしか見えなかった。

もちろん、男性のように肩幅が広く筋肉質な女性がいてもおかしくないと思う。だが、藤岡はどう好意的に見ても「ちょっと綺麗なオカマ」にしか見えない。そして、声もまたどこか野太さが混じる「男の裏声」に聞こえた。

「……何の用？」

「久しぶりに会ったのに、再会を喜んでくれないの？」

「あ、あんたと関わるとろくな事がないのよ！」

「ふうん、それでも、そう言える」

彼女は紙袋を藤岡の目の前に突きつけた。

藤岡の目が中央に寄る。

そろり、と手が紙袋に向かって伸びる。愛はにこりと笑ってそのまま紙袋を身体の後ろに隠す。伺うように藤岡は背伸びをした。

「エルメス？」

「バーキンよ」

「そ、そんな姑息な手段に乗ってたまるもんですか！」
「新作」

「う……っ！」

「しかも国内20の限定品。五分で完売」

「は、話くらいなら聞いてあげてもいいわよ。そうね、十分に行くから向かいのカフェで待っていて」

すっかり上機嫌になった藤岡は部屋の中へと消えていった。

ぽかん、と口を開けたまま成り行きを見守っているしか無かった伊東はようやく重い口を開いた。

「だ、男性ですよね？」

「ええ、通称オカマ」

「・・・ひよつとして、ふじおかまゆみ、だからオカマなんですか？」

「そうよ、可愛いでしょう？ 本名はか・・・」
遮るようにながちやりと扉が全開になる。

「ちよつと、愛！・・・あら、いい男」・・・じゃなくて、本名ばらしたら協力しないわよ」

再びドアが閉められ、辺りに静寂が戻る。

想像以上に規格外れな「仲間」が登場したことで伊東の胃痛はさなる激しさを増した。ひよつとして自分はとんでもない上司を「押しつけられた」のではないだろうか。

この胃痛にはどうやら暫く悩まされそうである。

4話 容疑者

「ふうん、あの連続殺人事件、あんたも捜査してるのね」

一通り説明を聞いたところで藤岡はアイスモ力を飲みながら肩肘を付いた。

日暮れ間近のカフェは学校帰りの高校生達でにぎわい始めている。その窓際の席で女を挟んで体つきの大きい男とオカマが一人、並んでドリンクを飲んでる姿は異様な光景だった。

ふと伊東が視線を上げると、外のテラスで温かい飲み物を飲んでいた女子高生と目が合った。彼女は意図的に視線を逸らした後、連れの女の子に目で合図を送る。彼女が偶然を装って視線を巡らしてこちらを確認すると、二人は何かを話しやがてくすくすと笑い始めた。

どんな会話をしているかは分からないが、少なくとも警察関係者だとは思われていないだろう。

伊東は額を押さえた。

「遺体損壊事件っていう可能性は？」

藤岡が聞くと愛が頷いて答える。

「皆無じゃないわ」

死因は特定されていない。毒物による中毒死という見解だったが、実際何か毒物が発見された訳ではない。

三人ともほぼ同じ位置に噛み傷のようなものがあるから事故より人為的なものが考えられるが、事故という可能性も捨てた訳ではない。

誰かが死体を発見して、衝動的に腹部を切り裂いたという可能性もあるが、三人ともとなるとその死自体に誰かが関与した可能性もある。だが、遺体損壊事件という可能性もまだ皆無とは言えなかった。

「容疑者はいるの？」

「重要参考人として警察がマークしている人物は何人か。そのうち一番嫌疑をかけられているのは、被害者三人と交際した経験のある男の子」

「男の、子？」

言葉を正確に読みとって藤岡は問い返す。

男の子というからには成人男子ではないということだ。

「高校生よ」

「随分プレイボーイね。可能性として考えられるのは、その色男くんに恋する女の子の嫉妬、あるいは色男くんが性的欲求を満たすために行った快楽殺人、それから食事」

「食事？」

明らかに異色な言葉に伊東は顔を上げて問いかける。

僅か笑いを浮かべて藤岡が答えた。

「吸血鬼って知っているわよね？ あれよ」

「そんな非現実的な」

「好血症だったかしらねえ。実際人の血を好む人いるのよ。だいたい自分の血だったり、恋人の血だったりするから表沙汰になつたりしないけどね、患っている人は少ないのよ？ だからといってそういう人が犯罪を起こす可能性なんて一般人のそれと大差ないけどね」

返ってきた言葉は案外までもで驚く。

見てくれはともかく、藤岡は想像よりはまともな人間で安心した。

「私を呼び出したってことは、そういう事件なんでしょう？」

「そうよ」

藤岡ははあ、と溜息をついた。

「・・・聞いちゃったからには協力するけどね、けど、エルメスの為にまたこういう厄介なことに首を突っ込んで私って情けないわ」

「そう言うあなたのこと、好きよ」

好きと言われて藤岡は彼女を睨む。

「疫病神に告白されても嬉しくないわよ。．．ね、ところで伊東くんさ、今晚暇あるの？ 親睦も兼ねて焼き肉でも食べにいかなあ
い？」

間延びした声で言われ、背筋に寒いものが走った。

それと同時に怒りを覚える。

殺人事件の話をしたあとに焼き肉の話だ。不謹慎な上に神経も図太い。

「今晚殺人事件が起きるのに、よくそんなこと言えますね」

「え？」

きょとした藤岡の顔を見て、伊東は自分の口走った言葉に気付く。「今晚おきるかもしれない」そう言っべきだったのに、「おきる」と断定してしまった。これでは自分が犯人で、殺人予告をしたかのようだ。

藤岡は視線を愛に落とす。

「ねえ、ひよつとして彼．．．？」

「ええ、可能性が高いわ」

冗談とも本気ともつかない表情で彼女は頷いた。

どうやら勝手に容疑者にされたらしい。

藤岡は不気味な笑いをうかべる。

「うふふ、じゃあ、今日は捜査本部でお泊まり会ね」 愛は子持ちだから帰って良いわよ、何かあったら夜中でも何でもたたき起こすから」

ステージ上では『北斗の拳』に出てきそうな格好をした男たちが騒がしいだけのロックを歌っていた。

グリーンティーを飲みながら一樹は手の甲に貼りつけられた電車のシールを見つめた。

中三の時、親知らずの抜歯のために行った歯医者にまだ通っているのは、虫歯がある訳でも矯正しているわけでもない。歯科検診やホワイトニングをしに行っているのだが、それも言ってしまうと口実でしかない。

椎名歯科医院の若い歯科医は、飾り気も愛想もない女性だった。

綺麗な人だが、いつも大きなマスクで顔を隠し抑揚のあまりない声で喋る。たまにマスクを外してもあまり笑わず、口調も女性にしてはぞんざいだ。

女性としての魅力に欠ける、というか、女性として無自覚というのか。とにかく取っつきにくい印象のある人だ。

それなのに何故か無性に会いたくなるときがある。

何かと理由をつけて会いに行く一樹に彼女は「また来たのか」と言う。先生に会いに来た、と言うと、馬鹿なこと言うなと切り返す。椎名歯科医はそれでも子供には優しく微笑みかける。治療の終わった子供にご褒美のシールをあげる。

うらやましく思わず欲しいと言うと、まだまだ子供だな、と苦笑しながらもシールをくれた。

そして今日は電車の形をしたシールだった。

「あれー、イロくん今日はお酒じゃないの？」

後ろから抱きつかれて飲み物をこぼしそうになるが、シールにだけはかけまいと死守する。

自分の事を「イロ」と呼ぶ人間は限られているので振り向かなくても分かったが、一応確認する。

「んー？ 何だ、イズミも来てたのか？」

「えへへー、イロくん探しに来たんだよー。なーんて」

メッシュの入った茶髪の少女はやけに露出の多い格好をしている。おそらくお気に入りのバンドがあってライブハウスに来たのだろう。腕にロゴのタトゥーが入っている。

「クヴァドラート？」

「アタリー」

「最近人気出たよな」

「ボーカルのSIVAがすごく格好良いの。もち、イロくんの方が格好良いけどねえー」

「おだてたってやるもんねえぞ。・・・ん？ 髪切った？」

指摘すると彼女は嬉しそうに微笑む。

「え？ 分かる？」

「イズミはその方が似合うな、可愛くなったよ」

「ホント？ うれしー」

彼女はそう言って一樹の横に座る。

「ねえ、この後暇？ スミちゃんの家を集まって飲むんだけど、イロくんも来ない？」

スミちゃんと言われて一瞬思考を巡らす。

知り合いにそう呼ばれているのは四人くらいいるのだ。どの「スミ」だろうかと思い、イズミと仲の良い澄子のことだと思い至る。

何度か会ったくらいだが、二回デートはした。

「ん、そうだなあ、どうせ暇だし行くか」

「やった、逆ナン成功！」

喜々として言ったイズミは一樹の腕に抱きついた。

（Eカップ。・・・ラッキーだな）

5話 涙も出ない

澄子のマンションに着くとマンションの前で数人の男女の姿が見えた。

一度二度顔を合わせたことのある奴と、中学時代の同級生が混じったメンバーだった。口もやることもろくでもない奴らだが、遊びにはうってつけだった。

彼らはそれぞれ買いだしてきたらしいビニール袋をもち、マンションの住人に迷惑になりそうな声で遠慮無く喋っている。

メンバーの中心にいた男は二人の姿を確認すると手で合図を送ってきた。

「イズミ！ あ、なんだ一色も一緒か」

「可愛くねえな、相変わらず」

「お前に可愛いなんて思われたかねえよ」

もつともなことをいいミクニは心底嫌そうな顔をした。

一樹の腕に絡みつくような姿勢でイズミが首を傾げる。

「ねえ、みんな何で中に行かないの？」

「それがスミの奴いないみたいなんだ。電話したけどケータイもつながらねえし」

イズミは眉をひそめる。

澄子は、約束したのに何も連絡せず出かけるようなことはしない。

「変なのー、買い物にでも行ったのかな？」

「そう思ってここで待ってたんだけど、お前らの方が先に着いた」

「じゃあ勝手に中に入っちゃおうか。鍵の隠し場所私しているし」

「そうだな」

「んじゃ、鍵取ってくるねー」

一樹が同意すると、イズミは走って玄関の方へ向かう。一同もそれに続いた。

普通のマンションと言った風情の建物は監視カメラが各階に備え付けられている。これがあると無いとでは格段に安全性が違う。女の子の一人暮らしならもつといい防犯システムのある場所に住んだ方がいいと思うが、十代の財力ではこの程度だろう。

イズミが鍵を持っているのを確かめて澄子の部屋へと向かう。

ふと、一樹は視界の端に何かを捕らえて立ち止まる。

「どうした？」

ミクニが怪訝そうに振り返る。

「あ、いや、今蝶が飛んでた気がして・・・」

「お前クスリでもやってんの？」

「実はちよつと」

「アブねー、近付くなよ」

冗談で言っていると、彼も冗談で返した。

きつと気のせいだろう。こんな冬場に蝶がいるわけがない。

鍵を開けて真っ先にイズミが飛び込んだ。

「おっじゃましーす」

一樹もそれに続き、その後を女の子達が入り、最後にミクニが入った。

「あれ？ 電気付いてるじゃん。スミちゃん、いるのー？」

呼びかけながら彼女はリビングへ向かう。

何か、嫌な予感がした。

イズミがドアを開ける。

一樹の視界に床に倒れた人らしきものが映る。

そして鮮烈な、赤。

とっさに一樹はイズミの目を隠した。

「みんな止まれ！」

びくつとして全員の動きが止まる。

かたかたと震えるのはイズミだ。目隠しをされた状態で彼女は硬直している。

「何だ、どうしたんだ？」

ミクニが後ろから問いかける。

竦んだまま動けないでいるイズミを引きずり出すようにして、一樹は一旦ドアを閉めた。血の気が引いて自分の手も震える。声はあごの裏に貼り付いてしまったようにざらざらとした。

「・・・誰か警察と、救急車を」

「何？ 何があつたの？」

どう説明すれば良いのだろうか。

彼は必至に言葉を選ぶ。

あれは死体だ。しかも事件性がある。

脳裏に浮かんだのはくだんの「連続殺人事件」だった。

「・・・澄子が、倒れていた」

「え？ うそ」

慌てて中に入ろうとする女の子を手で止める。

「行かない方が良い。・・・多分、もう、息がない」

「え？」

誰も、その言葉を理解できなかった。

「何・・・？ どういう意味？ 冗談でしょう？」

一樹は首を振る。

冗談でこんな事は言えなかった。一瞬しか見えなかったが、彼女は腹部を引き裂かれ、天井を向いていた。目は見開かれ、身体は硬直しているように見えた。

あの状態ではもう生きていない。だが、本当にもう助からないのか確かめる必要がある。もし助かるのなら、応急処置くらいは出来る。

彼はミクニにイズミを預け、耳打ちでどういう状況なのか簡単に説明する。みるみる彼の顔色が青ざめていくのが見えた。

「一応、確認してくる。警察への連絡、頼んだ」

リビングの扉を開け、中に入った。

ばたん、と扉が閉まったと同時に扉の外からイズミの悲鳴が聞こえた。

すぐにあの事件を連想したのは今まで自分のところに何度も警察が来ていたからだろう。

一樹は自分でも恐ろしいくらい冷静だった。

現場を荒らさないように澄子に近付き、腕を取って脈を確認する。手は冷たく、脈は完全に止まっていた。呼吸もない。

随分と経っているのだろう。白いカーペットに付着した血液が端の方が少し乾き始めていた。

「一色」

後ろからミクニが呼びかけた。

廊下では女の子の泣き声と、それを宥める男の声が聞こえる。

彼はリビングに入るとすぐにドアを閉める。一瞬澄子の姿を見てひるんだ様子を見せるが、必至に冷静になろうとしているのか、気丈な声で言った。

「警察、すぐ来る」

「そうか」

「・・・どうだった？」

「脈は、ない」

言って自分の声が無機質なのを感じた。

人が死んだ。

しかも彼女は知り合いだ。そしてその死体の近くにいるというのは、テレビの殺人事件の報道を見るくらいの感想しかない。

悲しくない訳ではない。だけど何か自分の感情に違和感を覚えるのだ。

つき合っていた女の子達が犠牲になったときもそうだった。悲しくて、嫌な気分になった。しかし、殺人鬼よりもっとおぞましい何かが潜んでいる予感がするのだ。そのせいで悲しむという感覚が薄らいでいる。

涙も出ない。

「お前、冷静だな」

「・・・言いたいことあるなら、はっきり言えよ」

「お前のせいだろ、これは」

その言葉がどういう意味を持つかも考えず、彼ははっきりと言った。余裕が無いのだろ。責めるような眼差しで彼は一樹を見ていた。

はっきり言えと言ったのは自分だから責められないが、正直少し傷ついた。

天野の弟にも似たようなことを言われたが、これは明らかに意味が違う。

「噂、お前だつて聞いているだろ？」

「殺された三人に共通した知人がいた。それが、俺だつて？」

冷静な一樹に対して、ミクニは明らかに怒りを露わにしている。ぎり、と歯ぎしりをする音が聞こえた。

「・・・そうだよ。お前の遍歴くらい大体知ってたんだよ。少なくとも二人はお前とつき合っていたんだ。お前がやったんじゃないのか？」

「それは違う。大体いつ俺が彼女を殺せる？ お前らの方が先に着いただろう？」

「その前に来ていたかもしれないじゃないか」

「俺はライブハウスにいたよ。イズミが証人だ」

「自分に有利に発言してくれそんな奴を選んだのか？ 最悪だな、お前」

馬鹿馬鹿しくなった。

一樹はミクニに向かって見下したように笑う。

「お前、自分がなに言っているのか分かっているのかよ？」

「何だと！」

「お前が俺を殺人犯にしたてようとしたんじゃないのか？ お前、イズミが好きなんだろう？ イズミは俺に好意を持ってる。お前にしてみれば俺は邪魔者だな」

「てめえ！」

いきりたつてミクニは彼の胸ぐらを掴む。

ぶちつと音がしてシャツのボタンが飛んだ。

「言つて良いことと悪いこと、あるだろうが！」

「・・・お前と同じ事言つたんだよ、ミクニ。放せよ。ケンカをしていい場所かどうかくらいお前でも分かるだろ」

「・・・っ！」

顔を真っ赤にして怒りを飲み込んだ男は、まだ冷めやらぬ雰囲気で一樹を突き飛ばすように放した。

一樹の顔を横目で睨んで彼はドアの方に向かう。

「・・・死神が」

吐き捨てるように言い残して、ぱたり、とドアが閉まる。再び部屋は静かになった。

廊下側からはどん、と壁を殴るような音が聞こえる。

一樹は落ちたシャツのボタンを拾い上げてポケットに仕舞い込んだ。

「・・・言われなくても分かっているさ」

自分の関わった人間がこれだけ沢山死んでいるのだ。誰よりも自分が死神だと思っているのは自分自身だ。そんなこと、人に言われなくても、分かっている。

6話 深夜2時の警察署

夜中になるとたんに濃いコーヒーが飲みたくなるのは体質だろう。

コーヒーを飲むと眠れなくなる人が多いらしいが、雅斗の場合はそうでもない。どちらかと言えばアルコール類の方が眠りを妨げる結果になる。別に法律云々を守るとかそういう理由ではなかったが、雅斗は滅多な事でアルコールを飲まなかった。

いつものようにエスプレッソマシーンを動かしていると、テーブルに置いてあった携帯電話が震えた。

一樹の携帯電話からだった。

出ると、そこから聞こえたのは聞き覚えのない声。彼は「伊東」と名乗り、警察官だと告げた。驚いているとさらに驚く内容が付け加えられる。そして「強制」ではないが、警察署まで来てくれないか、と言われる。

さすがにこの時間は寒くなる。

今年、着るのは二度目になるフードの付いたカーキ色のジャンパーを着込み、家の前でタクシーを拾った。

出がけに母親に文句を言われたが、そんなことよりも一樹の事が気になっていた。

殺人事件の、第一発見者になった。

重要参考人として任意同行を求められた彼は仕方なく警察署に赴いた。容疑者でもないのだから身元引受人が必要な訳ではない。ただ、雅斗に来て欲しいと言っているそうなのだ。他に連絡のとれそうなところもなく、警察は仕方なく彼に電話をしてきたのだ。

被害者は一樹の知人の女の子。まだ十代の女の子と聞いて少し驚いた。

「・・・ああ、でも天野じゃなかったのか」

雅斗が少し残念そうに呟くと、タクシー運転手は少し怪訝そうに

した。

タクシーが警察署の前に着くと時計はもう深夜二時を指していた。普段から近寄りがたいイメージのある警察署は深夜二時ともなるともつと近寄りがたくなる。だからと言って警察署の前をうろろろしているのも変だ。

意を決して中へと向かう。

入り口で雅斗を呼び止めた守衛らしき警官に事情を話すと、背の高い刑事が出迎えに来た。

「一色一樹くんのお友達ですね？」

「はい、そうですけど」

「彼は今会議室の方にあります。どうぞ」

事件に何の関係もない自分が入っても良い物かと迷ったが、促されるままに中に進む。

会議室の前には数人の男女がソファに座り込んでいた。

雅斗と年は変わらない位だろう。一樹と負けず劣らず派手な髪と服装をしている。だが、その顔色は暗い。

雅人達が近付くとちらほらと顔を上げたが、何も言わずに再び下げた。一人の男だけが何故か雅斗を睨み付けていた。

「どうぞ」

刑事に言われ、雅斗は会議室の中に入る。

会議室と言ってもそれほど広さはない。長机を四つほどくっつけて並べただけで一杯になってしまうようなスペースだった。

その端に仏頂面の一樹が座っていた。

年配の刑事が扱いに困ったように腕組みをしている。

一樹は雅斗の存在に気が付くとたんに笑顔になった。

「よう、悪いな、雅斗」

軽い口調で言った彼はいつもと変わらない。

「何だ、元気そうじゃないか」

「元気だよ。ただまあ、色々あってさ。・・・な、おっちゃんも俺帰っていいだろ？ もう同じ事何度も聞かれてうんざりしてん

だよ」

そう言うのと彼の向かい側に座った刑事が渋い顔をする。

刑事の考えていることが大体読めて雅斗は口元を押さえる。

おそらくあの年配刑事は一樹が犯人だと思っている。むしろ証拠も無しに下手なことは言えない。だから任意同行という形でしか事情聴取が出来ないのだ。

一樹はこれで頭の回転が速い。物事に淀みなく答えてかえって疑いを深められたのだろう。

悪意もない。頭もいい。刑事としてはやりにくい相手なのだろう。その上彼は高校生だ。長時間拘束している訳にもいかない。

何とかして短時間で話の矛盾点を引き出そうとでもしたのだろう。年配の刑事の作戦は失敗に終わったようだ。

「任意同行つてのは帰りたいときに帰れるんだろう？ 俺はちゃんと全部話したし、雅斗も来たことだから早く帰りたいんだけど？」

年配の刑事はちらりと一樹をみて、視線を雅斗に向ける。

「有賀、雅斗くんと言ったね」

「はい」

「彼とはどういう関係で？」

「クラスメートで友人です。高校に入って知り合いました」

「良くこんな時間に出て来られたね」

雅斗は優等生の笑みを浮かべる。

「彼が、心配でしたから」

「随分と仲が良いようだね。あまり仲良くなるタイプには見えないのだけど」

「人を見かけで判断してはいけしないと、教えられましたから」
「ぶはっ！」

変な声を上げて一樹が吹き出す。

ネコをかぶっている態度がおかしいのだろう。睨み付けなくなるのぐつとこらえる。

裏を見据えように刑事が彼の目を見つめていた。雅斗は逸らさな

い。

やがて男は息を吐いた。

「・・・自宅まで送らせましょう」

廊下に出ると、先刻いた男女の姿はなくなっていた。

代わりに妙に体格の良い婦警が立っている。

婦警、と言うのには少し語弊があるだろうか。婦警の格好をした大男とでも言うべきだろうか。顔はそれなりに良いのだが、どう見ても男にしか見えない。

彼女（？）は片手に十字架のようなものを持って仁王立ちをしている。伊東と並んでもひけを取らないくらい大きい。

深夜二時にこんなところにこんな格好でいるのなら、酔っ払いか何かが保護されてきたのだろうか。

伊東が蟀谷を押さえて溜息をついたのが聞こえた。

「藤岡さん、何を・・・」

「あちよー、覚悟おー!」

妙な奇声を上げて婦警（？）が一樹目がけて飛びかかる。持っていた十字架が彼の額へ直撃する。

「ぐはっ!」

ばしっ、と痛そうな音を立てて直撃した十字架は跳ね返り宙を舞う。衝撃を受け、一樹の身体が大きく後方にのけぞった。

「いつ、いつてー!!!」

「やったわよ、イトメくん! この子痛がつているわ! 十字架で! 吸血鬼よ、やっぱり吸血鬼だったのよ!」

「誰だってこんな金属片をいきなりぶつけられたら痛がりますよ! す、すみません、大丈夫ですか?」

伊東はそう言っただけで倒れた一樹を助け起こす。

一樹は涙目で悪態を付く。

「何だよこのおっさんは!」

「おっさんなんてレディに向かって失礼ね！ あら、可愛いわ、この子。お姉さんとデートしない？」

突然矛先を自分に向けられて雅斗は本能的に関わりたくないと思っ

った。

「遠慮しておきます」

「もてるな、色男」

立ち上がりながら揶揄するように笑う。雅斗は嫌そうにした。

「嬉しくない」

「本当にすみません」

本当に申し訳なさそうに言う伊東に一樹は苦笑する。

「苦労してんのな。あんたが謝る事じゃねえし、ケガ無いし、それに少し目が覚めた」

反撃とばかりに雅斗は切り返す。

「マゾ」

「うるせえよ」

悪態をつくも僅か笑っている。

本当に少し目が覚めたようだ。

伊東はもう一度謝り、正門前で待っているように言う。婦警（？）は不気味な笑いを浮かべながら伊東の後を付いていった。

二人が去ったところで雅斗は彼を見た。額にくっきり十文字が刻まれている。

「・・・大丈夫か？」

彼は額をさする。

「ああ、あのオカマ思い切りやりやがったけどな」

「そうじゃなくて、大丈夫か？」

つり上がった瞳が、僅か苦痛に揺れる。

知人の死体を見てしまったのだ。そうでなくても相次ぐ殺人事件の被害者が自分に関わりがある人ばかりで精神的に病んでいたのだ。強がって、何も感じていない風を見せていても、彼は明らかに痛がっている。

無理して笑っている彼を見て、雅斗は痛ましくなった。そうしていないと大声で喚きたくなるのだろう。自分を呪いたくなるのだろう。

だから笑う。

けれど、それは周りの人間にとっては、人の死を何とも思わない不謹慎な者としてとらえられる。

誰も彼のそういうところに気付こうともしない。

彼は雅斗の肩にとん、と額を置いた。

「泣いたっていいよ」

「・・・ばーか。泣かねえよ」

言った彼の声が僅かに震えたのを雅斗は指摘しなかった。

7話 静かな朝と

新聞の一面を見て、真里は顔をしかめた。

全国紙だというのに、トップニュースに登ったのはこの街で起きた連続殺人事件のことだった。事故か、殺人かも分からない事件に、世間の注目は高い。

紙面に踊るのは「四人目の被害者」の文字。そして、遺体が発見されたマンションと警察車両の映し出されている写真。立ち入り禁止のテープが妙に生々しく映っていた。

学校の文集かなにかから切り抜いてきたのだろう。下の方に被害者となった女の子の写真が貼りつけられていた。

キツチンの横にあるドアが不意に開かれた。

「おはよう」

「・・・おはよう」

真里が呼びかけると弟の眠そうな声が返ってくる。

産まれるまで女の子と信じられていた彼は、母親のお腹にいるときから決まっていた名前があつた。産まれて驚いたものの、両親はその名前で強行したようだ。おかげで彼は女の子のような名前だとからかわれている。

弟には悪いが、産まれるまで男の子だと思われていた真里は「マサト」と名付けようとして思いとどまってくれた事に感謝している。

「遅くまで勉強していたの、亜夜？」

「ああ、うん。一応受験生だからね」

「推薦で来ればいいのに。亜夜くらいならうちの学校楽勝でしょう？」

「うん、でも、フェアじゃない気がするから」

「真面目ね」

かく言う真里も一般入試で受験をした。

総代にこそなれなかったが、それなりに良い成績だったと聞いて

いる。

亜夜は冷蔵庫から牛乳を取り出すと少し上げて示した。

「姉さんは？」

「もらうわ。甘めをお願い」

「ん、了解」

そう言うとは彼は二つのカップに注いで電子レンジにかける。ホットミルクを作るときは、鍋よりもレンジの方が便利だ。

「母さんは、またゴミ出し？」

「うん、だから暫く戻ってこないと思うわ」

「近所づきあいも大変だね」

「楽しんでるからいいんじゃないの？」

真里はくすくすと笑う。

ゴミ出しに行くとも母親は二、三十分は戻ってこない。近所の主婦の井戸端につき合っているのだ。「嫌だ」と言いながらもゴミ出し時間をずらしたりしないところを見ると、彼女のそれなりに楽しんでいるらしい。

「・・・四人目？」

不意に亜夜に問われ、真里は彼を見る。

新聞の記事のことを言っているのだ。

「ああ、うん。連続殺人事件の・・・って、朝からする話じゃないわね」

「何度も言うけど、遅くなるようなら迎えに行くからね。タクシー使ってもいいから、とにかく安全第一で帰ってきてよ」

「分かっているわよ、心配症ね」

「姉さんは危なっかしいから」

「失礼ね」

真里は亜夜を睨み付けた。しかし、口元にどうしても笑みが浮かんでしまい、凄みが出ない。

弟の気遣いが嬉しくもあったのだ。

ポン、と小気味のいい音を立ててトースターのパンが跳ね上がる。

香ばしく焼き上がったパンを皿に取り、一方にはバターとハチミツ、もう一方にはマーガリンとジャムを塗る。

亜夜は昔からイチゴジャムが好きなのだ。

「ありがとう」

「いえいえ。そっちも出来そう？」

「あと十秒」

ピー、と加熱終了を知らせる音が鳴って亜夜はミルクを取り出す。片方にはグラニュー糖を加え、かき混ぜる。

「はい、完了。・・・あ」

カウンターにカップを二つ並べて亜夜が口元を押さえる。

「どうしたの？」

「今日、飼育当番なの忘れてた」

「あら。じゃあ少し早く出ないとダメね。でも」

「でも？」

真里は天野家で定番になっている言葉を言う。

「朝食はゆっくり、ね？」

「はいはい」

言われるだろうと思っていた亜夜は、笑って自分の指定の場所に座った。

結局昨夜は一樹のアパートに泊まった。

ベッドを置けば部屋の半分くらいは占拠されてしまう四畳半は男の一人暮らしにしては綺麗な方だろう。それは一樹がきれい好きだからと言っわけではなく、単にこの部屋に帰ることが少ないからだということが推測できた。

「おい、学校どうする？」

ベッドに座り、雅斗は一樹を足でつついた。

毛布にくるまって寝ていた彼は眠そうな声で問う。

「んー、一限なんだっけ？」

「現国」

「やーすーむー」

そう来るだろうと思っていた雅斗はあまり気にもせずに頷く。

「分かった。先生に伝えておく」

「うん？ 何だ、お前は行くのか？」

「一樹と違って真面目なんだよ、皆勤賞狙ってるんだ。ん、起きるのか？」

裸の上半身を起こしてぼさぼさの髪をかき上げる。

学校に行かないのなら無理に起きる必要もないだろう。

「やっぱ俺も行く」

「・・・何だよ、気持ち悪いな」

「つれないねえ、一晚を共にした仲なのに」

雅斗は鼻で笑う。

「同じ部屋で寝ただけなのは修学旅行と大差ないだろ」

「俺、この部屋に人を泊めたのお前が初めてだぜ？」

「それは随分破格の待遇で」

「だからお前は特別な存在なんだよ、ハニー」

「人を甘ったるい名前で呼ぶなよ。・・・洗面所かりるからな」

「ちゃんと返してねん」

「おまけ付きで返してやるよ」

定番の会話を交わして部屋を出る。

四畳半を出るとすぐにキッチンと玄関が見える。その脇にあるのが洗面所と風呂場だった。廊下などという無駄なものは一切排除されている。

キッチンを通って洗面所に向かおうとしたちょうどその時だった。

こんこんと扉を叩く音が響く。

このアパートにはインターホンが無いのだ。

「出てー」

部屋からやる気の無さそうな一樹の声。

「お前な」

「この格好じゃ出られないもん。どうせ大家か何かだから気にするな」

「・・・たく」

仕方なく雅斗は鍵を開け扉を開く。

「はい、どちら様？」

雅斗が出ると相手は一瞬驚いたようにした。

女の人だった。眠そうで、気怠るい雰囲気のある女性だったが、目の奥には微かに鋭いものが混じった人だった。

二十代前半くらいだろうか。パンツスーツを着ているのでもう少し年上のようにも見えるが、顔立ちは若々しい印象を受ける。元々童顔なのだろう。そうだとすれば彼女は二十代後半にも見えた。

一樹の恋人の一人だろうか。

「一色一樹くんはいるかしら？」

彼女はにこりと笑う。

「いますけど、今はちよつと出られません」

彼女は笑顔を崩さないまま命令する。

「すぐに出して」

「え？」

「いるなら、すぐに出しなさい」

笑顔で言われているのに、有無を言わさぬ感覚に襲われ雅斗は一樹を振り返る。

異変を察知したのかTシャツを着た一樹が四畳半から顔を覗かせる。

「誰？」

彼女を目にした一樹は口笛を吹く。

下品に聞こえるはずの音だったが、悪意を感じないために、それほど粗悪に聞こえなかった。ちらりと女性を振り返ると彼女は気を悪くした様子もなかった。

「朝からラッキーだなあ。お姉さん、会ったこと無いはずだけど、俺に何か用？」

「捜査にご協力願います」

「……え？」

彼の表情が凍り付く。

彼女は懷から警察手帳を取り出して開く。

盗難防止のためか、紐の付いた警察手帳はドラマで見る物とは少し違う。本物かどうかは分からなかったが、そこに添付されている写真は紛れもなく彼女だった。

溜息をついて彼は心底残念そうに呟く。

「岩崎、愛？ 刑事さんだったのか」

「何を残念がつているのか知らないけれど、任意同行してもらっわ」「美人の誘いなら喜んで」って言いたいところだけど、勤勉な俺はこれから学校」

よく言うよ、と小声で突っ込みを入れると一樹が睨んでくる。流し台にもたれかかって雅斗は肩をすくめた。

「あなたの担任には快く許可を頂きました。心配する必要はないわ」「任意同行って任意なんだろう？」

「任意よ。でも、強制執行しても構わないのだけど」

「罪状は？」

「飲酒、喫煙、ギャンブル、ケンカは立派な傷害罪だし、器物破損、不法侵入……他には売春とか？」

「してねーよ」

最後のだけは否定するところを見ると、他は心当たりがあるらしい。

雅斗はたまらず吹き出す。

「とにかく、優しくしてあげるから、一緒に来なさい？」

優しく言われれば言われるほど不気味な言葉つてものはある。

すっかり鼻白んだ様子の一樹は駄々を捏ねる子供のようにとんでもない条件をだした。

「・・・雅斗も一緒じゃなきゃヤダ」

精一杯の抵抗のつもりなのだろうか。いくら何でも事件に関わり
のない彼と一緒にいくなんて無理だ。

そういう事も見越して言ったのだろうが、それはいともあっさり
許可される。

「いいわ。捜査協力は公欠扱いになるから問題はないわね、雅斗く
ん？」

「え？ あ・・・はい」

いきなり自分に振られて反射的に頷いてしまった。
恨めしそうに一樹が女刑事を睨む。

「・・・汚ねえ」

「大人ってそう言うものよ、知らなかった？」
女刑事は朗らかに笑った。

8話 蝶の夢

蝶が舞っていた。

黒い翅に赤い点を落としたような蝶。

光る筆で宙に描かれたような輪郭だけの蝶。

何かを嘲笑うかのように夜空に舞う蝶達が。

ゆつくりと集まり始めていた。

蝶達の集まる中心には一つの巨大なサナギがある。血を湛えたよ
うなどす黒い赤をしたサナギがあった。

（羽化する）

蝶達はサナギから蝶が孵るのを祝福するかのように一匹、また一
匹と集まり始める。その数は百や二百をはるかに上回る。

（殻が破られる）

彼はサナギの前に立っていた。

いけない、と思う。

この蝶をサナギから孵してしまつてはいけないと思う。

それは本能のようなものだ。誰かから教えて貰ったわけではない、
本能的にその蝶は危険なものだと知っているのだ。

幼虫だけでも危険なのに、蝶が羽化して再び卵を産み付ける事が
あればこの街は取り返しの付かない結果になってしまう。

彼はゆつくりと手を伸ばした。

ぱり、と小さな音を立ててサナギの背にひびが入る。

（だめ、だ）

その蝶は危険だ。

他の蝶達とは違う。持つて産まれる力が明らかに違う。羽化させ
てはいけない。絶対に羽化させてはいけないものなのだ。

（コドク）

恐ろしい呪術だ。

蝶には恐ろしい呪術がかけられている。それは血を求め、彷徨う。誰かが幼虫を養っているのだ。だから成長し、羽化しようとしている。

力のある蝶達は、自らの長の誕生に喜び、祝福の声を上げている。

街に巣喰った蝶を、

誰かが退治しない限り、

永遠と、

悲劇は繰り返される。

繰り返してはいけない。羽化させてはいけない。

(だけど、どうやって?)

どうやったらこの蝶の成長を止めることが出来るのだろう。羽化を妨げることが出来るのだろうか。

殻からゆつくりと蝶は羽を出す。

まだ湿った柔らかい翅が外気に触れ、徐々にその形を取り戻していく。羽ばたくにはそれほど時間は必要ない。

・・・復活までに、それほど時間は必要ない。

「つつつ!!!」

声にならない悲鳴を上げて勇氣はベッドから飛び起きた。

全身にねっとりとした嫌な汗をかいている。ベッドには人の形がくつきりと残ってしまいそうな程はつきりとした形を残していた。

あれは、夢だ、と自分に言い聞かせるように呟く。

呼吸を整えて少年は時計を見上げた。そろそろ母親を起こさないと仕事に遅刻してしまうだろう。

大きく背伸びをして、彼は夜遅くに母親が仕事に出て行ったことを思い出す。

（ああ、そうか。あれから帰らなかったんだっけ）

勇気の母親は警察官だ。

警察の階級の事はよく知らないが「警部」というからには結構な役職だと思う。責任ある立場から事件があると夜中でも平気で呼び出される。

昨日もそうして呼び出され、ついに朝まで帰らなかった。

普段は家事もろくにしないいい加減な母親なのだが、仕事の時だけは格好良いと思う。

彼女は母親というより父親なのだろう。家に「母親」の存在がない以上、子供が家事を手伝うのは当然だし、祖母や近所のおばさんが世話を焼いてくれるので不自由に感じたことも不満に思うことも殆ど無かった。

ただ、やはり朝起きて一人だというのは辛いときがある。

（やっぱ、じいちゃんのところに行こうかな）

今はアパートに母親と二人で暮らしているのだが、こうして母親が家を空けることが多いので心配した祖父と一緒に暮らそうと言ってきている。

祖父は好きだし、一緒に暮らせば母親の心配も経済的な負担も減る。だが、一緒に暮らすのには問題があった。

場所は神社の敷地内で、祖父は宮司なのだ。

勇気を後継者に欲しがっている祖父にはそういう思惑もあるのだろう。今でさえ半ば強制的に「修行」や「勉強」をさせられる。一緒に暮らすとなるともっと大変なことになりそうだった。

だけど、嫌な夢を見たとき一人だと無性に恋しくなるのだ。

「・・・コンビニにするか」

朝食をコンビニ弁当で済ますのは栄養が偏るので良くない。

だけど、このまま家にいる気にはなれなかった。早く誰かに会って嫌な気持ちを払拭させたかった。

勇気はパジャマを脱ぎ捨てた。

勇気のアパートから一番近いコンビニは徒歩で五分とかからない。人通りの多い交差点の近くにあり、勇気のマンションからは細い路地を通って行くことができる。

黒いランドセルを背負って小走りに路地を曲がると、突然顔面に何かがぶつかった。

「うわっ！」

「わっ！！」

勢いをつけていたために、勇気は後方に転倒する。ランドセルというクッションがあつたために尻餅を付くのは免れたが逆にそれが仇となりコンクリートに頭をぶつける。

「ご、ごめん、大丈夫だった？」

心配そうな声が上がって降ってきた。

一瞬女の人かと思ったが、それは誤りだとすぐにわかった。その人は学ランを着ていたのだ。この辺りの中学校のもので、数年後には勇気も着ることになる。

「ケガ、ない？」

「あ、うん、何とか・・・」

本当なら文句を言つてやろうと思ったが、相手があまりにも毒気がないので勢いを殺がれる。それに転倒して頭をぶつけただけでも格好悪いのに、ここで文句をつけたらもつと格好悪くなる。

勇気は自分の方こそごめんと謝ろうとするが、酷く嫌な感じがして言葉を詰まらせた。

謝るのが嫌だとかそう言うことではない。

彼の周りの空気が赤黒く淀んでいる感じがしたのだ。彼自身ではない。そう、それは隣にいた人の香水の香りが移ったようなイメージ。

「ケガ無くて良かったよ。それじゃあ、気をつけてね」

彼はそう言うとし少し慌てた様子で中学校の方向に走っていく。

「あ・・・」

何か言わなくては。

そう思ったがやはり言葉が出ない。これをどう説明して良いのかわからなかったのだ。

彼が走り去るのを見つめていた勇氣はやがて息を吐いてコンビニへと向かう。今日は朝から嫌なものを二度も見ってしまった。

ふと、勇氣の視線が下がる。

足下に小さな人形が落ちていた。

キーホルダーか携帯のストラップくらいの大きさだろう。男の子の形で胸に「A」と刺繍されている。手作りなのだろう。

（さっきの人かな）

振り向いてももうそこに人影はない。

そのままにしておいても良かったのだが、勇氣は小さな人形を拾い上げた。

「え？」

一瞬、勇氣の脳裏に蝶の姿が浮かんた。

それは今朝見た蝶の大群。

そして、羽化しそうなサナギ。

「・・・何だ？」

頭の中に流れ込んできたイメージは一瞬だけで消えた。

残った人形は平然として微笑んでいる。

僅かにポプリのような優しい匂いがした。

9話 クヴァドラート

長距離の走り込みをしながら尚は手に入れたチケットのことを考えていた。朝練の時間に有賀雅斗の事以外を考えているのは実に久しぶりの事だったが、今日ばかりは仕方ない。

苦勞してようやくクヴァドラートのライブのチケットを手に入れたのだ。

少し前まではもう少し入手が簡単だったのだが、最近は人気が出てきたためにすぐに完売してしまう。

小さなライブハウスではせいぜい百人が限度だ。

ライブハウスにコネでもあれば簡単に手に入れられるのだろうが、残念ながら尚にはそういうつてはない。

クヴァドラートはこの辺で活動しているインディーズバンドだ。過激な化粧とパフォーマンスをするヴィジュアル系にしては珍しく綺麗な歌を歌うので最近知名度も人気も上がってきていた。

結成当初位から知っている尚にしてみれば、話題が出てから気付いた新生ファンなど本当のファンではないと思っている。彼らのせいでチケットを手に入れられる確率も低くなつて腹立たしい限りだ。もつとも、ライブの回数は増えたのだから、その点ではファンが増えたことを感謝しているのだが。

「せんぱーい、今日随分と機嫌良いんですねー」

後ろから追いかけてきた一年に言われて尚は一瞬頬をゆるめるが、すぐに真顔に戻る。

「……そう？」

「はい、先輩のフォームって格好良いけど、今日は一段とそうですよ。何か良いことでもあったんですか？」

そんなに自分は分かりやすかつただろうか。

単純な自分が腹立たしいが、自分の走り方を褒められたのは悪い

気がしなかった。

「ありがとう。でも別に何も無いわよ」

「そうなんですか？ 彼氏でも出来たのかな、ってみんな噂してるんですけど」

一瞬、思い描いた有賀雅斗の姿に赤くなる。

彼とはつき合っている訳ではない。片思い、というか、想いを伝えた事すらない。それなりにアピールしているつもりだから向こうもこっちの気持ちに気付いているだろうが、残念ながらまだそういう関係にないのだ。

「あ、相手がいないわ」

「江田先輩とはどうなんですか？」

一瞬、金だらいが上から降ってきたような衝撃を味わう。

あまりにもシヨックで暫く口がきけなかった。

よりにもよって何故あのネクラが相手なのだろう。図体ばかりでかくて何を考えているか分からない奴。その名前が浮上ただけでシヨックだった。

「・・・先輩？」

呼びかけられてようやく硬直が解ける。

「な、何であいつの名前が出るのよ」

「え？ だって、仲がいいじゃないですか」

「冗談じゃないわ！ あんなネクラ誰が・・・」

「えー、でも、江田先輩って結構人気あるんですよ。無口だけど、格好良いし」

格好良い？

どこが？

シヨックのあまり再び硬直しかけた尚は足踏みをしながら江田の姿を探した。彼は陸上部とは別のコースを走っている。女みたいいだらだら伸ばした黒髪を縛っている男はやはり只の身体の大きいだけのネクラにしか見えない。

尚は再び走り出し、後輩の横に並ぶ。

「・・・趣味悪いわ、あなたたち」

「いいと思うんですけどねえ」

誰が誰を格好良いと思ってもそれは個人の自由だ。尚は敢えてそれ以上は何も言わなかった。

せつかく良い気分だったのにこれでは台無しだ。

イライラして向けた昇降口に、大嫌いな少女の姿を認めて尚は更に不機嫌になった。天野真里はいつものように長い髪をなびかせて歩いている。せめてもの救いは今日は雅斗と一緒にいないということころだろう。

(?)

尚は不意に立ち止まる。

校庭から彼女に向かって走っていく姿があった。その意外な人物は江田だった。

後輩達を先に走らせて尚は校庭と昇降口をつなぐ階段を駆け上がった。

ぼそぼそと低い声が聞こえる。

部活をサボっている江田に文句を言うために来たのだが、気になつて見に来たのだと思われても嫌だ。木陰に身を隠して様子を窺った。

「・・・心配症ね、そんなこと無いから大丈夫よ」

「そうか。なら、いい」

何の話をしていたのだろうか。

珍しく江田が微笑んでいる。

あまりにもあり得ない光景に尚は戸惑った。江田と天野が一緒にいると言うだけでもおかしいのに、あの江田が微笑んでいる。

彼はポケットから何かを紙のようなものを取り出すと天野に手渡す。

「なにこれ？」

「クヴァドラートのライブのチケットだ。興味無ければ捨ててくれて構わない」

「二枚あるわ」

「ああ、それは・・・の分だ」

「それじゃあデートね。楽しみにしているわ、邦彦さん」

（く、邦彦さんー???）

途中の良く聞き取れない単語があつたが、そんなことより「デート」という単語と天野が発した「邦彦さん」という呼び方に驚いてそれどころでは無かつた。

どう考えても江田がデートに誘い天野がOKした、という会話だし、しかも呼び方やしゃべり方からいつて親密な関係だと言つことが十分予測できた。

天野と江田がつき合おうと知つたことではないが、ネクラの江田までもがあの「純白天野」の蜘蛛の巣に引つかつたのだと思うとショックだつた。どうやってたらし込んだのか知らないが、天野のあの外見に騙されるバカ男が一人増えたのには間違いない。

怒りを飲み込むようにして尚は拳を握りしめた。

だから天野真里は嫌いだ。

何も知りませんというような顔をして、奥底では男をたらしこむ術を心得ている。彼女は自分に貢がせる為の男（江田）をあつさりと手に入れたのだ。

その貢ぎ物が自分が苦勞して手に入れたクヴァドライトのチケツトだと言つことが更に怒りを増幅させる。

「・・・沢田？」

天野との会話を終えて校庭に戻ろうとした江田が、尚の姿を見て硬直する。

反射的に彼女は拳を振つた。

強く当てるつもりはなかつたが思いの外強い感触が手の甲に残つた。後悔することよりも怒りの方が勝つていた少女はそのまま男に怒りをぶちまける。

「部活サボって女といちゃついてんじゃ無いわよ！ このヘタレ男が！」

遠くで、子供の泣き声を聞いた気がした。

身体を起こし、伊東は時計を見る。

セツトしてあったはずの目覚まし時計は止まっていた。誰かが故意にそうしたのが分かるように仮眠室のサイドテーブルの上で電池が抜かれた状態で放置されている。伊東は内ポケットに入っている携帯電話で時間を確認する。

「十時・・・二十五分。・・・十時!？」

伊東は慌てて身体を起こした。

本部会議は九時から始まる。丸一日以上眠っていないかった伊東は、事件発生の報告を聞いて駆けつけた愛のすすめで仮眠室に入った。八時半には起きて会議に備えようと思っていたのだが、目覚ましが鳴らなかった為に寝坊をしてしまった。

当然目覚ましなど理由にならない。

彼は慌てて仮眠室から飛び出す。

「すみません、寝過ぎしました!」

「あ、おはよう、イトメくん」

行儀悪く机の上に腰をかけてコーヒを飲む藤岡は間延びした様子で言う。すっかり勢いを殺がれてしまった伊東は周囲を見回した。いつものメンバーの半数以上が出払っている。会議に参加しているわけでは無く、既に会議が終わって捜査に向かっていることが分かった。

「・・・岩崎警部は？」

「愛なら容疑者確保に向かったわよ」

伊東は眉をひそめた。

「容疑者確保? 状況が飲み込めませんが」

藤岡は机の上から飛び降りファイルを伊東に手渡す。伊東はそれをめくって内容を確認した。それは今朝の本部会議の内容が示されている。

ざっと目を通して彼は絶句する。

それは一色一樹を重要参考人とすると言っ旨。つまり、本部は彼を容疑者として捜査する方針を固めたのだ。

「馬鹿な、彼は犯人ではないのに！」

伊東が叫ぶと、藤岡が頷く。

「イトメくんもそう思う？ だから愛も連中が彼と接触する前に‘保護’に向かったの。あいつらに任せていたら連行するために色んな罪でつち上げられちゃうもんね。公安よりずっとタチが悪いわ」「そんな勝手な事して良いんですか？」

「そのための‘警部’だもの。それに逮捕に踏み切れるだけの証拠が上がって来なければ0班の仕事にはノータッチが基本原則なの」「・・・0班？」

ああ、と藤岡は笑む。

「その様子だと何の説明も受けていないんですよ。伊東くんの所属は一応一課の強行犯系になってたからそうだろうと思ったわ。0班つてのは、心霊現象を扱う特殊捜査班のことよ。ま、つまり私たちのことね」

「たち？」

「愛と、イトメくんと、私と、あと鑑識の何人か。言っておくけど冗談とかじゃないからね？ ここの0班は警察庁から声がかかるくらい凄いんだから」

伊東は首を傾げた。

こんな説明では良く分からない。

藤岡は声を立てて笑った。

「ま、そのうち分かってくるわよ。それより、仕事よ。イトメくんが目覚ましたら行けって言われている所があるの」

「どこへ？」

「うふふ、秘密」

藤岡は口元に手を当てて笑う。

こういう仕草をするのが可愛い女の子がするならまだしも、オカマがすれば気持ちが悪いだけだ。

伊東は軽い目眩を起こした。

10話 禍々しい翹

突然押しかけてきた女刑事の車はやや速度オーバーの状態で道路を走っていた。まさか自分まで任意同行させられるとは持っていなかった雅斗はぼんやりと流れる景色を見ていた。

任意同行と言うよりは強制連行状態だったが、パトカーではなく自家用車であつたのがせめてもの救いだ。もつとも、これが覆面ではないとは言えなかつたが。

「ねえねえ、愛ちゃんどこまで行くの？」

後部座席の左側に座つた一樹は助手席に抱きつく形で岩崎刑事を見た。

高校生という立場を良いことに軽い口調で話すのはまだしも、よりもよつて刑事を「ちゃん付け」で呼ぶのはさすがに度が過ぎる。雅斗は肘で一樹の脇腹を突いた。

「何だよ、いいじゃん別に」

彼は口をとがらせた。咎められた理由が分かっているのだ。分かつていてやつているのだからたちが悪い。

運転席の刑事は楽しそうに笑つた。

「いいのよ、雅斗くん。ちゃん付け大いに結構。あなたもそう呼んでくれて構わないわ」

「え？」

「むしろそう呼びなさい、ね？」

「あ……はい」

またもや反射的に頷いてしまい、雅斗は戸惑つた。

この女性には何かこちらの意思に反して強制させてしまうような妙な力があるように思えた。

本人がそう呼べと言っているのだから、わざわざ嫌味のように「岩崎刑事」と呼ぶことも無いだろうが、刑事に向かつて「愛ちゃん」

と馴れ馴れしく呼ぶのにも抵抗がある。

それなのに唯々諾々と従ってしまいそんな感覚は今まであまり経験にない感覚だった。

年齢的には新米刑事に見える女性だが、何十年も刑事をしてきたようなベテランの風格がある。この女刑事を侮ってはいけないと雅斗は感じた。

「で、どこに行くの？」

「現場検証よ。あなたに確認したいことがいくつかあるのよ。まあ、昨日と同じ事を聞かれて面倒だとは思っけど、ちゃんと答えて頂戴ね？」

「そんな風に言われたら、俺、スリーサイズまで答えちゃうかも」
「・・・・・・・・・・」

突っ込みを入れるべきか否かを考えて、結局雅斗は沈黙した。

マンションの前に辿り着くと酷く嫌な感じがした。

昨夜人が死んだと言うことや、近所の野次馬が遠巻きに見ている事などは別に気にならなかった。むしろ、昨日人が死んだという割に静かだという印象だ。警察車両は今のところは一台だけで、それも捜査のためではなく現場が荒らされないようにするための見張り役の刑事がいるためだった。朝の時間と言うこともあって、聞き込みの刑事達の姿も無さそうだ。

雅斗はマンションを見上げて口元を押さえた。

吐き気がするほど嫌な感覚がある。

何かが、ねっとりとしたと纏わりついているような奇妙な感覚。言葉で言い表しようのない嫌な感覚だった。

（・・・何か、いる）

直感的に雅斗は思った。

いや、むしろこれは、いた、と言った方が正確だろうか。
ここにあるのはく痕跡だ。

禍々しい何かが這った跡。殺人犯とも、幽霊なんかとも違う、もつと禍々しい災厄のような存在。

問われても答えられないだろう。

だが、確かにここには何かがいたのだ。

「雅斗？」

不意に呼びかけられ雅斗は我に返る。

先を進んでいた二人が振り返り、自分の顔を覗き込んでいる。

彼は軽く笑った。

「何でもないよ、少し考え事してただけだよ」

「殺人現場だから緊張するの、無理もないけどな。気分悪くなった
ら言えよ」

「お前こそな」

この感覚は人に説明するのが難しい。

そもそも人の感覚というものはそう言うものだろう。まして不可視の存在を仄めかすような発言はあんまりしたくはない。

雅斗は黙って二人の跡に付いた。

部屋の前まで来ると、事件が起こった事を知らせる黄色いテープが貼られていた。出入り口にいた制服の警官に挨拶をすると女刑事は二人を招き入れた。制服の刑事は二人の高校生を見て酷く怪訝な顔をした。

気付かなかったふりをして、雅斗はテープをまたいだ。

部屋の中は主を失ってすっかり静まりかえっていた。僅かに聞こえる電子音は冷蔵庫のものだろう。

「！」

雅斗は一瞬、何かを感じて振り返った。

視界の端を何か黒いものが横切った。

（蝶！）

それは一瞬で消えた。だが、確かに蝶だった。黒い翅に赤い斑紋を散らした禍々しいくらい美しい蝶。

あの時見た死の蝶。

翅を引き裂かれながらもなおも舞っていた蝶。

（何だ、この感覚）

心臓が早鐘を打っている。今心拍数を計ったのなら異常な数値を叩き出すだろう。風邪をひいたときのように背筋が寒い。そのくせ、汗腺が全て開いたかのように汗が噴き出してくる。

異常な感覚だ。

身体全体を薄い膜で覆ってしまったような奇妙な感じがする。息苦しい、と言うよりは空気が重い。異常に湿度が高い場所にいるかのようなのだ。

（俺は、この感じを、知っている）

雅斗はゆつくりと歩く。

「雅斗くん？　どうかしたの？」

「いえ・・・別に・・・」

廊下を通った先にある部屋が殺人現場だ。

その中に入るとその感覚は一層酷くなった。

心配そうに岩崎が声をかけてきたが、ちゃんと受け答える事ができなかった。床に残された生々しい血の跡よりもずっと気にかかる所がある。

その時誰が見ても自分は異常だったのだろうと雅斗は後で振り返って思う。

ゆつくりと雅斗は天井の端を指差した。

「一樹、アレが見えるか？」

差された場所を見て一樹は怪訝そうにする。

「何だ？　通気口？」

「・・・そうか、お前には『見えない』んだな？」

「ん？　何だつて？　・・・お前、顔色悪くないか？」

事実、彼の顔色は悪かった。雅斗は自分の目に映ったものが信じられなくて青ざめていた。それは異様な光景だった。

通気口の丸い穴があるはずの場所に、びっしりと蝶が『生えている』のだ。

そして隣に立つ友人にはそれが見えていない。

六年前のあの時と同じだ。

あの時も、これは雅斗にしか見えていなかった。実際に見たのが他の人間だったのなら信じなかっただろう。

自分で見てしまったから信じるしかないが、いまだに信じられない不可視の蝶。

「気になるのね？」

岩崎に問われ、雅斗は頷く。

あの通気口の中には何かがあるはずだ。

「調べてみましょう」

「え？ 何？ どういうコト？」

交互に顔を見やっている一樹に答える余裕は無かった。

岩崎は手袋を嵌め、近くにあった椅子を踏み台に通気口へ手を伸ばす。

驚いた蝶が一斉に飛び立った。蝶達は岩崎の周りを威嚇するように飛び回る。彼女は全く気付かない様子で通気口のカバーに触れた。一匹の蝶が彼女の指に触れる。

とたん、酸で溶かされた個体のように白い煙のようなものをあげて蝶は消え去る。彼女の身体に触れた蝶達はみな同じように気化して消える。

彼女自身も、一樹にも見えていない。

雅斗だけがそれを見ていた。

やがて通気口のカバーが外される。

ペンライトを取り出し、中に光を当てた岩崎はゆっくりと中のものを引き出した。

「あなた、警官に向いているわ」

彼女の手にあったものは赤い皮。

ヘビの抜け殻よりも遥かに短く、虫が脱皮した後の皮にしては随分と大きすぎる薄い膜のようなもの。

それは何かどろつとした液体を湛えていた。

赤い、血のような、液体。

「雅斗」

隣で一樹が叫んだ。

雅斗は膝を折り、口元を押さえ必死に嘔吐をこらえていた。

11話 軋轢

温かい缶コーヒーを差し出され、雅斗は岩崎に礼を言った。

結局あの後、供用トイレに駆け込み雅斗は嘔吐した。今朝はまだ何も食べていなかったのが救いだろうか。出てきたのは胃液だけで、すぐに吐き気はおさまった。

こういう時、本当なら刺激物を避けるべきだったが、精神安定の為にはブラックコーヒーの方が最適だった。

雅斗はブルタブを倒してコーヒーを口に運んだ。

当たり外れのない普通の味のコーヒーだったが、思いの外ほっとする。

「大丈夫か、雅斗」

「ああ、もう大丈夫だ」

「悪かったな、こんな所に連れてきて」

「いや、一樹のせいじゃないよ」

普通の殺人現場ならこんなに気分が悪くならないだろう。

あの蝶を見てしまったから具合が悪くなったのだ。

雅斗にとってあの蝶の象徴するものは「死」。死の蝶、死神、呪い、殺人、呪殺。そう言った負のイメージがある。

そして、裏付けるようにあの蝶の出没するところはそう言う場所だ。

初めてあの蝶を見たときから少しずつ免疫を持ってきたと思っていた。だが、やはりまとわりつくような感覚は払拭することは出来なかった。

自販機に寄りかかり、腕組みをしながら岩崎は言う。手にある缶は「おしるこ」だ。

「二人とも、今日のことは誰にも言ってはダメよ」

「何で？」

「雅斗くんが容疑者にされかねないからよ。それと、あの物体Xに付いてはマスコミにも知らせない方針で話は付いているの」

一樹は首を傾げる。

「つてことは、前の現場でも見つかったってコト？」

ほんの僅か、彼女の表情が動いたような気がした。雅斗はそれを肯定と受け取った。

「おや、岩崎警部殿ではありませんか」

不意に声をかけられ三人は顔を上げた。

スーツ姿の男三人がこちらを見ていた。四十代くらいだろうか。

鋭い眼光をもち、こちらを観察するように見てくる。中心にいる男だけがにこにこ笑っていたが、好意は感じられない。

むしろ笑いながらも敵愾心をむき出しにしているような印象を受ける。

彼らも、刑事なのだろうか。

「こんな朝早くからデートかと思ったら、見たことのある顔ですね。重要参考人を連れて現場検証ですか。さすがに若くして警部になられただけのことはあり、仕事熱心ですね」

人をバカにしたような嫌味な口調だ。慇懃無礼とはこういうことを言うのだろうか。口ぶりから言えばやはり刑事なのだろうと思う。刑事に憧れがあるわけではないが、こういう人間は警察にいて欲しくない。

雅斗はちらりと岩崎の様子を窺った。

何故か彼女は極上の笑みを浮かべていた。

「あら、こんにちは。ええっと、何さんでしたっけ？」

ぴくりと男の表情が動く。

岩崎が上手だ。

雅斗は笑いが漏れそうになって口元を押さえた。隣で親友も赤くなっている。どうやら笑いをこらえる為に息を止めているようだ。

「中津です」

「ああ、そうでしたね、すっかり忘れていました」

「物忘れが酷いのでしたら通院をお勧めしますよ。最近では若い方にも痴呆があるそうですから」

「ご心配なく。記憶量が多いと優先順位が高くない物から消えていく体質なんですよ」

二人の間を何か冷たいものが駆け抜けていった。

笑顔で、慇懃に交わされている会話だというのになぜこれほどまで剣呑な響きが混じっているのだろう。

それ以上の反論を諦めたのか中津はこほんと一つ咳払いをした。

「ところで現場検証は終わったのですか？ 我々も彼に二、三質問したいことがあるのですがよろしいですか」

「任意での事情聴取ですか？ それなら彼に直接聞いて下さい」

「あ、俺拒否します」

即座に一樹が言うつとさすがに刑事はむつとした表情を浮かべた。

「任意つて拒否すること出来るんだよな？ 俺、疲れているし、これ以上話すこともないから拒否します」

「君ね・・・」

後方に控えていた刑事が気色ばんだ。

中津が片手で制す。

「止めないか・・・後日改めてお話を伺わせて下さい、一色くん」

「ま、気分が良ければな」

「期待しています。では、岩崎警部我々はこれで」

「ええ、また中原さん」

立ち去りかけた中津が岩崎を睨む。

名前を間違えたのは明らかに故意だ。男も相当嫌味だったが、彼女は輪をかけて上だ。まるで子供の口げんかのようだ。

この不仲には何か理由があるのだろうか。

中津達の姿が見えなくなつて岩崎は息を吐く。

「あの人達はどうかあつても貴方を犯人にしたいようね」

「愛ちゃんは違つのー？」

「当然」

彼女はきっぱりと言い放つ。

疑っているところが全く無いのを感じて二人は同時に驚いた表情を浮かべる。突然やって来て現場検証に連れ出すのだからつきり疑っているのだと思っていた。それなのに、先刻も雅斗が疑われないうようにと考慮してくれた。

彼女は普通の刑事とは違う。

（そう言えば六年前の）

六年前、彼が世話になった刑事に良く似た人だった気がする。他の事が印象的すぎて名前すらもう良く覚えていないが、六年前、唯一雅斗を信じてくれた刑事によく似ている気がする。もっとも、その刑事は男性でもっと背の高い人だったが。

「犯人だと思っているなら現場に連れてきたりしないわ。・・・そうだ、貴方にこれを返しておくわ」

「んー？ あれ、これ俺の？」

「そうよ、昨日警察署で落としたようね、藤岡が拾ったのよ」
彼の手にはYシャツのボタンがあった。

そう言えば昨日一樹のシャツにはボタンが一つ無かった。

「藤岡って女装した背の高い人の事ですか？」

「そうよ」

「あの人も刑事なんですか？」

「似たようなものね。あれでも優秀な人材なのよ」

意味が良く分からないが、警察にも色々なタイプの人間がいると言うことだ。

刑事ドラマや不祥事のニュースのイメージが先行して嫌なイメージばかりだったが、岩崎のような刑事がいるなら捨てたものではないと思う。

その岩崎に優秀と言わしめるのだから藤岡も出来る人間なのだろう。

こういう人たちなら悪い捜査はしないだろう。

「一樹、俺がいなくても平気か？」

「うん？」

「気分があんまり良くないから帰ろうと思って」

こう言って嫌味に聞こえないだろうか。

一樹は気にした風もなく頷く。

「ああ、そうか。悪かったな、嫌な思いさせて」

「だから一樹のせいじゃないって。少し気にしすぎだぞ、お前」

そう言って肩を軽く殴ると、彼はほっとしたように笑う。

今回雅斗が付いてきたのは同意の上だ。本来なら被害者のようなもので辛い心境にあるはずの彼がそこまで自分の事を気にする必要はないと思う。

こういう面をもっと全面に出せばこんなに疑われる事もなかっただろう。本当に損な性格をしている。

「送りましょうか、雅斗くん」

ありがたい申し出だが丁重に断る。

本当は家に帰りたい訳ではない。やりたいことがあるのだ。

「いや、いいです。頭冷やしながら帰りたいので」

座ったままくずかごに空き缶を投げ入れた。

ホールインワン。

調子は上々だ。

12話 噂

「クヴァドラートって知ってるか？」

机の端に肘をついて格好つけたようなポーズをとりながらクラスメートの晴久は言った。

晴久はクラス替えの後同じクラスになった男で、大分仲が良い。このクラスの中で一番親友に近いのだが、さすがに神社で修行中と言うことは話していない。何となく格好悪い気がしたのだ。

他の奴にならともかく晴久に格好悪いと笑われたら我慢できない気がした。

スポーツが得意な晴久は、言い意味で自分のライバルなのだ。

「なんだそれ。新しいゲームか？」

「違うよ、バンドだよ、ヴィジュアル系のバンド」

勇気は瞬く。

芸能関係の事を晴久の口から聞くなんて思っても見なかったのだ。勇気が驚いたのが分かって友人は満足したように笑う。どうやら反応がお気に召したらしい。

彼は少しむっとして睨んだ。

「それがどうしたんだよ」

「クヴァドラートの音楽を聴くと呪われるんだって」

「はあ？」

思いがけないつながりに頓狂な声を上げる。

ムラサキカガミの呪いとか、トイレの花子さんとか、増える呪いの階段とか、まことしやかに囁かれる怪談は小学校では人気の話題だった。

勇気は全く信じていなかったが、そう言う噂はいくらでも存在するし、結構流行るものだ。

だがヴィジュアル系バンドの呪いの音楽という話は初めて聞く。

「何だよそれ。嘘だろ？」

「いや、これ本当らしいぜ。連続殺人事件あるだろ？ あれの被害者、みんなその曲聞いて死んでるんだって」

「アホくさ。曲なんて何十人も聞いているはずだろ」

晴久はにやりと笑う。

「条件があるんだよ」

「条件？」

「女で、四時四十四分に音楽聞いていること、一度は直接ライブを見ていること」

勇氣は頭を押さえる。

ヴィジュアル系のバンドのファンと言ったら女が多いだろう。ライブを見に行くような人だったら一日中曲を聴いていたっておかしくないはずだ。条件に当てはまりそうな人間は何人もいる。

それが全部呪われたというのなら、被害者は四人くらいですまないし、刑事である母・愛は現場から戻って来れないだろう。

「それ、どこから聞いたんだよ」

「被害者のイトコの友達に聞いたって姉ちゃんが言ってた」

「都市伝説だな。そこまで遠いと本当かどうかも怪しいな」

友人は苦笑する。

「お前、本当にこう言うの信じないのな」

「当たり前だろ、非現実的だ」

「でもさ、その曲、聞いてみたくな」

「呪いの曲を？」

「そ、スカーレット・バタフライ、って曲だつてよ」

ぎくり、とした。

平静を装って、興味の無いフリをする。まさかあんな事、言えるわけがない。あんなのは現実じゃないし、この怪談話には無関係のことだ。

「やめとけよ、そんなの。馬鹿馬鹿しい」

「何だよ、怖いのか？」

勇氣はむっとする。

こいつに怖じ気づいていると思われるのはやっぱり我慢ならない。
「そんなんじゃないよ」

「じゃあ決まりだな。今日の放課後つきあえよ」

「なっ、おい……！」

勝手に決めて勝手に席を離れていく晴久を引き止めかけたとき、
ちょうど授業開始のチャイムが鳴った。

勇気は溜息をつく。

つきあうしかないだろう。面白くない事だったが、それで晴久の
気が済むなら弱虫、恐がりと笑われるよりはマシだ。

ポケットの中で今朝拾ったストラップの人形がざわめいたような
気がした。

パーキングに車を止め、少し歩いた所にライブハウスはあった。

大きいとは言わないが、それなりの人数が収容出来そうな規模の
店だ。店の前にはいくつかのアマチュアバンドのポスターが貼られ
ておりその中の一つに「単独ライブ決定」と赤い文字で書かれてい
た。

店は夕刻過ぎてから開かれるらしく、さすがにこの時間には人の
姿が無かった。

ライブハウスの二階は機材置き場を兼ねた事務所と僅かな住居ス
ペースになっている。階段を上がってドアを叩くとややあつて気怠
そうな若い男が出てきた。

「あ、何だよ、こんな時間に」

まだ昼前だったが、昼夜の逆転した生活を送る彼らには「こんな
時間」らしい。苦笑して伊東は警察手帳を見せる。

名前を名乗ると男は手帳の写真と伊東をしげしげと見やって上品
とは言えない笑いを浮かべる。

「あー？ 何だよ、またガサ入れか？ だから乱交パーティーもマリファナもやってないって言ってたんだろ？」

どうやら生活安全課や何かと間違えているらしい。

彼らにしてみれば派出所勤務の警官も、公安の連中も同じに見えるのだろう。仕組みや仕事の内容までレクチャーするつもりはなかった。簡単にそう言う趣旨で来たのではないと説明すると、男は訝る様子で伊東を見上げた。

「へえ、刑事さんねえ。見えねえな、ヤクザか香港マフィアの方が似合っんじゃないの？」

伊東は苦笑する。

ここに藤岡を連れてこなかったのは正解だ。今日は婦人警官の格好をして来なかったが、女装しているのには変わりない。彼を連れてきていたら何を言われるか分かったものではなかった。

「で、何の用？」

「昨夜、この人物を見かけませんでしたか？」

写真を手渡すと、男は思案するように首をひねった。

「うーん、昨日ねえ・・・どうだったなあ」

「なーに、事件？」

男の後ろから女の手が伸び写真を奪う。

赤い顔をした女からは煙草と香水と酒でむせかえる匂いがする。

女はふらふらとした足取りで写真を眺めて言う。

「あ、イロじゃん。何、イロがどうしたの？」

「昨日こちらで見かけませんでしたか？」

問うと女はにこにこしながら答える。

「きのう？ 来てたわよ、いつもより少し遅かったけど上機嫌で入ってきてしばらく女の子と遊んでたわよ。クワトロのライブ終わったら女の子お持ち帰りしてたわよー」

「良く覚えてんな、お前」

「だって、昨日声かけたら気分じゃないって断られたんだもん。それなのに巨乳娘お持ち帰りしちゃってさー、ちよつとジェラシー？」

くすくすと女は笑うが、対照的に男は怒ったような表情を浮かべる。

すかさず伊東は話を変えた。

「クワトロ、というのは何ですか？」

「最近人気のバンドのことよ。クヴァドラートって言うの」

「彼と一緒に帰ったという女の子の名前はご存じですか？」

「さあ？ 私女の方に興味ないし」

おそらくイズミという少女の事だろう。ライブの時間などを事細かに聞くと、一色の証言に一致する。やはり間違いは無かったようだ。

他に必要な事をいくつか質問をして、手帳に書き留める。

一色の素行はお世辞にも褒められたものではない。中学時分からこのあたりをうろついていたようだ。さすがに摘発を恐れたのか、男は酒を振る舞ったという話をしなかったが、おそらく普通にアルコールを摂取していたのだろう。

その上、高校一年という若さでこれだけ浮き名を流している。上層部が疑うのも無理はない。

だが、と思う。

これだけ女遊びが激しいのにも関わらず、恨んでいるような言葉は殆ど聞かれなかった。合コンで、めばしい女の子は彼が持ち帰ってしまうという話も出たが、別にそれで恨んでいる人間はいなかった。遊ばれた女の子も「彼は優しい」といい、少し寂しそうな目をしているだけだった。

やはり彼は犯人ではない気がする。

確信に近い。

伊東は丁寧な礼を言って階段を下りる。

階段の下で待っていた藤岡は誰なのかは知らないが男の手を握って何やら話をしている。伊東が降りてきたのを見つけると彼は微笑んだ。

「あ、ダーリンが帰って来ちゃった。ゴメンネ、またね」

そう言つて男の手を放すと、男は苦笑した風に背を丸めて片手を上げた。

「・・・何をやっていたんですか、あなたは」

男が立ち去つた方を見て伊東が問うと、藤岡は嬉しそうに笑う。

「やだ、ジェラシー？」

「何を言っているんですか。それに、ダーリンって誰の事ですか」
「うふふ」

「可愛い、ポーズをとって藤岡は笑う。

悪寒がした。

「仕事中ですよ、止めて下さい」

「あら、私も仕事してたのよ」

「何のですか？」

「聞き込み」

伊東の表情がきゅつと引き締まった。

「面白い話を聞いたの。聞きたい？」

「はい、ぜひ」

「素直ね。・・・クワトロって知ってる？」

頷く。

一色の証言でも、先刻の聞き込みでも聞いたバンドの略称だ。むしろそれは既にチェック済みである。

「殺人事件のあった日、必ず彼らのライブがあったのよ」

細い目を見開く。

「本当ですか？」

「ええ。今回と前回、二日連続で起きているでしょう？ ライブも二日連続であつたわ。前の二件もライブのあった日の深夜。偶然の一致かしらね？」

「調べましょう」

即座に伊東は答える。

事件に関連のありそうな事、少しでもおかしいと思ったことは即座に調べることに。それは重要な事だ。もし本当に関連性があるのなら

ら、ライブ中止というのも視野に入れて考えなければならない。
これ以上被害者を増やす前に、早く犯人を見つけ出さなければならない。
らない。

警察は容疑者として一色一樹を調べている場合ではないのだ。
強い視線を向けると、藤岡は力強く頷いて返した。

13話 ジャコウアゲハ

図書館でも蝶の図鑑というものは意外と少ない。

児童書のコーナーと一般の図鑑などが置かれている場所を回って何冊かの本を見繕い椅子に座る。

市立図書館に来るのは随分と久しぶりだった。最近ではCDの貸し出しも行っているらしく、カウンターからすぐに見える位置に棚が置いてあった。そしてその近くにはインターネットを利用できる環境も整っており、昔より随分と環境が良かった。

本なら本で調べながらネットも利用したいところだったが、生憎今日は小学生達が占拠していた。

どうやら今日の小学校は短縮の授業らしい。

好き勝手に騒ぐような小学生達でなかったのは救いだった。

雅斗は図鑑を広げる。

蝶の写真がずらりと並ぶ図鑑は、他の動物図鑑などと同様に写真の横の限られたスペースに名前と生息地、三、四行の簡単な説明が加えられただけの簡単なものだ。大抵こういうものは小学生向けに作られているので、細かい説明は必要ないのだろう。

バラバラと図鑑をめくるとあるページで彼の手は止まった。

(ジャコウアゲハ)

それは黒い翅に赤い斑紋を散らしたような蝶。

雅斗の見た蝶とは少し形は違ったが、他の蝶よりよく似た形態をしている。アゲハの種類だけでも何百種類を超えるために、そこに掲載されているジャコウアゲハはほんの一握りだけなのだろう。

もう少し詳しい図鑑が見られたのなら、あの蝶とほぼ同じ蝶が見られるような気がして少し残念に思う。

博物館で標本が見られれば良いのだが、簡単に出かけられる距離にはなかった。

雅斗はジャコウアゲハの簡単な説明を見る。

(・・・有毒?)

それはジャコウアゲハの種類に共通してある特徴だった。

別の図鑑を出し、ジャコウアゲハの欄を開く。そこにはもう少し詳しい内容が乗っていた。

(ウマノスズクサを食べるために体内に毒素が蓄積される)

雅斗は立ち上がり、今度は草花の図鑑を調べる。

(ウマノスズクサ・・・有毒。ジャコウアゲハなどが好んで食べる。・・・アリストロキア酸等のアルカロイド。薬草としての歴史もある)

注釈の欄に目を落とすと、中毒症状についての説明が載っていた。腎障害、多量の服用は血便の原因となりひいては呼吸困難、停止に至る。

他の図鑑を開いてもどれも似たような事柄が記されていた。総合して見ると、別に蝶に触れたからと言ってかぶれたり、中毒症状を引き起こす訳でもなく、ウマノスズクサを服用したからと言っても死ぬ確率の方が低いようだ。

蝶を大量に「食べる」なんてことがない限りは人は死んだりしない。

(・・・関係ないのか?)

あれだけ似ているのだから、ジャコウアゲハの種類である可能性も高い。だが、だからといってその有毒性が彼女たちの死に関係あるとは思えなかった。

仮にあれが不可視の存在でなくても、だ。

目を閉じてもう一度あの蝶の事を思い出す。

意図的にゆっくりと思い出せばあの禍々しい蝶でも客観的に見ることが出来た。人の死のすぐ近くにある蝶。人には見えない。自分にしか見えない蝶が人を殺すのか、それとも人を殺した近くに蝶が寄ってくるのか分からない。

そしてあの赤い皮。

サイズや色はともかく、蝶の幼虫が脱皮した後のように思える。

あれだけは現実に存在していた。

（あれの本体に、死の蝶が引き寄せられているのか？）

だとすると、六年前に雅斗が蝶を見たあの事件の時、側に同じように抜け殻があったのかもしれない。

「だから言っただろ、図書館にあるわけないって」

不意に声が聞こえて雅斗は顔を上げた。

雅斗の位置からはちょうど本棚の死角になって見えないが、貸し出しカウンターの所から小学生らしい男の子の声が聞こえる。

「ごめんなさいね、貸し出しているCDは認可を受けたクラシックが中心なの」

「そっか、残念だな、地元だからあるかと思っただけだ」

「もう止めるよ、晴久。大体聞くだけで死ぬCDなんてあるわけ無いじゃないか」

‘晴久’は残念そうに答える。

どうやら小学生が何か都市伝説を確かめるためにCDを借りに来たらしい。そう言えばああいうものに夢中になった時代もあったな、と少し懐かしく思う。

もつとも雅斗は信じていないタイプだったが、夢中になって怖がっているクラスメートを見ているのは楽しかった。

耳だけカウンターの方向に向けて、雅斗は作業に戻る。

「でもさ、面白そうじゃん。噂じゃあ蝶に襲われて死ぬんだぜ」

（え？）

雅斗は再び顔を上げた。

そっちを向いたからと言って会話をしている小学生が見えるわけでもないのに、そちらの方向を凝視していた。

「そんなの、タイトルに‘バタフライ’って入っているから勝手に蝶に襲われているとか言っただろ？ 大体蝶に殺されるってどうやって？」

「えっと、噛まれて毒が回って死ぬとか？」

「残念だな、牙のある蝶なんて聞いたことねーぞ」

「いるかもしれねーじゃんか」

「それは毒蛾かなんだよ。まあ、だけど、そう言うのはともかくとして噂の曲、聞いてみたかったな。何て言ったっけ？ クワトラ・・・・」

「クヴァドラートだよ。レンタル屋にも無かったし、姉ちゃんとか怖がつてるし、当分聞けねえだろうな、残念」

晴久ともう一人の男の子はそう話ながら図書館の外に出て行った。これは、偶然だろうか。

蝶に襲われて死ぬと言う噂。

小中学生が作ったうわさ話に過ぎないだろうが、雅斗の考えていたことにあまりにも接点が多い。

彼の言う通り、蝶に牙はない。

あるのは蜜を吸う管のような口だけだ。普段はゼンマイのように丸まっていて、必要な時にだけのばす。噛むことはないし、むしろそこから毒を注入することなどない。

そう言う点はともかく、曲を聴いて死ぬ、という事が気にかかる。(クワドラート、クヴァドラート、クアドラート)

音だけでは上手く聞き取れなかったが、多分パソコンで検索すればどこかで引つかかるだろう。

音だけで聞くとドイツ辺りの言語だろうか。

家に帰って検索してみよう、と思った時、偶然パソコンの一台があいた。滑り込むように座って検索をかける。

どれもいくつかの引っかかりを見せたが、それらしいものが出てきたのは「クヴァドラート」で検索した時だった。

インディーズバンドの「クヴァドラート」。この辺りでは結構人気の出始めたアーティストの名前だった。CDも何枚か出してあり、販売もしている。

派手な化粧をしているために顔は良く分からないが、ボーカルの「SIVA」を中心に人気のある四人組だった。

(へえ、ドラムが女なんだ、珍しい)

一瞬男にも見えるほど短く刈り込んだ赤い髪のドラムはランニングシャツという男のような格好をしながら、体つきはちゃんと女だった。

こういう女がドラムを男のように激しく叩いているのはかえってセクシーに見えるだろう。そのため、クヴァドラートには男のファンもいるようだったが、圧倒的に女性のファンの方が多いようだった。

（これか？ スカーレット・バタフライ・・・緋色の蝶か）

リリースしたCDから彼らの言っていた‘バタフライ’と名の付くものを拾い上げるとそれしか無いようだった。

赤いアゲハチョウが描かれたジャケットで‘s & b’とタイトルが書かれている。

聞くだけで死ぬCDとはおそらくこのCDのことを言っているのだろう。

インディーズを多く取り扱っているCDショップに行けば見つかるだろうか。

雅斗はブラウザを閉じて席を立つ。

見計らったように誰かが雅斗の使っていたパソコンの所に滑り込んできた。それを気にも留めず彼は図書館を後にした。

「あつた」

棚からCDを引き抜いて勇氣は呟いた。

晴久と別れてその足ですぐにCDショップに向かった。晴久にはああいったものの、呪われる曲というのがどうにも気になっていたのだ。

ジャケットには赤い蝶が描かれ左の翹に‘s’胴体に‘&’右の翹に‘b’と書かれていた。裏にはメンバーの写真とアルバムの中

に入っている曲名が書かれている。他にクヴァドラートのCDはあったが、見比べるとどうもこちらのCDのようだった。

このCDは最後の一枚だったようだ。あつて良かったと思いながら価格を見て嘆息した。

アルバムだからこんなものなのだろうが、小学生にとっては少しキツイ金額だ。

母親から小遣いと込みで生活費として少し多目の金額を渡されているのだが、CDを買ってしまうと少しキツイ気がする。母親に言えば買ってもらえるのだろうが贅沢は出来ない。

買うべきか否かで迷っていると、上からくすりと笑い声が聞こえた。

「勇気はむっとして睨んだ。

「ああ、ごめん。・・・そのCD、買うの？」

高校生だろうか。

背の高い男で、勇気と並ぶと頭二つ分くらいの差がある。タレントかモデルのように整った顔立ちで、勇気から見ても格好良いと思える人だった。頭の良さそうな人だな、と彼は思った。

「・・・迷つてるところ」

「勇気はぶつきらばうに答える。

男は笑った。

「なら、譲ってくれないかな、それ、ちょっと必要なんだ」

「欲しい」ではなく「必要」なら譲るべきだろうと思った。しかし、最後の一枚となると次にいつ巡り会えるか分からない。他のCDショップにある保障などないのだ。

「もし、それ聞きたいだけなら俺のパソコンで焼いて渡すけど、どうかな？」

「え？」

「勇気は顔を上げる。

「違法行為だけどね」

「悪びれもせずに彼は言った。

「え、でも、それでいいの？ ええつと・・・お兄さん？」

「雅斗、だよ。譲ってもらう代わりに、君さえ良ければの話だけど。正直、小学生にはキツイだろう？」

勇氣は赤くなる。

「別に。だけど、譲ってやってもいいよ。俺も欲しいから焼いてくれるなら」

言ってからしまったと思う。

雅斗の言っていたことは図星で、本当ならコピーしてもらうのは願ってもないことだ。体裁を取り繕うとしてつい嫌な言い回しをしてしまった。これじゃあ相手だって気を悪くする。

そう思ったが、雅斗は屈託のない笑みを浮かべていた。

「それはどうも」

彼がレジへ向かったのを見て、勇氣は正直ほつとする。

年長者の余裕なのだろうか。見かけだけでなく、中身まで格好良い人だなと思う。こういう人が自分の兄だったらどんなに良いだろうか。

（兄ちゃんか・・・いいな）

一人っ子で、母親が再婚でもない限り兄弟が増えることもない。神社に行けば人はいたが、家に帰ると殆ど一人だ。雅斗が兄だったら勇氣が一人で夕食をとることもなかっただろうし、晴久達にも自慢しまくっただろう。

一瞬だけ夢を見たが、非現実的だ。

首を振って勇氣はレジの方へと向かった。

14話 Scarlet Butterfly

瞳を刺すような陽光の中で 赤いヴェールが広がる

輝く事を知らない暗澹の世に お前だけが鮮明に輝いている

華が咲かずに散るのなら せめてお前だけはその翅を広げて

一晩でもいい 夢を魅せてくれ

もっと 俺を 狂わせてくれ

スカーレット・バタフライ

熱く燃えたぎる太陽 緋のヴィーナス

狂気のように俺の上で舞い続け

スカーレット・バタフライ

二度ともう戻れないなら

その熱い 熱き翅で 俺を殺してくれ

コンポから聞こえて来る曲は思っていたよりも激しい。ロック調のノリで、刺す、殺す、狂わせる、と多少過激な単語は含まれているが、呪われる曲という印象はない。

一台のパソコンでCDを焼きながらももう二号機で歌詞カードを作る。面倒な英単語が少なかったため、それほど手間にはならなかった。

CDショップで知り合った小学生、勇気は物珍しい様子で部屋の中を歩き回っている。

プラモデルやフィギュアなどの趣味のない雅斗の部屋は本が大部分を占めている。それほど面白いものでも無いだろうと思ったが、

彼にしてみれば高校生の部屋自体が珍しいようだ。

一通り部屋を見て回った後、結局彼は本棚の前で立ち止まって背表紙を眺めていた。

「珍しいもの、あった？」

無意識で出た声は僅かに笑いを含んでいた。

勇氣は振り向く。

「本、多くなつて思つて」

「ああ、中毒のようなものだからね」

「中毒？」

「活字の。煙草と一緒に無いと落ち着かないんだ」

肩をすくめてみせると少年はくすりと笑った。

実際雅斗が本を読むのはあれこれを考えすぎて深みにはまってしまつのを抑制するためだ。暇な時間があれば思索にふける癖のある雅斗にとつてはいい緩和剤になる。

脳は適度に休眠させないといざというときには使い物にならなくて困るのだ。

勇氣を家に連れてきたのも息抜きの為が半分だった。残りの理由の大半は母親の小言を防ぐための盾代わりにするつもりだったことが占める。

世間体を気にする母親はさすがに客の前では激しく責め立てることはしない。もっとも今日は母親が留守だったため、無駄になつてしまつたが。

「そう言えば兄ちゃん噂知ってる？」

「うん？」

「この曲聞くと、死ぬんだって」

雅斗は苦笑した。

まさかそれを確かめるために曲を買つたなんて言えない。

「聞いたことはあるな。面白がつて……」

言いかけた時、玄関のチャイムが鳴った。

窓から確認すると、外に人影が見えた。そのコートと髪型には見

覚えがある。間違っていないければ天野だろう。

少し待つようにと勇氣に言い残して雅斗は階段を下った。

軽く靴を履いてドアノブをひねって開けた。

「ああ、やっぱり天野だったか」

玄関を開けると黒髪の少女が少し首を傾けた。

「凄いわ、どうして分かつちゃうの？」

「上から見えた。・・・どうした？」

「有賀くん今日お休みだったから、届け物」

彼女はそう言ってカバンからプリントとルーズリーフを出す。

「テスト範囲と今日のノートよ。明日から連休になるでしょう？」

早い方がいいと思って持ってきたの」

「ああ、わざわざ悪かったな」

礼を言くと少女は微笑む。

こう優しくされると他の男子なら勘違いをしてしまうだろう。だが、天野は誰に対してもこうだ。知っている以上誤解のしようがない。

プリントを受け取って雅斗はざっとテスト範囲に目を通す。

テストは再来週だ。この分量なら少し見直せばそれほど悪い結果には成り得ないだろう。

「・・・あれ？ クヴァドラート？」

「ん？ ああ、知ってるのか」

こくりと頷く。

「うん。有賀くんもこういうバンドの曲聞くのね」

「ま、たまには」

「バラードとか良いわよね、クワトロって」

「実は今日買ったばかりでろくに聞いてないんだ」

「そうなの？ じゃあ、批評はまた今度にするわ。CD全部持っているから、良かったら貸すけど？」

全部持っているというのは少し意外な感じがした。

ファンなのだろう。インディーズバンドなんて言う俗物的なもの

を聞くように思えなかったが、そのミスマッチが面白い。

「気に入ったら借りることにするよ。今日はありがとうな」

「どういたしまして。……それ、一色くんにも渡しておいてくれる？」

「ああ、頼まれた」

雅斗は紙の束を軽く持ち上げて答える。

よろしくね、と微笑んで天野は踵を返し、外へ向かって歩いていく。

見送りながら雅斗は息を飲んだ。

蝶が舞っていた。

天野の周りを、赤い斑紋を持った蝶が舞っている。

初めは二匹だった。

しかし、それは互いにぶつかり合い、分裂するように増えていく。

（天野が、飲まれる）

蝶に。

今度こそ、被害に遭うのは彼女だ。

蝶に襲われ、彼女は死ぬのだろう。

連続殺人事件という、謎の解けないままの推理小説の中で、彼女は息絶える。

死を嘲笑うかのように蝶は天野の周りを舞う。縮れた翅をいっばいに広げやがて蘇のみが果てるまで永遠と舞い続けるのだ。

がたん。

音がして雅斗は慌てて振り向いた。

「勇氣？ どうしたんだ？」

いつの間にか一階に下りてきていた少年は青い顔をしている。

まるで見てはいけないものを見てしまったかのような顔だった。

「蝶が……」

ぽつり、と彼が呟く。

雅斗は目を見開いた。

「お前、見えるのか？」

「え？」

勇気の目もまた見開かれた。

雅斗の手に握られたルーズリーフの端に蝶がとまる。澄んだ翅を
ゆつくりと上下に羽ばたかせた。

ゆつくりと。

15話 ライブ前日

「良かった。腫れは酷いけど声の方には問題ないわ」

ドラムを叩いていた女が喜々と声を上げる。

同意するように二人の男も頷いた。

「そうだな」

「明日のライブは大丈夫そうだね」

「・・・お前ら、俺よりライブの心配か？」

マイク越しに凄んで邦彦はメンバーを睨む。

目の下の辺りは赤くなり腫れている。熱ももっているのだろう。

沢田に殴られた後、ちゃんと冷やさなかったために今になって腫れてきてしまったのだ。

不幸中の幸いか。当たったところが目の下あたりだったために、声を出すのには影響が無かった。

明日は凄い色になっていそうだが、顔に関してはメイクと、それっぽい包帯などの小物を使えば隠せそうだ。

ライブを中止する必要は無さそうだと彼自身も安堵していたのだが、メンバーにここまで言われるとやはり腹が立つ。

「私は心配してるわよ、邦あつてのクワトロだもん」

「・・・それは結局クワトロの心配だな」

突っ込みを入れると彼女は手を叩きながら笑う。

「そうとも言つかも」

「まあ、確かに圧倒的にSIVAのファンが多いからな」

青い髪の男が答えると金髪が左右に揺れながら不満そうにする。

「ボーカルの特権だねえ。いいな、歌えばもてるなら俺も歌いたいな」

「却下する」

「止めておけ、死人が出る」

「歌っちゃダメよ、タロは」

メンバーに口々に言われタロは頬を膨らませた。

バンドをやっているだけあって彼の音感もリズム感も最高だった。ただ欠点は歌が下手なこと。

声帯に問題があるのだろう。彼は殺人的に歌が下手だった。

「死人が出るって言えさー、あの曲、どーする？」

タロは軽い調子で聞いたが、聞かれたメンバーは暗い顔をする。噂は聞いていた。

自分たちの曲と最近起きている連続殺人事件の因果関係を、メンバー全員が把握している。小学生の噂に過ぎないのだが、やはり気になってしまうのは本当だった。

「人気ある曲だから、ライブに歌いたいけどねー」

「そうだな、確かに人気あるし、思い入れも強い曲だから歌いたいののは山々だけど」

「無視はできない、か」

それで万が一何かがあって、バンドを解散するハメになったら笑うに笑えない。犯人が捕まって因果関係が明らかにされるまで曲を封印するのも必要なことかもしれない。

クワトロは邦彦の生き甲斐のようなものだ。

これをやめなければならぬ状況になれば最大の楽しみを失うことになる。あの進学校で上位の成績を収めているのはこのバンドを続ける為だ。成績を落とせばバンドを止めなければいけないと言うのが親との約束だ。

そして学校にもばれてはいけない。

ヴィジュアル系のバンドなんてものをやっていると知れたら学校を退学させられかねない。そうすれば必然的にクワトロも止めることになる。

親のスネをかじっている立場上、仕方のないことだ。

もし、警察が絡んで来て、学校にも知られることになったらこれほど厄介なことはない。

暫く考えて邦彦は呟く。

「止めておくか、今回は」

「うーん、けどね、パンフ刷っちゃったし、ファンも八割方が死んでもいいって感じらしいんだよね」

半信半疑なのだろう。

ファンも曲を聴いて死ぬのなら面白いと思っていいのかも知れない。それが自分ではなく、他の誰かだったら、の話ではあるが。

「大体、死ぬ曲なら先にプーが死んでるだろう、って話。プーだって一応若い女の子なんだから」

「いちおう、って何よ」

赤髪の少女は頬を膨らませる。

プーは彼女のあだ名だ。ファンの前ではあまりやらないが、気に入らない所があるところとして頬を膨らませる癖があるのだ。だからメンバーの中ではプーと呼ばれる。

声を立てて笑ってからタロは片手を上げて言う。

「歌っても大ジョブじゃないか、ってのが僕の意見」

「俺は反対だ」

邦彦は言ってプーを見る。

「うーん、私は賛成かなあ。マークくんは？」

「わかんね」

青い髪の男は決めかねると言う風に両手を上げた。

プーが責めるように睨む。

「どっちつかず」

「だって、曲で死ぬなんて信じられないし、かといって何かあっても責任もてねえし」

「そうだな。俺もそれと同意見だ。だから敢えて反対する」

「でも、2対1、うだね。僕らの勝ち」

にこにこしながらタロに言われ邦彦は息を吐いた。

クヴァドラートの掟。何かあったときは多数決で決める。この場合、マークがはっきりしない以上、邦彦の負けだ。

どどのつまり、「あの曲」は今度のライブで歌われる事が決定し

た。

「・・・仕方がないな」

「そう言う訳で、次はスカバの練習ねえー」

「はいはい」

ちょうどその時だった。

練習用のスタジオのドアが開く。

まだ、クワトロの練習時間は終わっていないはずだ。四人の視線が一気に出入り口の方に集まる。

邦彦とそれほど身長差の無い男が戸口の所に立っている。

スーツを着込んだ男は軽く会釈をして懷から手帳を出した。

「少し失礼します。捜査一課の・・・」

「！」

反射的にタロが物陰に隠れる。

「・・・捜査一課の、伊東と言いますが、どうかされましたか？」

「あ・・・えへへ。昔の癖でつい」

メンバー三人は同時に苦笑する。

こう見えて、タロが一番年上だ。昔は少し警察に捕まりそうな事をやっていた、と言う噂を聞いている。それが昔の「癖」なのだろう。

言及すれば話が進まないと判断したのか伊東はそれ以上彼には触れなかった。

「クヴァドラートの皆さんですね？」

「そうだけど、何？」

慣れた様子でマーが問う。

四人の中で一番外交に向いているのは彼なので自然に接客は彼の役目だ。

「明日のライブの事で少々お話が」

全員がぴくりと反応する。

その話をしていたばかりだ。

反応しない方がおかしい。

刑事は続ける。

「実は少しお願いしたいことがあるんですが」
四人は示し合わせたかのように同時に首を傾げた。

16話 監視

「随分と人が集まって来たわね。何人くらいいるの？」

モニターを覗いて愛は伊東に問いかけた。

まだライブ開始には時間があるというのに、会場の外には続々と人が集まってきている。ライブと言うこともあって、奇抜な格好をしている若者達の姿もあったがうるんな人物は見あたらない。

殺人事件を犯す人間がみんな異様な雰囲気醸している訳ではないので、一概にこの中に犯人はいないと決めつけられない。

むしろこの中に犯人が潜んでいる可能性が高いのだ。

「会場に入れるのはスタッフ、メンバー含めて150人ほどです。チケットを持っていない人もいるようですから200人はいるかと思えます」

狭い空間にこれだけの人数を押し込んだら顔を確認するのも余裕じゃない。

愛は目に見える範囲で人の顔と成りを確かめた。

伊東と藤岡の仕入れて来た情報は捜査本部でそれほど大きく取り上げられなかった。一色一樹を犯人と決め込んでいる本部では、クヴァドラートのライブ当日に必ず殺人事件が起きていた事よりも、一色一樹がどこで少女達と知り合ったのかを気にしている。

その接点がこのライブハウスにあると言う可能性は否定できないだけに捜査員を何人が借りる事ができたが、それでもこの人数を洗うには人員が足りない。

全員分記録に残し、不審な人物だけをリストアップするのが取り敢えず今できることだ。

「まずは男性を優先的に記録して。あまり不審な人物がいればライブ終了後、職務質問。警察だと言うことは知らせず、なるべく多くを聞き出すこと」

捜査員たちが了解と声を上げる。

警察がこの近くをうろついているのを知られるのは得策ではない。そのため捜査員全員私服だ。長身で目立ちすぎる伊東は無理だが、愛やとても警察には見えない藤岡ならライブ会場に紛れていても違和感はないだろう。

ライブが始まり次第、愛は会場に入って内側から様子を見ることを考えていた。

「あらあ？」

楽しげに藤岡が声を上げた。

捜査員達が一斉にそれに注目する。

「どうかしたの？」

「可愛い男の子、はっけーん」

「……眞由美ちゃん、あなた何しに来ているの？」

不満そうに睨む愛に彼は肩をすくめる。

「捜査協力」

「だったらもう少し真面目にして」

「酷いわー、私いつだって真面目なのよ。この子、女の子みたいだからみんな見落とすんだらうなって思ったのよ」

そう言つて彼はモニターを示す。

覗き込んで伊東は怪訝そうにする。

彼が指し示した所にいるのは双子の姉妹のような女の子が二人映っているだけだった。髪の高い子と短い子。モニター越しではあまり分からなかったが、可愛い女の子のように見えた。

「男の子ですか？」

「そうよ、髪の高い方がね」

伊東は髪の高い方を見る。

モニターからはボーイッシュな格好をしている女の子にしか見えないが、藤岡が確信しているのなら男の子なのだろう。とすれば、中学生くらいだろうか。ライブハウスに出入りするには随分と若い。

伊東は何かを感じたような気がしてもう一度モニターを見た。

姉弟だろう。よく似た顔の二人が映っている。

「・・・どうしたの？ イトメくん？」

今度は逆に伊東を覗き込んで問う。

口元に手を当てて何か考えている様子の彼は二、三度瞬いて小さく首を振った。

「いえ。別に」

「ふうん？」

藤岡は一瞬何か言いたげに首を傾げたが、すぐに作業に戻る。伊東も同様に作業に戻った。

作業を続けながら彼は先刻見たあの二人を気にしていた。

どこかで見たことがあるのだ。

彼らの顔は、つい最近どこかで見た記憶があった。確信が出来ないからには言い出すことは出来ないが、確かにどこかで見たのだ。

（・・・だが、どこで？）

黒髪、小柄で色白、目が大きくはつきりした二重。

関わった事があるのなら忘れないだろう。印象に残る顔の子だ。

だが、どこで出会ったのかを良く覚えていない。

会ったのか、それとも見ただけなのか。

「あ、思い出した！」

再び捜査員の視線が藤岡に集中する。

彼はのけぞるように振り向い姉弟の映るモニターを示した。

「どこかで見たことがあると思ったら集合写真よ」

「集合写真？」

「この間の捜査会議で一色くんの身辺調査でクラスの集合写真があったのよ。その中に、彼女いたのよ。こんな長い黒髪は珍しいから覚えていたの」

「なるほど」

合点がいったと言う風に伊東は頷く。

集合写真は伊東も確認した。少しの間見ただけだったが、職業柄顔を覚えるのが癖のようになっていた。印象的な子だから記憶の片

隅に残っていたのだろう。だからどこかで見たような気がしたのだ。不意に、伊東の懷で携帯電話が震える。

「誰？」

「鑑識の原村さんです」

愛に問いかけられ伊東は答える。

彼女が頷くのを確認して伊東は電話に出る。

「はい、伊東です」

「原村です。例のDNA検査の結果が出ましたので報告します」

現場に残されていた蝶の抜け殻のようなものに付着していた血液の事だ。

伊東は表情を引き締める。

「血液は前の被害者のものでした」

「前の？」

「はい。三人目の被害者の所にあつた抜け殻には二人目の被害者の血液が付着していました。この分だと四人目の所にあつたものは・・・」

三人目の被害者の血液ということになる。

これは少なくともこの二件の事件が同一犯の犯行である可能性を強固にするものだ。

何故、現場にそんなものが残されていたのかまだ分からないが、偶然現場に残されていただけは考えられなくなった。

「それとですね」

原村は続ける。

電話の向こう側で紙をめくる音がした。

「これは被害者全員に共通するのですが、稀血なんですよ」
「・・・まれけつ？」

「稀な、血液ということです。それぞれ種類こそ違いますが、Rhマイナスより遥かに珍しい血液型です。赤十字に登録されている訳ではなかったのです、おそらく本人達も知らなかったのでしょう」
「吸血鬼、という言葉が脳裏に浮かぶ。」

稀な血液型。

もし、犯人が稀血を選んで被害者にしていたのなら、藤岡の言った「吸血鬼説」が有力に思えてくる。本人達も知らなかったのなら犯人が血をかき分ける能力を持つていない限りこんな何万分の一の確率で稀血を引き当てることは出来ない。

けれど、

（・・・何か、まだ、何かが足りない）

何か重要な所を見落としている気がする。

否、見落としているというよりは、まだそこに辿り着けていないのだ。

『引き続き鑑定を急ぎます。署に戻りましたら正式な報告書を提出すると愛さんにもお伝え下さい』

「わかりました。ご苦労様です」

お互いにねぎらいの言葉をかけ合って電話を切る。

あと、もう少しで何かが分かりそうな気がする。

「・・・少し、嫌な予感がするな」

「どうかしたの？」

「あ、いえ何でもありません。ええっと、原村さんから伝言を預かっています」

側で聞き耳を立てていた彼女にはおそらく聞こえていただろうが、原村から受けた報告を正確に愛に伝える。

聞いていた捜査員達は怪訝そうに伊東の方を向いたが、何も言わずに作業に戻った。

愛は自分自身に言い聞かせるように言う。

「考えるのは後にしましょう。ライブが始まるまでそれほど時間はないわ。開場したら私も中に入る。怪しい人物を見かけたらイヤホンを呼びかけて下さい」

彼らは頷き、表情を引き締め直した。

無駄な捜査に終わるかも知れないが、犯人に辿り着くヒントを得られるかも知れない。

伊東は自分の頬を叩いて気合いを入れた。

17話 守り刀

境内の掃除を終えて奉納する舞いの練習を終えるまでは殆ど誰も口を聞かない。

神仏共に後継者不足で悩む昨今にしては珍しく岩崎の神社は規模が大きい。修行の為にここに来る人も多くいる。氏子や観光客も訪れる神社だが、勇気の使う場所は拝殿から離れていることもあって人が入る事が少ない。必然的に誰とも口をきかないことも多くなる。こういう時は、寂しいと思ったことはなかった。

誰とも顔を合わせずただ集中することはそれほど苦にはならない。修行も神事も嫌いだ。神なんか信じていない。けれど舞いを奉納する時は少しだけ何かをしているような気分になる。それは練習の時も同じで、穏やかな気持ちになれる。だからこういう時間は苦にならない。

けれど今日は気持ちが入っていないのを感じていた。

出仕前が着る白袴を着込んで気合いを入れたのだが、いつもは失敗することのない場所で扇を落とす。

勇気は溜息をついた。

「……集中してないな」

集中できていない理由は分かっていた。

初めて、「見える人」に会って動揺しているのだ。

勇気が見ている幻は、彼の他に誰も見ることはなかった。だからあんなものは信じていないし、おかしい事だと思っていた。

けれど、見える人がいた。

（雅斗兄ちゃん）

お前も見えるのか、と彼は驚いた様子で勇気を見た。

驚いたのは勇気も同じだ。

現実にあれは存在している。雅斗が嘘を言っているようには思えないし、一晩明けてもパソコンでやいたCDが残っている所をみる

とあれは夢ではなかったと分かる。

とても信じられないが現実起こったことなのだ。

蝶が現れた。

噂の「死の曲」を聞いている時に、女の人が現れ、その人が蝶に飲み込まれていった。あの人に何かがあったら連絡をくれると雅斗は言ったが気が気ではない。

「勇気は扇を拾い上げた。」

ぞわり、と背筋が寒くなった。

思い出したのはコンビニの近くで中学生とぶつかった時に拾ったマスコットのことだ。あの時、あの中学生には嫌なイメージがまわりついていて。そしてマスコットを拾ったとき、脳裏に浮かんだのは蝶のイメージ。

勇気は練習場の端に置いてある自分の服のポケットを探った。

あのマスコットに当たる。

捨てるに捨てられず、もしもう一度あの中学生と会うことがあれば返そうと思っていた。

だが、今そのマスコットは禍々しいものに包まれている。不気味な程暗い赤がまわりついているような嫌なイメージがある。

勇気はその人形を三方の上に置いた。

神殿の方に向けて簡易的に祭壇を作る。漆塗りの杯に御神酒を注ぎ、玉串をマスコットの上に置く。

「・・・・・・」

勇気はその前に正座をする。

二礼二拍手一礼。

「・・・・・・」 掛けまくも畏き伊邪那岐大神 筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に「」

自分の言葉に力があることを知っていた。

だけど、認めたくはない。認めれば、自分が普通では無いことを自覚せざるをえないからだ。

でも、何もせずにいるのは嫌だ。

雅斗の家で見た蝶。イメージとして見た蝶。どちらも、同じものだった。そうだとすれば、このマスコットを被うことが何か意味があるかも知れない。

お被いとしてはかなり略式的になる。

だが何もしないよりは遥かにマシだ。

「被へ給ひ 清め給へと白す事を聞こし食せと 恐み恐みも白す」

被詞を終える。

かたかた、と地震でも起きたかのように周りのものが小刻み動く。杯の中で御神酒が波紋を描き始めた。

「！」

勇氣は慌てて大麻をつかむ。

お被いに使う紙の付いた棒は、見えない力によって後方に吹き飛ばされる。同時に勇氣は何か巨大な力に上から押さえつけられているような感覚に襲われた。

頭の中に直接イメージが流れ込む。それは電流のように一瞬で彼の中を駆け抜けた。

蝶、大群。

知らない人、髪の長い女の人。

雅斗、知らない人、中学生。

母親。

若い刑事。

大きな女の人。

人。

クヴァドラート。

再び蝶。

自分。

サナギ。

・・・・・・羽化。

息が出来ないほど苦しかった。膨大な記憶を一気に頭の中にたた

き込まれた衝撃で意識が混濁する。

「・・・・っ！」

やっとの思いで息を吸い込む。

ひゅうつと、風を切るような鋭い音がした。

喉に、何かが入り込む。

あめ玉をそのまま飲み込んでしまった時のような奇妙な感覚。

喉が灼けそうな程熱い。

再びイメージが流れ込む。まだまだ続く嫌な感覚から少しでも逃れようと彼は目を閉じた。否応なしにそれは勇気の中に入り込んで来る。

黒い蝶。

赤い斑紋。

刑事、そして少年。

浮かんでは消えていく誰かの記憶。

断片的な映像。

パトカー。

蝶。

夜。

人ばかり。

小さい、守り刀。

樹。ご神木。

「・・・・埋まっている？」

勇気は目を開いた。

赤黒い嫌なイメージは被われている。その代わり、勇気の中に何か異物が紛れ込んでいるような妙な感覚が残る。

マスコットに付いていたものが全部自分の中に入り込んでしまったのだらうか。否、おそらく、それだけではないだらう。

大麻を拾い上げ被いの続きを施した。

お被いを終えたマスコットを手にとると少し指先が震えた。蝶のイメージはもう消えていた。残るポプリの匂いがするだけで人形は

にこにこと笑っている。

「ご神木の下……」

そこに何かがある。

何の意味があるかは分からない。

「でも、きつと何か意味がある」

彼は練習場を飛び出し、拝殿の横を通り抜ける。途中、何人かが怪訝そうな顔をして勇気を見たが気にならなかった。

ご神木は拝殿の裏にある古木だ。

三本あるうちの一本。

勇気が見たのは一番古いこの樹だ。

半ば朽ちかけて氏子に拝まれることもめつきり減ってしまった神木は落ちそうな枝を支えられやと立っていると言う感じだ。

勇気は袴が汚れることを厭わずご神木の下に座った。

祝詞を奉納してから勇気は古木の下を掘った。

思っていたよりも土は軟らかい。

手の力だけでも簡単に掘り起こすことが出来た。

土の中から小さな飾り箱が出てくる。古いが、大昔に埋められたという印象はない。せいぜい十数年前くらいに埋められたものだ。

勇気は土にまみれた紐をほどき、飾り箱の蓋を開く。

「……守り刀」

それは古い守り刀。

何百年も前に作られ、誰かの棺に収められるはずだった刀だ。それが、今こうして出てきている。

勇気はそれを握りしめた。

何故だか妙に懐かしい気持ちになった。

18話 失踪

彼が雅斗の家を訪問したのはまだ空が薄暗い朝六時の事だった。パソコンのニュースチャンネルを開いたまま仮眠を取っていた雅斗は、聴き慣れない物音で目を覚ました。

新聞配達バイクの音ではない。

ベッドから起きあがり外を見ると門の前に人が立っている気配があった。

暗がりのせいで人となりは見る事が出来なかったが小柄であることが見て取れた。女か、それとも子供か。一瞬、勇気の事を思い出すが、そこまで小柄な人物には見えなかった。

(・・・誰だ、こんな朝早く)

部屋の外に出るとインターホンが鳴った。

たった今起きたばかりというような母親が、非常識な時間の訪問者を訝るように廊下に顔を出す。

「いい、俺が出る」

「でも・・・」

「大丈夫だから」

なおも心配そうにする母親を部屋に押し戻すようにして雅斗は階段を下る。

父親は、昨夜は帰っていない。どうせ研究に没頭しすぎて帰ってくるのを忘れているのだろう。大学で力学の研究をしている父親はこうして帰らないことがあるのだ。

一家に母親と自分しかない以上、雅斗が出るのが最上の選択だろう。

「はい、どちら様？」

ドア越しに呼びかけると思いの外、険のある声になっていた。珍しく警戒していたのだろうか。

向こう側から切羽詰まったような声が聞こえる。

「あの、こんな朝早くすみません」

少女か、それとも声変わりをしていない少年か。幼い印象が残る声だ。

雅斗は眉をひそめる。

「・・・こちらに、姉は伺っていないでしょうか」

「姉？」

「あ、すみません、僕、天野真里の弟で、亜夜といいます」

雅斗は鍵を外した。

心配そうに階段の所に立っている母親に大丈夫だと目で合図を送り、ドアを開いた。

天野をそのまま男にしたような外見の少年。髪は短いが黒く、大きな瞳は双子の妹と名乗ってもおかしくなくらい似ている。

酷く心配そうな顔つきでこちらを見上げていた。

「天野が、どうしたって？」

問う声は自分でも驚くほどに冷淡だった。

彼は動揺したように俯く。

「いなくなってしまったんです」

「いつ？」

「昨日の夜から朝四時までの間です。姉を・・・知りませんか？」

雅斗は玄関から外に出た。

あまり母親には聞かせたくない内容になりそうだった。後ろ手にドアを閉めて玄関から少し離れる。

さすがにこの時間の外は吐く息も白い。着の身着のまま出てきたのだろう。少年は薄いジャケットを羽織っただけの寒そうな服装だった。

興奮しているのか、それともここまで走ってきたのか、頬は赤く息は荒い。肩が上下に揺れていた。

「家には来ていない」

「そう・・・ですか」

「何故、家に？」

尋ねると、彼は手のひらを開く。

紙切れが入っていた。

雅斗はそれを受け取り開いてみる。

「・・・駅から家までの地図だな」

「姉のコートの中に入っていたんです」

「この間家にもものを届けてくれた時のものだろう。それより、行方不明になったただけなのか？」

驚いた様子で雅斗を見上げる。

「どういう意味ですか？」

雅斗は冷淡な口調を直さないまま答える。

「失踪したときに、不審な点は無かったのか？」

「・・・どういう意味ですか！」

少年の口調に剣呑なものが混じる。

雅斗は腕組みをして続ける。

「そのままの意味だよ。その可能性を考えなかった訳じゃないだろう？ 天野は・・・君の姉さんは家族に何も言わずいなくなる人間ではない。とすれば事件性を疑うのが道理」

雅斗は薄く笑った。

天野はもう蝶に飲まれただろうか。死んだからいなくなったのだろうか。だとすれば今、彼女の遺体はどこにあるのだろうか。

あれはどうやって彼女を殺したのだろうか。

口元に浮かんだ笑みを見て少年はきつと睨み付けた。

弁解するように両手を上げる。

「事件かもと疑ったから君もここに来たんだろう？ 警察ではちつとも相手にされないから、ちょっとでも可能性のある場所に来たんじゃないのか？」

「どうして・・・」

「いなくなつてまだ数時間だ。高校生の家出はよくある。深夜コンビニに出かけて偶然会った友人と遊びに行つたって可能性だってある。こんな短時間じゃ警察は動かない。違うか？」

尋ねると彼は唇を噛んだ。

警察でも同じ事を言われていたのだろう。今は連続殺人事件のせいで警戒が強化されている。事件の可能性の少ない女の子の失踪に構ってられないのだ。

その彼女が、事件に巻き込まれている可能性もあり得る。だが、警察はそうでは無いと判断した。殺された女性は全員自宅で発見されているのだ。

天野は自宅で発見されなかった最初の例になるだろう。

少なくともこの失踪は「蝶」に関わりがあることだろうと雅斗は踏んだ。

「整理しよう」

少年を見据え、彼は自分の推測を確認するように言葉にする。

「四時頃君がトイレか何かで起きるとお姉さんの部屋に明かりが付いていた。おかしいと思って覗くと姉の姿はない。コートや靴はそのままだから外に出たとは考えにくい。だが、家の中にはいない。そこでいなくなったのに気付いた」

怪訝そうに雅斗を睨む。

「そんなことまで言ってますん！」

「少し考えれば分かることだよ」

雅斗は笑う。

「夜から朝四時と限定したからには君たちは寝ていたと推理できる。普通なら寝ているはずの時間に君が気付いたと言うことは、何か普段とは違うところがあつたんだ。それが明かり。コートの事は君が言っただろう？」

驚いたように瞬く。

雅斗は続ける。

「さつき君は朝早くに言った。訪問するには非常識な時間だと認識している。非常識でも急ぐ必要があつた。それはつまり事件性を疑つてのこと。靴が無ければ外出した可能性を考える。けれど靴があつたからすぐに事件と結びつけた。どこか間違いは？」

「いえ・・・その、通りです」

雅斗は玄関のドアを開いた。

さすがに少し寒くなってきた。

「詳しく話を聞かせてくれないか？」

「え？」

「動かない警察よりは役に立つと思う。クラスメートがいなくなったのなら探すのを手伝って当然だろう？」

外向的な笑みを全開にする。

隣に一樹がいたら「嘘くせえ」と一蹴されただろうが、幸い彼の姿はここにはない。

亜夜は少しほっとしたように口元をゆるめた。

「ありがとうございます。・・・クラスメートなんですね？」

雅斗は苦笑する。

急いで来たせいで調べてくる余裕も無かったのだろう。この分だと名前すらも把握していない。

「ああ、有賀雅斗だ」

名乗ると、彼は少し目を見開く。

「マサト・・・さん？」

「うん？　どうかしたのか？」

「あ、いえ・・・よろしく願います」

彼は深く頭を下げた。

19話 ロスト・サムバディ

子供が泣いている。

両手で顔を覆って子供が泣いている。

(・・・けて)

子供が呟いた。

(・・・く・・・けて)

子供は泣き続ける。

手を差し伸べる大人の姿はどこにもない。

「ちよつと、イトメくん聞いているの？」

藤岡に呼びかけられ伊東ははっとした。

原村に呼び止められて喫煙所で簡単な説明を受ける。三人の中で煙草を吸うのは伊東くらいだったが、伊東もヘビースモーカーという訳ではなく、飲料ディスプレイでコーヒーを買って飲むのに留まった。

手元では紙コップに入ったコーヒーが冷めかけている。随分とぼんやりとしていたようだ。

資料ファイルを片手に原村が苦笑する。

「もう一度、説明しますか？」

「あ、いえ大丈夫です」

伊東は渡された資料のコピーに目を落とす。

資料を見ればどういふ話のことなのかは大体理解できるし、ぼんやりしていても頭の中に入る。職業病だろうか。

「被害者の誰からも毒物は発見されなかったんですね？」

確認するように言々と原村は頷いた。

「ええ、そうです。死因はショック死です。毒物が発見されないとなると心因性のものであると思われますが・・・」

「ハリーは納得してないんだ」

「ええ」

ハリーと呼ばれた原村は苦く笑いながら頷いた。

「確かに虫を飲み込んでショックで心臓発作を起こした例も聞きま
すけど」

「虫？」

「ええ、ゴ・・・」

「いやああ！ その名前を言わないでえ！！」

野太い悲鳴に周囲の警官達が怪訝そうに振り向く。
耳を押さえて藤岡は息を荒くする。

「私もそうなたら死ぬと思うわ。ショックで本当にあの世に・・・」

原村は肩をすくめる。

「・・・大丈夫だと思いますよ、藤岡さんなら」

「何か言った？」

「いいえ。まあ、心因性としても、女の子全員がその程度の事で死ぬとは思えません」

つまりは、何か他にショックになるものを見たのか、あるいはまだ発見されていない毒物があるかどちらかだ。

体内に入ったことにより化学反応で毒物を合成するというということもある。まだ、毒として認知されていないものが体内に入った可能性もある。そして、アレルギーによる反応と言うことも否定できない。

何かが発見されない限りは特定はできないのだ。

それに、何より不可解なのは遺体が傷つけられていること。

これさえなければ事故として物事が解決されるのだ。遺体を傷つけた人物は何の意図があつてそんなことをしたのか。それが一番の謎だった。

単純に考えれば「見つけて欲しい」ということだが、伊東にはどうしてもそう言う風には見えないのだ。

普通連続殺人事件は日数を置いて発生する事が多い。

警察の動きを警戒しているのだ。

それなのに今回の犯人は数日置いたり連続で事件を起こしたりする。犯行の手口は同じだというのに犯人像が今ひとつ見えてこない。機械で行っているような神経質な犯行。

そのくせ被害者に関してはクヴァドラートのライブと一色一樹いう接点はあるにせよ、それ以外の共通点がなかなか見えてこない。

（複数犯ではないと思うが）

それなのに、実行犯と、被害者を選んだ人間は別々にいるような気がしてならないのだ。

こうなってしまうと、一色一樹関連の怨恨という可能性がますます否定できなくなってくる。

だが、恨みで人を殺したにしては、遺体の損壊率が低すぎる。

「化け物よ！」

両手でパンと鳴らして立ち上がる。

伊東は溜息をつく。

「何であなたは何でもそっちの方向に持っていこうとするんですか」

「だって、そういう可能性を疑うのが・・・」

伊東の胸元で携帯電話が鳴る。

液晶画面を覗き込んで藤岡は怪訝そうにする。

「愛？ さっき会ったから署内にいるはずだけど・・・」

苦く原村が笑う。

「あの人の事だから探すのが面倒という理由でしょう。緊急だといけないから、出てみたらどうです？」

「はい、少し失礼します」

喫煙所は少し電波が悪い。伊東は立ち上がって電波の入りやすい場所を探す。

彼を見送って藤岡はコーヒを飲んだ。原村は彼の後ろ姿を見て懐かしそうに目を細める。

「・・・何だか正義さんを思い出しますね」

「んー？ やっぱり似ているわよねえ」

飲み終わった紙コップをくしゃりと丸めてくずかごに突っ込む。

「……愛が彼を引き抜いたのよね？」

「ええ、生活安全部からと聞いています」

「ふうん、彼は刑事部に引き抜かれて正解だっただろうけど……

愛の方はどうなの？ 割り切っている感じ？」

「どうでしょうね、と彼は首を傾げる。

「仕事面では信頼されている感じはします。ただ、心の中まではわかりません。こういう事は深いことが多いですからね」

「そうよね……こればかりは」

伊東は愛の夫だった岩崎正義によく似ている。

細い瞳、という以外はあまり似ているところがない。長身な方だったが、彼ほど体格は良くなかった。

飄々としたしゃべり方をする正義に対して、伊東は真面目で固い印象を受けるしゃべり方をする。だから第一印象は全く違った。

けれど彼を知っていくとどんどんと正義を思い出す。

愛もまたそう思っているだろう。

彼女はどう思っているのだろうか。彼女が何も言わない以上、暫く様子を見ているのが一番いいだろう。変に追及して思い出させるのは酷なことだ。

苦笑いを浮かべたところで伊東が小走りで戻ってきた。その表情は少し怪訝そうにしている。

「どうしたの？」

「事件です」

藤岡は立ち上がった。

「……まさか、もう五人目が？」

伊東が首を振った。

「……行方不明事件です」

20話 辿り着く場所にあるものは

「……！」

雅斗は覚えず口元を覆った。

酷く嫌な匂いがした。

亜夜を見ると彼は平然とした様子でいた。匂いに慣れているのか、あるいは感じていないのかどちらだろうか。

天野の家はすえたドブでもかぶったかのような異臭がしている。

家の真下に死体でも埋まっているのではないかと疑いたくなる程だ。近隣住民らしい中年の男が犬を連れて通り過ぎる。彼もまた、その匂いに何の反応も示さなかった。

「ここです」

亜夜は自分の家を示して言った。彼の表情を見て怪訝そうにする。

「……どうかしたんですか」

「いや、何でもない」

改めて家を見上げる。どこにでもありそうな、ごく普通の二階建ての一軒家だ。築年数が浅いのだろう。壁も門扉も古びた所は見受けられない。

しかし、その周囲には赤黒い空気がまとわりついている感じがした。

ぼたり、ぼたりと血が落ちるように何かが玄関先の石畳を汚している。

蝶の死骸だ。

ざり、と音を立てて亜夜が蝶を踏む。

普通感覚なら当然気持ち悪いと思い踏まないように注意して進むだろう。彼には全く見えていないのだ。

「上がって下さい。両親は今警察に行っていますけど」

「ああ」

雅斗は頷く。

「雅斗兄ちゃん！」

呼びかけられて雅斗は振り向く。

「勇気」

息を切らして走ってきた少年は、家の前に立つと一瞬ひるんだような表情を浮かべる。雅斗と同じように蝶の見える彼は、おそらく何かを感じたのだろう。慌てて表情を改めるが明らかに動揺した様子だった。

「変な感じがして……来てみたんだけど、まさか？」

さすがに勘が良い。

少年は雅斗の表情を見て事態を確信したように嫌な顔をした。

「……僕のせいだ」

「そんなことはないよ」

「だって、あの時あの曲を聴いていたから……」

「噂が本当だつていう証拠がない以上、勇気のせいには出来ないし、そうなれば俺にも責任はある。まだ決めるのは早すぎる」

「でも……」

勇気は頂垂れた。

「……噂って何ですか？」

「小学生の噂話だよ。ある曲を聴くと死ぬっていう。偶然、天野はそれを俺の家で聞いたんだ」

「え？」

包み隠さずに言うと、亜夜は何とも形容しがたい表情を浮かべる。一瞬の間に頭の中で色々と考えたのだろう。彼は何度も瞬きをしてやがて頭を振った。

思ったより頭の回転が速いらしい。衝撃からすぐに立ち直った様子の彼は訝る様子もなく二人を見つめた。

「僕は、姉が活着していると信じています。例え……例え噂が本当だったとしても、雅人さんや勇気くんには責任はありません。上がって下さい。良ければ勇気くんも」

彼は促すように家の中を示した。

「あ、お兄ちゃん」

亜夜が振り向く。

ポケットの中からマスコットを取りだして勇気はそれを彼の前に出した。亜夜の目が見開かれる。

「これ・・・」

「前に、コンビニの近くで拾った。お兄ちゃんのだろ？」

小さいマスコットだ。

手作りの、おそらく亜夜をモチーフに作ったものだ。

宝石でも扱うかのように丁寧に亜夜はそれを受け取る。

「ありがとう、無くしたと思っていたんだ。・・・姉さんが作ってくれたんです」

嬉しそうに握りしめてもう一度礼を言う。

彼の足下から何かが舞い上がって消えた。

天野の部屋に近づくに連れてその匂いは濃くなっていく。そして蝶の死骸の量もまた増えていった。

導かれるように雅斗は二階に上がり天野の部屋の前に立つ。“MARI”と書かれたルームプレートの上で蝶が羽を休めている。その動きは弱々しく力を感じない。

亜夜に許可を取って部屋をあける。

「う・・・」

後方で勇気がうめいた。

部屋にはまるで赤絨毯のように蝶の死骸で道が造られている。この光景を見て何の反応も示さない所を見るとやはり亜夜にはこれが見えないようだ。

「雅斗兄・・・クローゼット」

「わかっている」

雅斗は頷いて中に入り、蝶の絨毯の横を通ってクローゼットに向かう。

不思議そうに亜夜がその様子を見守った。

クローゼットの取っ手に手をかける。この中に何かがある。振り向くと確認するように勇気が頷いた。再び彼は視線をクローゼットに向ける。

鼓動が早くなる。

ねっとりとした嫌な汗が背を伝う。

雅斗はクローゼットをゆっくりと開く。

刹那、

「・・・！」

「わっ」

「っ！！」

突風だった。

せき止められていた水が一気に放出されるように、中から蝶の大群が飛び出す。それは強い風を伴い、部屋のなかを駆けめぐる。

壁に掛けてあった額を跳ね飛ばし、机に置かれていた紙を吹き飛ばす。雅斗の後方で不可視の蝶に激しく責め立てられた亜夜がバランスを崩して転倒する。戸口で勇気がうずくまった。

雅斗は顔を覆いその蝶の嵐に耐える。

逃げるように、惑うように蝶達は四方八方あらゆる方向に向かって跳び続ける。クローゼットの中に入っていたにしては明らかに多すぎる蝶達は部屋中を赤黒く染め上げるほどに充滿する。

やがて蝶の大群は、仲間の死骸をも吹き飛ばし、壁に激突して絶命する。そしてゆっくりと壁や床に吸い込まれるようにして消えた。

風が収まり部屋に静けさが戻った。

動揺を隠せない様子で亜夜が呟いた。

「・・・今は、一体」

雅斗は答えずクローゼットの中を凝視した。

慣れたのか、あるいは薄らいだのか、あの嫌な匂いはあまり感じなくなっていた。

震える手で携帯電話を探す。

「警察に、こういう事を信じてくれそうな人がいるんだ。その人に、連絡をとる。行方不明事件だけど、きつと動いてくれる」

「……誰なんですか？」

亜夜に問われ雅斗は答える。その声は勇気と被さり二重音声になる。

『岩崎愛』

雅斗は驚いて勇気の方を見た。

顔色悪くうずくまった少年は肩をすくめて笑った。

「……母さんだ」

21話 アウトサイダー

岩崎愛の携帯に連絡を入れるとすぐに鑑識を引き連れた岩崎達が天野の家にやって来る。

まるで待ちわびていたかのような迅速さだ。すぐに捜査は開始され、捜査の為に雅斗たちも指紋を採られた。

「少しよろしいですか？」

声をかけてきたのは伊東刑事だった。

一樹との一件で顔を合わせた程度の人だが、印象に残る人物だったので良く記憶していた。藤岡刑事の姿が見えないのは、彼が今日は非番だからだろうか。

伊東は簡単な事情聴取と言い天野の失踪のあらままと、雅斗がここに至った経緯を尋ねる。

彼がそう言う事を信じられるか分からない以上、蝶の一件は伏せた。ただ、部屋の中に風が吹いたことだけを説明すると、伊東は怪訝そうにしながらもあまり深い追及をしてはこなかった。

「・・・」

質問を終え、伊東は何かを思案するように暫く黙り込んだ。

「どうかしましたか？」

「いえ。・・・真里さんですが、血液型は何型ですか？」

雅斗は伊東を見た。血液型が何か関係するのだろうか。

疑問にも思わなかったらしい亜夜が答える。

「A B型です」

「普通の？」

「いえ、シスA B型です」

伊東は一瞬驚いたように眉を動かした。

その表情を探っていた雅斗は眉間に皺を寄せる。

（・・・何だ、今の質問は？）

シスA B型。聞いたことはないが、普通の血液型ではないという

ことから推測するに、稀血といわれる血液型の一種だろう。

その可能性がある」と知っている上で再度質問したかのようだ。

雅斗は自分が容疑者になる可能性も覚悟の上で伊東に確認するよう言う。

「他の人も稀血だったんですか？」

「え？」

「・・・え？」

動揺したような伊東。やや遅れて亜夜が反応する。

それだけで十分だった。

「他の人って、何のことですか？」

「伊東さんの知り合いが稀血なのかって思ったただだよ。ごめんなさい、関係ないことを急に質問してしまって」

「あ、いや」

優等生の微笑みを向けると、明らかにほっとしたような返事が返ってくる。

被害者は全員稀な血液型だ。

それが共通点。そうでなければ伊東がわざわざ血液型を二度も聞き直す必要はない。偶然か、それともそれが条件なのか。

蝶がもしも、匂いに惹かれて飛んできているとしたら、犯人は雅人達のように蝶の見える人間である可能性が高い。

けれど、と雅斗は思う。

稀血はRh型よりもっと出現頻度が少ない。この街で、しかもこんな狭い範囲で稀な血液型が密集していると言うことは果たしてあり得るだろうか。

（あと少し・・・何かが足りない）

「勇氣くん？ 大丈夫？」

不意に亜夜が声を上げて、雅斗ははっとした。

勇氣が青い顔をしている。

「・・・大丈夫、休んでりゃ治るから」

彼は蝶が見える。雅斗と同じ光景を見たのなら気分が悪くなって

当然だ。その上、勇氣はこれが殺人事件に発展する可能性を理解しているのだ。気持ちが悪くない方がどうかしている。

伊東は多分、その半分しか理解していないだろう。心配そうに勇氣を覗き込んだ。

「家で休んでいた方が良いかも知れませんか。送りましょう。・・・愛さん」

伊東は捜査を続けていた愛に呼びかける。

簡単な説明を受けたらしい彼女は息子の所に駆け寄った。彼女は息子の能力を理解しているのだろうか。

「大丈夫？」

「・・・ん、心配ないって」

「家まで送らせるから、ちゃんと休むのよ？ 雅斗くん」

「はい？」

「あなたもご苦労様、もう帰って良いわよ」

厳しい視線。

その意味を理解した雅斗は肩をすくめる。

「ここから先は大人の仕事よ、雅斗くん」

「・・・」

浮かんだ笑いが苦い。

どうも読まれていたようだ。

雅斗は頷いた。

「そうですね」

車を取りに向かった伊東を待つ間、雅斗は勇氣に付き添った。

放っておくのは少し気の毒な気がしたのだ。経験上、こう言うときは一人でいたくないと思う。

「・・・大丈夫？」

声をかけると勇氣は頷いた。

「あれだけのもの見たの初めてだったから、少し驚いただけだよ。」

「兄ちゃんこそ大丈夫？」

「お前らがいたから平気だった」

「兄ちゃんも、見栄っ張りだなー」

「男なんてみんなそんなもんだろう」

雅斗はくすくすと笑う。

つられたように勇氣も笑う。しかし、その笑いは長く続かなかった。すぐに彼は神妙な面持ちになった。

勇氣は背中をさするように手を伸ばし、何かをすっと出した。

すぐにそれが小さい刀であることが分かった。

「あのさ、これ、兄ちゃん持っていてくれないかな」

「うん？ どうして？」

「何となく。渡さなきゃいけない気がしたんだ。刃がないから切ったり出来ないけどさ。お守り代わりになるから」

雅斗は受け取る。

思っていたよりも軽い。

抜くと微かに光を放つ。確かに刃は潰れているようだ。美術刀と同じでこれでは人を斬ったり出来ない。

勇氣がずつと腰に差し持っていたせいだろうか。それは温かく感じられた。

「ありがとう。預かっておくよ」

「……氣を付けて」

雅斗はわずかに笑う。

「何に？」

「兄ちゃん、まだ調べるつもりなんだろう？」

「さあ、どうだろうな」

「……本当にやばくなったら、岩崎神社に来てよ。何か力になれるかも知れないし……死なないでよ、絶対」

最後の下りは既に泣き声に近かった。

雅斗は頷く。

「……約束する」

犯人は雅斗が思っているよりもヤバイ相手なのだろう。

人間だとしても、そうじゃないとしても、雅斗が一人で相手できるようなものじゃない。分かっている岩崎は雅斗を引き離そうとしたのだ。

だが、勇気がそう思ったように、雅斗には今更ここで後戻りをする気にはなれなかった。

（これは・・・俺の事件なんだ）

22話 誰でもいい

「え、うそ、ラッキーかも」

つい言葉が出てしまつて尚は慌てて口を押さえる。

独り言なんておばさんのすることだ。辺りを見回しても尚の独り言を聞いていた人間はいなさうだった。ほつとして尚は本屋へと入る。

その道を通つたのはたまたまだった。

友達が急用で来られなくなつたのもたまたまだ。なのに、偶然にも雅斗の姿を見かけると運命めいたものを感じてしまう。

雅斗は一人だった。

一度CDを手にとつてそのまま隣の書籍コーナーへと向かつた。店の奥の方は専門書等が置いてある。参考書でも買いにきたのだからか。

尚は何気ないフリをして雅斗の方に近付く。

彼が真剣に選んでいるのは医学書だ。

医者になつた彼は容易に想像できた。頭のいい人だ。医者を目指しているなら優秀な医師になりそうだ。

「あれ、有賀くん？」

尚は偶然を装つて雅斗に声をかけた。

「ああ、沢田先輩」

彼は医学書を棚へと戻した。手にはCDが握られている。

「偶然ね、買い物？」

「ええ、まあ。先輩も買い物ですか？」

「うん。……あれ、クワトロ？ 有賀くん聞くの？」

尋ねると彼は少し驚いて見せた。

「……知っているんですか？」

「うん。有賀くんも好きなの？」

「最近、好きになつたんですよ。バラードとか、いいですよね」

彼はにこりと笑った。

尚ほドキリとする。

「先輩も好きなんですか？」

「わ、私、ライブとか行くくらい好きなんだよ。CDも限定モノとか、全部持っているし」

雅斗が目を見開いた。

ひよっとしたらこれはチャンスなのかもしれない。

「よ、良かったら、CD貸そうか？」

心臓が高鳴る。

断られたら、どうしよう。告白した時みたいにドキドキしている。返事までの時間が異様に長く感じられた。

雅斗は少し長めの瞬きをして、頷く。

「ぜひ、お願いします」

沢田が自分に好意を持っているのは雅斗も知っていた。だから、多分、頼み込めば多少無茶なことでも承知してくれるだろうと思っていた。

案の定、すぐにでも借りたいという雅斗の頼みに、彼女は顔を赤くしながら家まで案内してくれた。

実際CDを借りる事は目的ではない。

彼女には悪いが少し、試したいことがあったのだ。

「可愛い部屋ですね」

「あ、あんまり見ないでね、恥ずかしいから」

沢田の部屋は天野の部屋より女の子っぽいというか、ぬいぐるみや小物がたくさん置いてあるファンシーな部屋だった。

天野の部屋はどちらかというと自分の部屋に似ている。殺風景で生活感がない。彼女の部屋は散らかっている訳ではないが生活感のある部屋だ。これが普通の高校生の部屋なのだろう。

壁にはS I V Aと書かれた大きなポスターが貼られている。これ

では落ち着いて眠れないんじゃないか、と思うが彼女にとっては至福なのだろう。

（・・・？ どこかで見たことがあるような・・・？）

「紅茶でも飲む？ いいものじゃないけどさ」

声をかけられ現実に戻った雅斗は微笑んで頷いた。

「はい、いただきます」

雅斗はピンク色の時計を見る。ちょうど良いくらいの時間だ。

「CD、かけてもいいですか？」

「あ、うん、好きにしてくれていいよ」

紅茶とお菓子をお盆にのせて、彼女は雅斗をもてなしてくれた。

男を自分の部屋に入れたのは初めてだろうか。少し緊張した様子だった。

学校で彼女の視線を感じたり、偶然を装って近付いてくることは良くあった。きつかけは何か知らないけれど、どうやら彼女に気に入られたらいいと言うことはすぐにわかった。

鬱陶しい思いながらも、沢田は先輩であり、彼女の立場的にも敵に回したくなかったために邪険に扱えなかった。それもまた高校生活では仕方のないことだと割り切っていた。

彼女にとって、恋愛の出来る対象であれば誰でも良かったのだろう。たまたま雅斗が目について、自分の「好み」であったから恋をしただけの話だ。恋している自分に酔っているだけだろう。

そうでなければ雅斗のことをろくに知りもせずつきまったりしないはずだ。

雅斗も男である以上は女の子に興味が無いわけではない。だが、同年代に比べでかなり淡泊なほうなのだと思う。

だからもてることは嬉しいが、答える気がない以上は迷惑なだけだ。

だが、まさかその彼女を利用する日が来るとは思っては見なかった。

（すみません、先輩。出来る限り全力で守りますから、許して下さい

い)

雅斗は沢田のCDのコレクションから例の曲の入ったCDを入れ
るとスタートボタンを押す。計算では噂の時間ちょうどあたりにあ
の曲が流れるはずだ。

はたして、あの蝶は現れるだろうか。

「そっぴいば有賀くん、医者志望なの？」

「どうしてですか？」

「さっき医学書のコーナーにいたからさ、そうなのかな、って」
なるほど、と雅斗は頷く。

「あれは血液学について少し調べていたんです。知り合いが稀な血
液型だつて聞いたので少し興味が湧いたんですよ」

「へえ、Rh型とか、そういうの？」

「そんなところです。先輩は何型ですか？」

沢田は少し嫌そうに答える。

「・・・B型よ」

多分、最近の血液型占いのブームで悪いことばかり言われるB型
という血液型を気にしているのだろう。

沢田は「やつぱり」「だと思った」などと答えられるクチなのだ
ろう。

「普通の？」

「ちゃんと調べたこと無いから分からないけど、多分そつだと思っ
よ」

稀血は献血や輸血の時に詳しく調べられるだけで、普段は普通の
血液型として認識される。だから本人の申告が稀血ではないという
証拠にはならない。少し惜しい。

「有賀くんは？」

「俺はAB型ですよ」

「やつぱり？ AかABのどつちかだと思つてた」

雅斗は小さく笑つた。

緊張も少し解けてきたのか、沢田はいつもの様子で色々なことを

話しかけてくる。雅斗が聞いていようがいまいが構わない様子だ。

雅斗もそれに対して適当に受け答えをしながら曲が「スカーレット・バタフライ」になるのを待った。

「あっ」

不意に彼女が声を上げる。

「私、この曲好きなんだよね」

「スカーレット・バタフライですね」

「うん、これでファンになったんだ」

でも、と彼女は少し不思議そうに首を傾げる。

「この曲聞くと何でかいつも眠くなるんだよね」

「眠く？」

「うん、リラックスするからかな？ アルファ波っていうの？ そ

ーゆーの、出てるかもしれないよね」

「・・・かもしれないね」

曲が終わる。

蝶の出てくる気配はない。

沢田は稀血ではないから出てこないのだろうか。

それとも他に違う条件があり、それがそろっていないだけなのだろうか。

(・・・あるいは)

あるいは、天野を連れ去った時点で、他の「生け贄」は必要なくなっただろうか。

23話 マスター・テープ

連休は終わった。

亜夜に一度連絡をとってみたが、天野が発見されたという話は聞かない。

学校に着くと天野の席がポツカリと空いている。彼女が休みだというのは珍しいと、クラスメート達は騒いでいたが、担任はそれに関しても言わなかった。

いたずらに騒いで彼女が戻ってきたときにクラスで浮く可能性を減らすためという、学校なりの配慮か、警察に口止めをされたのか分からない。どちらにしてもあの優等生が何らかの事件に巻き込まれたかもしれないという話はスキャンダラスだ。学校も家も隠しておきたいのだろう。

「なー、天野行方不明ってホント？」

後ろから呼びかけられ雅斗は振り向く。

「誰から聞いたんだ？」

「愛ちゃんと、オカマが喋っているところ聞いたんだ。俺、動揺させて犯人かどうか見る作戦なのかな、とか思ってたさー」

雅斗は苦笑する。

「違うと思うよ」

「だよな。愛ちゃんそーゆーの嫌いそうだもん」

で、と彼は身を乗り出す。

瞳が楽しげに輝いている。

「お前は何で知っているんだよ？」

「ああ、天野弟が家に尋ねて来たんだ」

「亜夜が？ 何で？」

雅斗は簡単に経緯を説明した。

体験してみなければ俄には信じがたい事件に関しては触れなかったが、話し終えると彼は珍しく難しい顔をした。

「……お前、絶対警察にマークされたぞ」

「お前と共犯容疑でな」

一回話を聞いただけでそこまで頭が回るのはやはり頭の良い証拠だ。

おそらく警察は今回の件で雅斗をマークしただろう。一連の事件に関わりのありそうな事件なのにも関わらず、少しだけ内容の違う事件。

その遺留品とも取れるものを発見した雅人。

勇気がいたことも手伝って、岩崎が雅斗を疑うことはないだろうが、警察内部では確実に一色一樹と有賀雅斗は共犯である、という説が浮上しているはずだ。

「一樹はどうなんだ？　ずっと警察と一緒にだったんじゃないのか？」

「ああ、連休中ずっとつきまとわれていたよ。おかげでさー、デートもできないし、酒も煙草も禁止だよ、嫌になるよな」

「……の、割に楽しそうだな」

「あ、ばれた？」

にっと彼は笑う。

「警察の内部事情が見えて楽しかったぜ？　俺やみつきになりそうってか、俺警察官目指そうかなあ」

鼻で笑って手をひらひらとさせた。

「せいぜい頑張れよ」

「本気にしてないだろ」

「お前に警察は似合わないよ」

「じゃあ、俺に何が合うっていうんだよ」

暫く考えて思いつく職業を当てはめるも、ちょうど良さそうなものは一つしか見つからなかった。

「……ホスト？」

「……やりてえ」

昼休みになつて雅斗は教室を抜け出した。
階段を上がつて二年生の教室へと向かう。

沢田の様子を見に行くわけではない。別に会いたい人物がいたのだ。

二年の教室の前で、手近な人に声をかける。

「すみません、江田先輩呼んでもらえますか？」

「うん？ 江田？ そりゃ珍しい」

男子生徒は怪訝そうな顔をしたが、ちゃんと江田を呼び出してくれる。出てきた男は黒髪の大きな男だった。

体格がいいせいか、余計に大きく見える男は嫌でも目立つ。黒髪で顔の輪郭を消すようにしていたが、その面差しはやはり「彼」だ。男は自分がどうして呼ばれたのか分からず困惑した表情を浮かべている。

「・・・何の用だ？」

問う声は低い。押し殺したような声にも聞こえる。

雅斗は目を細めて笑う。

「クワトロの話、といえば分かりますか？」

「なっ・・・」

声を荒げかけ、彼は慌てて口を押さえた。

明らかに狼狽している様子。

間違いない、彼がクワトロのボーカルの「SIVA」だ。

江田はちらりと周囲を見回して、他に聞いている人間がいないのを確かめるとほっとした様子で上を示した。

屋上に上がれ、と言っているのだ。

雅斗は素直にそれに従った。

学校の屋上は普段閉鎖されている。しかし、鍵が壊れているために屋上に出入りする生徒は多い。それを知りながら鍵を直す気配のない教師達にも問題はあるのだろう。

雅斗は屋上への扉をあけ、ざっと周囲を見渡す。

昼食を食べに来ている生徒が何人かいたが、何の話か聞き取れる

ほど近くにはいない。雅斗はそこからさらに離れて場所をとった。
「話、とは何だ」

先に切り出してきたのは江田の方だ。

威圧的な態度でこちらを見下ろしているのは彼の虚勢だろうと雅斗は判断する。雅斗はくすりと笑って首を振った。

「俺、脅すつもりも、疑っている訳でもないですよ」

「疑う、だと？」

「例の噂はクワトロのメンバーの耳にも入っているんでしょう？」

尋ねると大男は視線を逸らすように下を向いた。

「俺、犯人はクワトロのライブを見に来ていた人物だと思っています」
「す」

「……」

「中にはメンバーと親しくて楽屋や練習場に入ったりしているファンだっている。そう言う人物が連続殺人事件の犯人の可能性が高い、と思っています」

「……何の話だ」

とぼけて見せているものの、彼の表情は確かに「分かっている」
「感じだ」。

雅斗は声を立てて笑い、もう一度首を横に振った。

「だから、脅すつもりはないんですよ、SIVA？」

「その名前で呼ぶな、ここは学校だ」

日差しが温かい。風は少し冷たい。

雅斗は風でなびいた髪の毛をなでつけて江田に頷く。彼は諦めたように息を吐いた。

「……何が目的だ？」

「マスターテープを貸して下さい」

「マスターを？」

思いもよらぬ頼みだったのか、彼は驚いた様子を見せた。

クワトロはCDを何枚か作っている。それをプレスしたときにマスターと呼ばれる音源を作っているはずだ。

もし、雅斗の仮説が正しければ、CDにプレスされる前の段階で、音に何らかの細工がされているはずだ。音楽CDを解析するより、マスターを直接解析した方が早い。むろんマスターに細工が無ければCDの方を調べるつもりだが。

「何故また」

「調べるんですよ。例の噂が本物かを確かめるために」

「……お前、有賀雅斗か」

一瞬驚いたが、雅斗は平然として頷く。

全校生徒が知っている程の活動をしている訳ではないから、全員が自分の事を知っているとは思っていない。しかし、入学式で総代をし、学年首位になっている自分を知っている人がいてもおかしくない。

「そうです」

「では、まだ調べているんだな」

「まだ？」

「亜夜がお前はもうこの一件から手を引いたと聞かされていた。真里を探しているんだろう？」

大男が少し微笑む。

優しい顔だった。恐い、とか、ネクラとか、そういうイメージは一切ない。

口調から言えば親しい間柄だろう。天野の恋人と言うには違和感がある。そうであればそれらしい話を聞いても良いくらいだ。

そうになると、彼は親族か幼なじみのどちらかだ。可能性の高いのは、

「イトコですか？」

「ああ、そうだ」

江田はあっさり頷く。

なるほど、ならば最初から彼女の名前を出せばこんな脅すようなマネをしなくても良かったのだ。先に調べておけば良かったと今更後悔する。

「そう言いつつとなら協力しよう。他に、俺に出来ることはあるか？」

24話 ハルシネーション

「むさい」

マスターテープを手にした江田が雅斗の部屋に入って来るなり、一樹は一言切り捨てる。

確かにパソコンや音響機械ばかりの部屋に男三人というのはむさ苦しい。まだ一樹のアパートのように狭く無いのが救いだ。

金髪の男を見下ろして、黒髪の男が嫌そうな顔をする。

「何だ、これは」

「これとか言うなよ、失礼だなー」

一樹は口を尖らせて文句を言う。

どちらの気持ちも分からないでもない雅斗は苦笑いを浮かべた。

「ありましたか、s & bのマスター」

「ああ。それにしても凄い機材だな、どうしたんだ、こんなものを」

「父親の趣味です。・・・一樹、何を探している？」

雅斗はベッドの下を覗き込んでいる一樹を睨む。

「んー、おねーちゃんが裸になってるやつ」

「それなら左の本棚の一番右下だ。・・・これで音質を調べられるはずです」

推理では、このテープ自体に何らかの音が入っている。沢田は「眠くなる」と言った。それは一種催眠のようなものかもしれない。

「犯人はおそらくライブで被害者と仲良くなり、この曲を聴くように仕向けるんだと思います」

「・・・できるのか？」

本棚をあさる手を止めずに一樹が答える。

「簡単だよ、ライブの時に歌っている詩と、CDに入っている詩が違うとか何とか話せばいいんだ。・・・うげえ、これ医学書じゃねーか・・・ま、大体ファンなら家に帰ってもう一度聞き直すことくらいするだろうな」

彼は再び「エロ本捜し」に戻った。

そういうことです、と雅斗は肩をすくめる。

曲にもし催眠効果のある音が入っているとすれば、被害者は自ら犯人を招き入れるか、あるいは昏睡状態で犯人が侵入するのに気付かない状況になっていたのだろう。

どちらにしても、犯人はこれに何らかの細工をしていると思う。

雅斗はテープをセットし、自ら組み直したプログラムを起動させる。

スカーレット・バタフライが流れ始め、パソコンの画面上に音の周波数が記録されていく。よく声紋を調べるときに警察が使うものと同じようなものだろう。組み直している分、多少こちらの方が性能は良いだろうが。

パソコンの画面上に次々と記録される周波数にある変動を見つけ、雅斗はにやりと笑った。

「一樹」

振り向かずに来るように指示すると、一樹は雅斗の頭の上に肘を置いて口笛を鳴らす。

「ビンゴ」

「・・・何が見つかった？」

身を乗り出し、机に手を突いて江田は画面を凝視する。一樹は画面を指差して説明する。

「サビに入った時から波が変わっただろ？ 雅斗が探していたのはこれだよ」

「人間の耳は高音過ぎても低音過ぎても聞こえない。けれど耳から入った音は脳に影響を及ぼす。この周波数帯は脳波をシータ、あるいはデルタ波にまで・・・」

言いかけて、そこまで細かく説明する必要はないことに気付く。

雅斗はかいつまんで説明した。

「要は、この音を聞いていると普通で言う熟睡している状態、あるいはそれに近い状態になるってということです。催眠術にかかってい

る状態になると言えますね」

「催眠術？ とすればこれを聞いた人間全員が危険じゃないのか？」

「そうとも言えません。明確な指示が無ければ眠くなるだけかもしれないし、かかりやすい人と、そうでない人がいます。・・・音を取り出してみます」

音楽の部分や雑音部分を消去し、特殊な周波数を発している部分だけを取り出す。そのままでは聞き取れないため、音を変質させて人間の耳にも聞こえる音にする。

微睡むような、人の声のような、おかしい音だった。

「んー？ 良く聞こえねえ」

「これがその音なのか？ 唸っているようにしか聞こえないが」

「・・・そうか、モノラルだ」

「モノラル？」

聞き返された言葉には答えず雅斗はキーボードを叩き、プログラムの命令を加える。指示通りに音を分離したパソコンは再びスピーカーから音を流す。今度はステレオではなく、モノラルで。

今度は前よりもはっきりと聞こえてくる。

しかし、やはりそれは唸るような微睡むような奇妙な音。声であるが何と言っているのかは聞こえなかった。呪文や、お経のようにも聞こえる。

「何だ？ これは」

「うわあああ！！」

突然一樹が大声を上げる。

大きくのけぞり、まるで何かを追い払うように両手を大きく振って部屋の端まで逃げる。

心臓を押さえ、肩で息をしながら彼は震える声で言う。

「び、びびった！」

「どうしたんだ、一樹？」

「どうしたっていま、こんなでかい蝶がいたじゃねえか」

そう言っただけは手を広げて見せる。

それはちょうど人の頭くらいの大きさだ。そんな巨大なものがいればさすがに雅斗も驚くだろう。だが、蝶の姿はどこにもない。

「お前、薬でもやっているのか？」

「何だと！」

「どこにそんな蝶がいる？」

「そこに……あ、あれ？」

指を差して、一樹はきよんとする。

「おかしいな、さつき絶対にいたんだけど……」

「うわぁ……！」

今度は江田が声を上げた。

やはり何か追い払う仕草をしてやがてコードに足をとられ、転倒する。

一樹がにやにやと笑いながら一矢報いる。

「だつせー」

せせら笑う彼を睨み、江田は雅斗に言う。

「今、蝶がいたよな？」

「いいえ」

「お前こそドラッグやってんじゃねーの？」

「誰がやるか！　だが、今確かに……」

江田はきよろきよろと見渡す。そこには蝶の姿が見られない。

二人そろって幻を見たのだろうか。

「どんな蝶でした」

「赤黒いこのくらいの蝶の大群だ。おかしいな、確かに見えたんだが」

彼が示した大きさは普通のジャコウアゲハくらいの大きさだ。

「……ハルシネイション」

「は？　何だつて？」

「幻覚だよ。この曲のせいっていう可能性が高いな」

雅斗はテープの入っている機械を指で叩いた。

腑に落ちないという風に二人が同時に首を傾げる。

「なら、何故お前は見えなかった？」

「そーだよ、雅斗だけ催眠にかかりにくいとか、そんな説明じゃ納得いかねえぞ」

「確かに。だけど同時に聞いていて条件は同じ・・・・・・・・ああ、もしかして」

音を止めて雅斗は振り返って二人を見る。

「二人とも、このCDどのくらい聞いた？」

「クワトロのファンの子とつき合っていたからー、飽きるくらい聞いたなあ」

「先輩は？」

「自分のCDだから、それほど聞いてはいないな。いや・・・練習場でタローが聞いていたか？」

雅斗は頷く。

「俺は最近買ったばかりだから、数回程度。ということとは・・・」

この場合、幻覚を見たか否かの条件と成り得るのは一つに絞られる。

頻度だ。

25話 殺せるなら

「もし、これが実際に犯人に使われたものだとしたら、被害者がクワトロのファンばかりだったってのも頷けるけど、動機ってモノが見えて来ないなあー」

「確かに。犯人が被害者に接触した方法は分かったが、殺す理由がわからないな。ただの快樂殺人か・・・」

真剣に考え込む二人に背を向け、雅斗はパソコンに向かう。

犯人の目的はおそらく「血液」。稀な血液型の人間を捜していたのだ。そしておそらく目的の血液型だったのが天野だ。だから彼女だけは連れ去った。

分からないのは首筋の傷、腹部の刺し傷。首筋の傷はともかく、腹部はなぜ刺す必要があったのだろうか。

失血によるショック死で無いとしたら、また毒などで殺したのではないとしたら、一体どうやって殺したのだろうか。

そして、何故血液が必要だったのだろうか。

とんとん、とドアを叩かれ雅斗ははっとする。

「雅斗？ お友達来ているんでしょう？ 夕飯どうするの？」

ちらりと二人を見ると江田は頭を振った。一樹は任せる、と身振りで伝える。

雅斗はドアを開いて答える。

「一人分、頼める？」

「いいわよ」

母親は中の様子を窺うように見た。黒髪で大男の江田。金髪でいかにも遊んでいそうな男、一樹。母親の目にはどう映っただろうか。偏見の強い人だがさすがに本人の目の前では変な態度はとらない。母親は軽く挨拶だけをして下に戻った。家に人を呼ぶこと自体が珍しいため、偵察に来たのだろう。やっているのは遠くで監視している警察と同じようなものだ。

「雅斗は親父似なんだなー」

一樹はしみじみとした口調で言う。

「いや、母親似だよ、俺は。頭の方は父親ゆずりだけだな」

「ふうん。ま、どっちにしたってお前のかーちゃん、美人なんだなあ」

「・・・お前は女なら誰でも良さそうだな」

冷たい江田の嫌味に、彼はけけらと笑う。

「失敬だなー、俺顔さえ好みなら男だって全然オツケーなのにさー」

「・・・色魔」

「あははー、それ褒め言葉ー！」

夕食の時母親の機嫌は良かった。

料理を褒められ、さりげなく容姿も褒められ悪い気はしなかったのだろ。母親は一樹の事が気に入ったようで、雅斗は少しほっとした。

夕食を終えて部屋に戻ると、一樹は雅斗のベッドに寝そべった。

このまま泊まっていくことになった彼は、まるで自分の部屋のようにくつろいでいる。結局「エロ本」が見つからなかったのだけは不服だったらしいが、普段より少し楽しそうにしている。

「いいよなー、母親の手料理って」

まるで初めて食べたかのような反応だ。

そう言えば一樹は一人暮らしだ。両親がどうしているとかいう話は聞いたことがない。

「・・・聞いてもいいのか？」

「んー、親のこと？ かまわねえよ。母親は飲み屋の女で、父親が手を付けて俺が出来たんだ。認知してるからさー、俺の養育費とかもらってたらしいけど、八歳の時に母親別の男作って逃亡。俺は父親の秘書って奴に育てられた感じだな」

彼はさらりと言う。

「良くある話だな」

雅斗もさりとて言う、一樹は照れたようにそつぽをむく。

「なんだよー、同情の言葉が来ると思ったじゃねえか」

同情の言葉なんか欲しいわけがない。

慰めないことがかえって優しいことは雅斗も知っている。さらりと云つてのけたからと言って、気にしていない訳じゃない。ずっと引きずっているから、かえってこうあっさりした口調になることだつてあるのだ。

知っていて敢えて尋ねる。

「欲しかったのか？」

「いらね。それよりお前の方はどうなんだよ。随分大切にしてるみたいだけど、本当の母親じゃないんだろ？」

「あの人は俺を育ててくれた人。そのまま母親になったんだよ。二歳の時だから本当の母親みたいなもんだな」

「・・・産んだ人は？」

「俺を産んですぐに行方不明になって、六年前に遺体になって発見された。隠す事じゃないから言うけど、埋まってた彼女を俺が発見したんだ」

一樹は半身を起こす。

「・・・お前それ・・・」

「良くある話だよ」

言つた言葉に感情はこもらない。

自分でも違和感を覚えるほど無感情だった。

一樹は眉間に皺を寄せた。

「ねえよ。・・・犯人は？」

「捕まってるかい？」

「殺したいかい？」

「うん？」

「犯人、殺したいかい？」

雅斗は少し笑う。

遺体を発見したときは驚いた。そして、それが本当の母親だと聞かされてなお驚いた。けれど、それ以上に何も感じなかった。それまで生きてきた自分が不幸だったなら、犯人を憎んでいたかもしれないが、不自由であった訳でも、義理の母親に愛されなかったわけでもない。

だから何とも思わなかった。それが一番ショックと言えばショックだったのだ。

「・・・どうだろうな」

「お前さ、殺したい奴とかいねえの？」

言われて何故だかぎりとした。

一樹は真剣な眼差しで言う。

「俺はいるよ」

それが本音であることはすぐに分かった。殺せるなら、殺したいと思っっている相手がいる。だが、雅斗には彼が人を殺せる人間だとは思えなかった。

見返すと彼は少し肩を竦める。

「・・・お」

不意に携帯電話が鳴る。

言いかけた言葉を飲み込んで雅斗は携帯を受けた。

「もしもし？ ああ、勇気か。ちようど良かった」

「何、誰？ 彼氏？」

先刻までの真剣な表情とはうって変わって普段通りに戻った彼は、きらきらとした眼差しで雅斗の携帯に耳を近づける。

苦笑いを浮かべて雅斗は追い払うように手で仰いだ。

あんな風な一樹よりもこっちの方がよく似合う。

「うるさいぞ、一樹。・・・ああ、悪い、今親友が一緒なんだ。・・・

うん、ちようど聞きたいことがあったんだ。今、大丈夫か？」

26話 警察手帳

「あー、もうだめっ！」

小さな会議室に藤岡の叫び声が響いた。

パイプ椅子にあぐらをかいて座る彼の目の前には手鏡やボールペンなどが転がっている。それは事件の被害者達が最後に身に付けていたものだ。

証拠品になるものであるから本来ならば素手で触ることはないのだが、もう既に鑑識に回った後のものだ。遠慮せずに彼は素手で握りしめた上、テーブルの上に投げ出した。

その様子を見ていた原村は腕組みをしながら問う。

「見えませんか」

机の上に肩肘をついて彼は唸る。

「見えないってより、邪魔されている感じがな。途中からノイズが入ったみたいに全くみえなくなるの。何の歌なのかは分からないけど、歌声だけは聞こえる。みんな同じ曲だと思うわ」

「・・・全員ですか？」

「遺体の見つかったていない女の子を除いてね。彼女の私物は遺留品じゃないから、私の力じゃ無理」

お手上げ、と言う風に彼は両手を上げた。

彼には特殊な能力がある。事件や事故の現場に残されていたものに手を触れると、持ち主の強い感情を見ることが出来るという。

藤岡本人がそう言っているだけで、実際に確たる証拠はない。しかし、信じなければ説明のつかないようなことまで藤岡は言い当てる事ができる。そのため、彼の能力は重要視されるのだ。

もつとも、霊能力という類を信じないため、彼を快く思わないものも多い。

藤岡が警察を辞める事になったきっかけの一つに、そういった連中との確執というものがあるのだ。

「せめてもう少し歌がはつきり聞こえればいいんだけどねえ・・・」

「どういう歌なんですか」

「ええつとねえ」

藤岡はメロディーを口ずさむ。

それに重なるようにして、隣の部屋からどん、と机を叩く音と怒鳴り声が聞こえ彼は苦笑いを浮かべた。

「あらら、またやってるのね」

「有賀雅斗の事でもめていましたからね」

「勘とか霊能力だとか、大嫌いだもんね、中津刑事は。・・・どれどれ、ちよつと野次馬でもしてこようかしら」

楽しそうに言いながら彼は会議室の外に出た。

捜査本部は一色一樹と有賀雅斗の共犯説を強く押してきた。実際彼らが犯人であれば説明のつくことが多すぎるのだ。動機の面では曖昧なところが多いが、共犯、若しくは有賀雅斗単独による連続殺人事件なのだという説が濃厚になってきた。

そもそも一色の証言にはまるで作られたシナリオのように淀みがないのだ。それは有賀も同じ事で、彼の場合、真面目で頭の良いところが余計に疑いを深めているのだ。

近年、少年犯罪というものは大人しく教師の評判のいい生徒ほど凶悪な事件を起こす傾向にあるのだ。

それも踏まえ彼を重要参考人として任意同行を求めるか、という話に至ったとき、伊東が彼は犯人ではないと言いだしたのだ。

しかし、それには証拠がなく、それが原因で中津刑事ともめている。

（いくら彼が岩崎刑事と一緒に逆知が出来たとしても証拠無しじゃ中津さんが納得するわけないものね）

そして他の刑事ももちろん納得はしないのだ。

廊下から覗き込むと、他の刑事と言いつ争っている伊東の姿が見える。少し離れたところで中津と愛が難しそうな顔で腕組みをしている。

「いくら0班とはいえ、犯人ではないから捜査を中止しろ、などということがある訳がないだろう！」

「捜査を中止しろとは言っていない。彼が犯人であるという前提で捜査をしないで欲しいと言っているんです！それで捜査が遅れて被害者が出てしまったらどうするんですか！」

「だからといって容疑者を放置出来る訳がないだろう！」

「彼は容疑者ではありません！」

「ならば証明できますか？」

尋ねたのは腕組みをしている中津だった。

さすがに声を荒げることはせずに冷静に伊東を見据える。伊東はぐつと言葉に詰まった。

証明できるだけの証拠がないのだ。これは彼が犯人という証拠を掴むより難しい話だ。

ふう、と中津が溜息をつく。

「貴方には捜査から外れてもらった方がいいのかもしれませんが……っ！」

伊東は顔全体を赤くして机の上に警察手帳を叩き付ける。

衝撃に堪えきれなかった書類の山がばさばさと音を立てて床に散った。

「もういいです、俺一人でやりますから」

「伊東！」

彼は上司の静止を無視して部屋を飛び出す。すっかり頭に血が上っている様子の伊東は藤岡達にも気付かず通り過ぎた。

「イトメくん、やるう〜」

口笛を吹いて喜ぶ。

中津に睨まれ藤岡は肩をすくめた。

すかさず愛が口を挟む。

「確実な証拠でも出てこない限り彼らを容疑者として扱うのはどうかと思うわ」

「だからといってあなたがたの勝手をこれ以上許すことはできません

んよ。そうでなくても六年前の事がありますからね」

「・・・・・・！」

愛はきつと中津を睨んだ。

床に散乱した書類やファイルを拾い上げている彼は、彼女に視線には気付いていないようだった。

追い打ちをかけるように続ける。

「あなたも彼を岩崎さんと同じようにはしたくないはずです。勝手が過ぎて資格を剥奪されるのは彼も不本意でしょう」

「けれど、あの事件のあと、岩崎は二階級特進、私も警部になりました。それが何を意味するかくらい貴方もおわかりになるでしょう？」

冷やかに言われ、中津は自分の失言に気がついたように口元を押さえる。

気付かない彼の部下が小声で毒づいた。

「・・・・・・お偉いさんの娘だからっていい気になりやがって」

聞き逃さなかった愛はたたみかけるように言う。

「いくら警察庁の上層部に親がいるといっても、能力の無い人間に権限を与えるほど警察はバカではありません。二者択一の場面では臍負があるにせよ、明らかに能力の上の人間がいた場合その限りではありません。そのくらいのこと、いくら貴方でもおわかりになるでしょう？」

「何だと！」

「止めないか！」

明らかにバカにした態度に若い刑事は声を荒げた。

すかさず上司である中津が叱責する。

「今のは明らかにこちらの失言です。・・・・ですが岩崎警部、単独行動がいかに危険か、貴方もご存じのはずです」

「ええ、そうね。でも、私は彼を支持します」

「警部」

愛は頭を振って伊東の置いていった警察手帳を手にとった。

「
・
・
・
彼は私の部下です。手帳は私が預かります」

27話 羽化

夜も遅くなると風は冷たい。

外気に晒されている頬と鼻先が冷たくて自然とペダルを漕ぐ速度も速くなる。

テスト前ということもあって部活もなく早く帰ったものの、課題を部室に忘れた事に気付いた尚は慌てて家を飛び出した。

明日提出をしなければならぬものでなければわざわざ風呂上がりに学校に向かうこともなかった。忘れたのは自分自身なのだが、誰かに八つ当たりをしたくてイライラとしていた。

唯一の緩和剤はヘッドフォンから流れるクワトロの曲だろう。

好意を寄せている雅斗と急接近したのは、このCDのおかげなのだ。元々好きな曲だったが余計に好きになった。聞いていれば少しだけ腹の虫も治まってくる。

夜の学校はまだ教師が残っているらしく、所々明かりがついていた。用務員に断って尚は部室凍へ急いだ。

最近この辺りで女の人が度々殺されている。自分はその被害者にはならないだろうという自負は根拠のないものだ。人が近くにいるのだから安全だろうと思いつつもやはり一人で歩くのは心細い。

尚は無意識に音楽のボリュームを上げる。

人気のない部室は電気を付けても薄暗く、気味が悪い。昼間でさえ人がいなければ不気味に思いつのに、夜ともなればなおさらだ。

あまつさえ廊下では切れかかった蛍光灯がチカチカと点滅している。

「・・・どうして誰も替えないのよ」

尚はイライラと蛍光灯を見上げて自分のロッカーへと向かう。

課題は確かロッカーの中のファイルにしまったはずだ。

がたん。

「！」

尚はびくつとして振り返る。

後方で風にあおられたドアが音を立てて揺れている。彼女はほとと胸をなで下ろした。

（何びくびくしているのよ。何かあるわけが無いじゃない）

こうなつてくると何もかもが腹立たしく思える。

何より、恐がりな自分に腹が立つ。

（・・・？ 蝶？）

不意に視界の端に何かがいるのが見えて彼女はそれを目で追った。蝶だった。

アゲハチョウだろうか。

引き裂かれたようにボロボロになった翅を羽ばたかせて飛んでいた蝶はふらふらと力尽きるように床に落ちる。

部室で誰かが飼っていた蝶が逃げ出してここまで来たのだろうか。春先でもこういうタイプの蝶を見ることは滅多にないだけに、冬場の蝶は珍しい。

翅さえボロボロでなければ立派な蝶だったのだろう。

無意識に蝶の行方を追った尚は落ちた蝶の姿をみてぎくりとする。

床が、赤黒い。

水たまりの中で蝶がもがく。

ぼたり、と天井から何かが尚の額に落ちた。

嫌な予感がして尚はそれを拭った。

「ひっ・・・！」

血だ。

拭った指先が赤く染まる。

おそろおそろ尚は天井を見上げた。

「きゃあああ！！」

天井は蝶でびっしりと覆われていた。

さっきまでは無かったはずだ。

突然現れたとは思えない蝶の大群は不自然に盛り上がっている。脈打つような蝶。

それが覆っているのは不自然に大きなサナギ。

羽化して羽を広げれば一メートル近くになるだろうか。

背中から腰、そして足にかけての力が一気に失われ、尚はその場に座り込んだ。

「・・・うそ・・・、腰抜けた？」

立ち上がるうと思っても思うように力が入らない。

逃げなくてはと、思う。

みしり、と天井から嫌な音がした。

「！」

尚は慌てて携帯電話を手取る。

震える手で雅斗の携帯を検索する。何かあったら電話を下さい、そう言つて雅斗は自分に携帯の番号を覚えてくれた。

今、助けを求める相手は彼しかない。

ヘッドフォンを外し電話を耳に当てると、耳障りなコールが響く。

（早く・・・早く出て！）

コールの音を聞きながら彼女は祈った。

ぷつ、と音を立てて、電話が繋がる。

すぐさま尚は電話に向かって叫んだ。

「有賀くん、助けて！ 今、部屋にいるんだけど、蝶の大群がいて、私、腰抜けちゃって、・・・ええっと、それから・・・」

ぷつ、

電話が切れる。

尚は慌ててディスプレイを見た。

「・・・うそ、圏外・・・」

血の気が、一気に引くのが自分でも分かった。

サナギの、薄い膜の中から蝶の目がこちらを見下ろしている。まるで意思があるかのように微笑んで見えた。

残忍な微笑み。

「！！」

黒い大群が塊になって動いた。

集団になつて尚に向かつてくる。

尚は反射的に目を瞑る。声は、悲鳴にすらならなかった。ばさばさ。

「……？」

奇妙な音が聞こえた。

おそろおそろ目を開いた尚は予想していたようなものとは別の感触があるのを知って驚く。

「……大丈夫か、沢田」

低い声。間近に顔があつた。

良く見知つた顔。

助けが来たのにほつとするのと、彼のあまりにも優しい声に泣きそうになる。

ぐつとこらえて尚は彼を、江田を睨んだ。

「な、何であんたなのよ」

尚は言つてすぐさま後悔した。助けに来たのが江田だった事にほつとして不覚にも泣きそうになった。それを紛らわせるために毒づいてしまった。せつかく助けてくれたのに、これでは嫌な奴でしかない。

江田は呆れたような、わずかにほつとしたような複雑な表情で笑う。

「お前な、それはないだろう？」

「あ……」

ありがとう、という言葉が出ない。

代わりに尚は江田の腕を掴んでいた。彼はこんなにたくましい男だったのだろうか。尚は彼を見上げる。

頬に一筋の赤い線が入っていた。

「……怪我して……」

「ああ、あいつら、牙か爪を持っているみたいだ。……普通の蝶じゃないようだな」

彼は天井を睨む。

蝶がばさばさと音を立てて飛び交う。新たに来た男に警戒しているのだ。

尚は彼の横顔を見つめる。

普段はあんなに何かに怯えるようにおどおどしている男だ。無口で暗くて何を考えているのかも分からないような男。煮え切らないような態度が気に入らず、嫌味ばかりを彼に言っている事か手を上げてしまった。

それなのに彼はそんなことは関係なく自分を助けてくれた。

みしり、と再び不吉な音がして尚は震えた。

江田も驚いたように天井を見上げる。

「・・・・羽化する？」

28話 消失

みしり、と天井が音を立てた。

黒い翅に赤い斑紋を散らした不気味な蝶が渦を作るように飛び回っている。チカチカと廊下の蛍光灯が激しく揺れる。

「・・・沢田」

「え？」

江田は天井から視線を外さずに腕を掴む尚の手を握った。

「逃げた方が良く。この蝶は普通じゃない」

ぞくり、とする。

真剣に言われるだけ、余計にその異常さがわかる。確かにいま目の前に大群でいる蝶は普通ではない。

第一、蝶に牙や爪があっただろうか。

「立てるか？」

耳元で囁かれる声は低い男の声。こちらを気遣っているように優しい。

「だめ・・・腰が抜けちゃって・・・」

「ゆっくりでいい。肩を貸すから、せめて部屋を出よう」

「・・・うん」

彼に支えられ尚は何とか立ち上がる。

こんなに誰かを頼りにしているのは初めてだった。むしろ自分は後輩達に頼られる立場で、誰かに何かをしてもらうとか、人を頼むということが恥ずかしいことだと思っていた。

なのに、今は江田がいなければどうしようもない。

あのままどうなっていたか、想像しただけでも青ざめる。

尚は江田を見る。

「・・・あ、・・・あれ？」

初めて間近で見る彼の横顔。

「どうした？」

「え？ あ、誰かに似ているような気がして」

「そんなこと言っている場合か？」

呆れたようにいって彼は視線を逸らす。確かに、そんなことを言っている場合ではなかった。

ねっとりとした赤い液体が天井から垂れる。

合図に、周りにいた蝶が一斉に飛び立った。

「うわっ！」

たまらず江田が唸った。

彼のジャケットが尚の視界を覆う。

「伏せる！」

どこかで聞いたような声。

同時に尚は無理矢理床に伏せさせられた。

ごお、つと炎が風にあおられた時と同じ音がする。

「うわっち！」

「？」

伏せた状態のまま、視線を向けると、そこには金髪の男が立っている。一色一樹だ。彼の手にはスプレー缶が握られ、足下にはライターが落ちている。

何かが焦げたような嫌な匂いを放ちながら黒い残像がハラハラと床の上に落ちる。

一色は片手を振りながら痛そうな表情をする。

「うえーん、やけどしちゃったよぉー」

「だから止めておけって言ったんだよ。・・・大丈夫ですか、先輩」

「・・・有賀くん？」

尚は驚いて目を剥いた。

あの電話は繋がっていたのだ。だが、電話を受けて家から駆けつけるには時間が早すぎる。まるでどこかで待機していたような迅速さだ。

彼はしゃがみ込んで二人を見た後ちらりと天井を見上げ、再び二人に視線を戻した。

「何とか、間に合ったようですね。怪我は」

「かすり傷程度だ。それより、お前らなんでここに」

「説明は後です」

きっぱりと言って彼は立ち上がる。

手には小刀が握られている。

彼は天井を睨みながら親友の名前を呼んだ。

「一樹」

「オッケー」

喜々として一色は床に転がっているモップを手取る。

お互いに何か確認しあうように目配せをした後、一色が先に走った。

モップで天井を抉るように殴りつける。

強い力で叩かれたサナギが奇妙な音を発する。まるで黒板をひつかいた時のような甲高い嫌な音。

血しぶきと共に、サナギが天井から剥がれる。

雅斗が動いた。

糸一本の力で天井からぶら下がる形になったサナギに、鈍い光を放つ小刀が突き立てられる。

刹那、まるで爆発でも起こったかのような強い風がサナギから吹き出す。

「!!!」

雅斗と、一色の身体が宙を舞った。

床に伏せていた尚と江田でさえ強い風に吹き飛ばされそうになり、必死に堪える。

どこからか、子供の泣くような声が聞こえる。

やがて、風は止み、からん、と何かが天井から落ちた。

「昆虫針？」

雅斗は天井から落ちてきた小さなピンを拾い上げる。

それは標本を作るときに使われる細い針のようなものだった。長さは4センチくらいでそれほど長くはない。まるであの巨大なサナギをこれで貼りつけていた、とても言うように何本も落ちている。

サナギは、消えていた。

代わり、天井には血のようなもので蝶が翅を広げたような紋様が描かれ、焦げた黒い蝶が床に散らばっている。

部室内は蝶と昆虫針以外の全てのものが壁際に飛ばされスチール製のロッカーでさえも大きくひしゃげていた。人が飛ばされる程の強風に金属すら堪えられなかったのだらう。

「・・・一体、何がどうなったんだ？」

のろのろと起きあがって江田は頭を振る。飛んでくるものから沢田を守っていたのだらう。彼は痛そうに肩を撫でた。

雅斗は首を振って分からないと示す。

「ともかく助かったのだけは確かみたいだけだな」

椅子や机に埋もれて身動きの取れなくなっている一樹が楽観するように笑う。

実際、あのサナギが消えたのは事実だ。あれが一番危険だったのだとすれば、ここは助かったと考えるのが妥当だ。

雅斗は少し表情をゆるめた。

跡形もなく消え去ったサナギが消滅したのか、どこかに逃げたのかは分からないが、この部室の有様を見ればあれが夢では無かったと言ったことが分かる。

一口で説明出来ない事が立て続けに起こっているが、その全ては紛れもない真実なのだ。

「助けに来てくれたんだね、有賀くん」

沢田に言われ雅斗は彼女に視線を向ける。

潤んだ瞳で見つめられて少したじろいだように一歩下がる。

「で、電話をもらったとき、すぐ近くにいましたから。俺なんかよ、江田先輩にお礼を言ったらどうですか？」

「江田に？」

彼女は複雑な表情を浮かべて江田を見る。

顔や手に傷を作っている彼はメガネをかけ直し何とでもないという風に視線を逸らす。

「別に、感謝されたいわけでも恩を売りたい訳でもないから、礼なんか必要ない」

「しーちゃんつたらー、そんな可愛くないこと言っていると、女の子にもてないぞ」

「俺を好色のお前と一緒にするな」

もてたくて助けたわけではないとも言いたげに顔をしかめる。
にやにやと笑いながら一樹は江田から離れ雅斗の首に抱きつくように腕を巻き付かせた。

「ふうん？ それよりさー、この状況どうすんの？」

荒らされた部屋は何も無かったでは済ませられない。

かといって他の人に説明して信じてもらえとも思えなかった。

「・・・取り敢えず、先生呼んで来るわ」

「俺も行こう」

「別に来なくても良いわよ」

沢田にきつぱりと切られたが、肩をすくめただけで彼は彼女の後をついていく。

二人がいなくなった部屋で雅斗は床に転がった短刀と鞘を探す。

割とすぐに見つかった小刀は刃こぼれも油膜も出ていない綺麗な状態だった。勇気から預かったこれがあったから救われたのだ。

「綺麗なまんまだねえ」

「ああ、幻でも斬った気分だよ」

「幻だったとしても、あれはただの幻覚じゃねえよ」
刃を鞘の中にしまうとかちりと音を立てる。

「うん、あれはただの幻覚じゃなかった」

雅斗は頷いて小刀を隠すように背中とベルトの間に挟み込む。

あれは幻覚ではない。

そして事件はまだ終わってもいない。

（だけど、もうすぐ終わる）
雅斗は目を長く瞑ってそう確信した。

29話 導かれるように

山に面した道は夜ともなると人通りが少なくなる。

少し開けた砂利道に車を停車させる。車を降りて夜景の見える高台の上で、伊東は煙草に火を付けた。

冬場の風は冷たく熱くなつた頬と頭を急激に冷やしていった。頭に血が上ってつい飛び出して来たのだが、実際に当てがあつてのことではない。

ただ、あれ以上中津刑事と話していても埒があかないと思つたのだ。

警察署を飛び出して、煮え立つた頭で車を走らせていると自然とここへ辿り着いていた。こんな何もないところまで来てしまふと言うことは、少しは頭を冷やせと言うことだろう。

煙を吐き出して苦笑した。

中津の言い分が分からないほど、伊東はバカではない。

捜査一課に配属されてからそれほど立っていないが色々な事件と捜査の仕方を見てきた。今回の連続殺人事件は中でも大きな事件だったが、捜査方法に変わりなかった。単独行動をとったが為に殉職した刑事もいるのだと聞かされた。だから自分のしていることがどんなに危険なことなのか知っている。

それでも、本部の捜査に参加する気にはなれなかった。

初めはそれでも従っていた。そうするのが適当だと思っていたからだ。でも、今は警察手帳を置いてでも本部とは違う捜査が必要だと感じる。

日に日に増して言いく確信は、焦燥感にも似ている。

不意に懷で音楽が鳴った。

音楽は短い電子音ですぐに切れる。

(・・・メールか)

伊東は携帯電話を取りだしてボタンを押す。

送信者の名前は藤岡。

<今、どこにいるの？>

戻ってこい、と岩崎が言っているのだろうか。上司である彼女には迷惑をかけてしまった。

だが、今は戻る気にはなれない。

メールを返信しようとして彼はふと手を止めた。

「・・・・・・？」

どこからか、子供の泣き声が聞こえる。

聞き覚えのある子供の泣き声。否、子供の泣き声など、結構似通っているものだ。だから今まで聞いたことある声に似ているだけで、その子供の泣き声では無いはずだ。

伊東はおもむろに視界を巡らせる。

お腹の底から何か嫌なものがせり上がってきて肺にたまってしまったような奇妙な感覚に襲われる。

子供が泣いていた。

(・・・・馬鹿な)

伊東は車道に立つ子供を信じられないという表情で見つめた。

男の子とも女の子ともつかない格好をしている子供は顔を両手で覆って肩を振るわせながら泣いている。

彼はそれに押されるように一歩後退した。

透けている。

子供の身体は透き通って後ろの景色が映っている。

明らかに尋常の姿ではなかった。

息をすれば子供が自分の中に入ってきてしまいそうで、覚えず息を詰めた。

これは一体何なのだろうか。幽霊か、それとも幻覚か。本当に存在しているても、こんな時間、こんな場所に子供がいること自体が不自然なのだ。

『・・・・・・けて』

ぼつり、と子供が声を出す。

「？」

『助けて……を、……めて』

「……え？」

「ごお、と音を立てて子供の上をトラックが通り過ぎる。

生きた人間ではない、と分かっているながらも伊東は目を瞑った。

ゆつくりと、目を開くと、トラックは何事も無かったかのようにもう随分と先まで走っていた。車道に目を向けると、子供の姿はもうどこにもなかった。

変わりに、細い輪郭だけの蝶がふわりと舞い上がる。

青いネオンのような寒々しい蝶は、まるでこっちに來いと訴えかけるように伊東の側を舞った。

（……追わなくて、は）

本能が、そう囁いた。

追わなくて、いけない。

煙草を灰皿の中にもみ消して伊東はエンジンをかける。

まるで何かに取り憑かれたように光る蝶の姿を追って走り出した。車で追いかけているのに、蝶と彼との間は縮まらず一定の間隔を保っている。

奇妙な事のはずなのに、伊東はそれが不思議な事のように思わなかった。

何の疑問もない。

今の伊東に取っては追いかける事こそが当然の事で、蝶の正体や何故追わなければならない気になっているのか、全く疑問には思わなかった。

山道に入り、やがて蝶は道路を外れて森の中に入っていく。

伊東は乗り捨てるように車を降りた。

車の接触した跡が残る歪んだガードレールを飛び越えると、下は急斜面になっている。覆い茂った草木にスーツが引かかる。湿気を帯びた斜面に足を取られ思うように進めない。

滑るように降りて行くと乾いた枝が頬や手に当たり小さな傷を作

る。

やがて、草木の生えていないならかな場所にたどり着く。
赤黒い塊があった。

鈍く光る月明かりが、木々の間から細く降りている。

「……？」

伊東は目を凝らした。

黒い塊。

人くらいに大きい。

「……人だ！」

我に返り、その人影に駆け寄った。

死体だろうか、衣服が真っ赤に染まっている。長い髪が扇状を描き地面に広がっている。うずくまるように身体を曲げ、ぴくりとも動かなかった。

生きていないのなら下手に触らない方が良さだろう。

彼は膝を折って顔を覗き込む。

顔を見て、息を飲んだ。

「天野……真里？」

紛れもなく、今探している少女だった。

写真で見た少女と同じ顔。そして弟ともよく似ている。

彼女の手は腹部に添えられ、そこからおびただしい量の出血が見られた。まるで鋭い刃物で切り裂かれたかのような。

伊東は少女の口元に耳を近づけ、同時に首筋に指を当てて脈を取る。

「……生きている」

呼吸は浅いが彼女は確かに生きていた。

「天野さん、聞こえますか？ 天野、真里さん！」

少女は目を開かない。しかしまぶたがぴくりと動いた。

「すぐに救急車を呼びますからね、頑張ってください」

彼は急いで携帯電話を手に取り救急車を呼ぶ。

青いネオンの蝶が携帯電話を持つ手に当たってふわりと形を失っ

た。

30話 杞憂、あるいは

天野真里が血まみれの状態で発見されてから五日が過ぎた。

腹部を鋭利な刃物で刺されていた彼女は出血多量という状況にも関わらず奇跡的に一名をとりとめ、二日後に目を覚ました。

警察による面会謝絶の処置はとられているものの、家族や友人に關してのみの面会は一時的に許可された。

ベッドの上で半身を起こした彼女はまだ本調子ではないのか青白い顔をしていた。長かった髪の毛は肩の当たりで乱雑に切られ腕や頬には包帯やガーゼなどが当てられている。腹部の刺し傷の他に複数の擦り傷とかがあったようだ。

彼女は行方不明になった直後からこの病院で目を覚ますまでの記憶が全くないと答えた。

雅斗たちと彼女との面会は彼女の体力を考慮して五分ほどで強制的に終わらせられた。

「案外と元気そうだったな」

「ああ、そうだね」

彼の言うように事件に巻き込まれたはずの彼女は混乱している様子もなく落ち着いた様子だった。

まるでいつもと変わらない。

それがほっとするような、かえって不気味なような奇妙な感じがした。

天野の病室を後にした雅斗は、一樹のつきあいでの別の病室に向かっていた。

以前、彼が友人澄子の遺体を発見したときに一緒にいたイズミという女の子が、同じ病院に入院しているらしい。精神錯乱で一時入院した彼女は直後受けた検査で潜んでいた病気が発見されたそう。そのため、まだ入院しているという。

「よお、調子はどうだ、イズミ？」

病室を覗き込んで彼が声をかけると少女の顔にぱつと華が咲いた。

「イロくん？ 来てくれたんだ！」

「入院したって聞いたからな」

廊下で待っているのも妙だからと、雅斗も一樹の後についた。軽く挨拶をすると、彼女は気さくに笑いかけてくれる。いかにも今時の高校生という感じだが、そんなに悪い印象はない。

「・・・手ぶらみたいなもんだけど、これ、お見舞い」

彼はポケットの中から十羽ほどの不格好な折り鶴を出す。

イズミはくすりと笑った。

「折り方間違ってるよ」

「そうか？」

「こんな太い首のつるなんて初めて見たよ」

金髪は肩をすくめる。

「でも、嬉しい、ありがとう」

そう言って彼女はベッドの脇からクッキーの缶を出して開いた。中は色々な小物が詰まっている。コルクの栓やピンバッチ、小さなリボン、献血手帳なんてものもある。

イズミは缶の中に折り鶴を入れながら笑う。

「これね、私の宝物なの」

「へえ、色々あるんだな。見てもいいか」

「うん、半分近くはスミちゃんとの思い出なんだけどね」

缶を受け取って中を見始めた彼はピタリと手を止めた。

中を覗き込んだ体勢で雅斗も止まる。

「発見が遅れたら私、やばかったんだって。スミちゃんがきつと教えてくれたんだって思うの。まだ信じられないし、悲しいけど、スミちゃんの思い出はずっと一緒」

「イズミ・・・」

彼女が、泣き出してしまいそうな気がして雅斗は一樹に「下で待っている」とだけ耳打ちして病室を出た。

あの状態で初対面の自分がない方がいいだろう。

下のロビーまで降りると、雅斗は自動販売機で紙コップのコーヒを買う。見舞いに来た人に交じり、何人か記者らしい人影が見える。

みんな天野の取材にきたのだろうか。

さすがにカメラを持ったような報道関係者は入り口のところで警察関係者に止められていたが入院患者は落ち着かない様子で外の方を気にしていた。

「有賀先輩」

マスコミを避けるように玄関先までタクシーで乗り付けた彼はロビーに入って来るなり雅斗に声をかけた。

顔を見られたくないのか帽子を目深に被りマフラーをした彼は一見して誰だか分からない状態になっていたが、声をかけられてすぐに亜夜だと分かる。

姿はごまかせても声はごまかせない。

彼は姉の着替えを持ってきたのか紙袋を下げていた。

「この間は、ありがとうございました。色々お世話になって」

「俺は何もしてないよ」

「邦彦兄さんから聞きました。あの後も姉のことを心配して色々探してくれたって」

「そんなんじゃない」

雅斗は肩をすくめた。

実際に天野が心配だったというよりは、自分の興味を満たすためだった。彼女が死んで発見されることを期待していたくらいだ。礼を言われると少し後ろめたい気分になる。

「でも、無事で良かったな」

「はい。本当にあり・・・わっ！」

がたん、と音をたてて紙袋の底が破け、中のものが一気に床に散乱する。

一瞬の注目を浴びたが、すぐに興味を失ったのか、周りの人は彼の様子を気にする風でもなかった。

雅斗は笑って散乱した中身を拾い上げた。

「着替えかと思つたらノートパソコンか。紙袋じゃ重みに堪えられなかったみたいだな」

「ですね、・・・壊れてなければいいんだけど」

彼は床に強く接触した部分を撫でながら苦笑した。

「天野のパソコン？」

「はい、姉のです。退屈かな、って思つて」

「ネットゲームにはまつてたもんな。でも、病院でネットに繋がられるのか？」

「内蔵のゲームもあるから大丈夫だと思いますよ。・・・ひよつとしてgreenって有賀先輩のことですか？」

尋ねられて一瞬何のことなのか分からなかったが、すぐに天野の言っていたチェスの強い相手のことだと思ひ出す。

そう言えばIDを教えられたきり何一つ手を付けていない。

「いや、俺じゃないよ」

「ふうん、じゃあやつぱり一色先輩なのかな」

「一樹？」

「在学中は同じ部活だったんです。よく部室で他の人とチェスとか将棋やつているところ見たんですけど、一色先輩強かったから」

雅斗は感心したように頷く。

一樹がそう言うゲームに強かったというのは初耳で、少し驚くが、同時に彼ならばそれも有り得るだろうと納得する。

「亜夜もよくネットでチェスを？」

「はい。姉のパソコンを借りて」

「強い？」

亜夜は肩をすくめる。

「姉にも勝つたこと無いんですよ。いつも良いところまで行くけどチェックメイトされます」

「天野の強さを知らないから何とも言えないけれど、強いんじゃないのか？」

「だといんだけど」

彼は声を上げて笑う。

天野の髪が短くなっていたせいで、彼らの容姿はよく似ている。だが、こうして話してみると性格的な部分で正反対な部分が見え隠れする。

同じ環境で育った双子でも性格が違うのと一緒に。目に見えては分からないけれど彼らはあまり似ていない。

落ちた荷物をまとめて病室に行くと言い残して去っていく彼を見て、妙な違和感を覚える。

（・・・まさか、な）

雅斗は少し落ち着かない様子で髪の毛を掻き上げた。

31話 死神と蝶々

そう、犯人を予測出来てしまえば後は簡単だった。

犯人がどうやって人を殺してきたのか、それは、信じがたい事だが、蝶の群れやあの巨大なサナギを見た後ではすんなりと受け入れられる。

呪詛。

それが人殺しの正体。

犯人は巫蠱と呼ばれる古い虫を使った呪いで人を殺した。実際に、死んだ女の子達を殺したかったから呪いを使った訳ではなく、呪いを使つたために、女の子を殺したのだ。

そう、女の子達は虫を養う為の生け贄だ。

「そもそも血液型なんてどうでも良かった。虫が、その牙で血を囓るとき何かを逆に注入する。それが被害者の血を稀な血液型に変えてしまったんだよ。死因は毒物による中毒死じゃない。ショック死だよ」

血液型が変わったことにより身体が堪えられなかったのだ。

現に献血手帳によると澄子の血液型は稀血ではなかった。しかし警察側が持っていた資料では彼女は稀な血液型だと認識されていた。つまり、事件の前と後では血液型が違ふのだ。

「輸血で血液型が変わることだってある。身体が拒否反応を起こせば死に至る。おそらく虫に襲われた人は気付かなかったただけでもっとたくさんいた」

病院の中庭は他の患者の姿や、看護師の姿も見える。

柔らかく暖かい日差しの中で雅斗は憂鬱そうに息を吐く。

「証拠になるかは分からないけれど、クワトロのファンの子の首筋を確認したら何人かに噛まれたような跡が見られた。・・・これは俺の知り合いのじいさんが言っていたんだが、巫蠱は一旦体内に取り込むと蟲の力が強くなるそうだね。でも生け贄が死んでしまつて

は体外に取り出すことが難しくなる」

だから、腹部を開く必要があったのだ。あるいは、虫自身が内側からこじ開けたのか。どちらにしても、あれは犯人にとってそれだけの意味でしか無かったのだ。

「羽化すれば巫蠱も完成だったんだろう？ 残念だったな、・・・天野」

呼びかけると少女は普段と変わらない風になこりと笑った。

何の動揺も見られない。

ただ、普通に話しかけられて、受け答えをするかのような不自然なほどに自然な微笑み。

「くやしいわ、どうして私が犯人ってわかったの？」

彼女は、巫蠱で人を殺してきた彼女は、悪びれた様子など微塵も見せずに笑った。髪の毛は短くなっているが、その笑顔は学校や電車の中でみた彼女となんら変わりがない。

何か勝算でもあるのか誤魔化す事もとぼけることもせずあっさりと認めた天野は、雅斗の次の言葉を待っている。その表情に「悔しい」という感情も浮かんではいない。

「皮肉なことに君が最初に言ったんだよ。犯人は一番怪しくない人が犯人だって。襲われて生き残った君が一番怪しい。逆に言えば、君が一番怪しくないんだよ。それにね」

雅斗は彼女を横目で睨みながら言う。

「俺は犯人の考えていることが手に取るように分かるんだよ」

「そう言っていたわね。どうして？」

「似てるからだよ。人殺しと、俺が」

そう、そもそも天野と自分はよく似ていた。

初めは気づかなかった。彼女があまりにも自信の姿を弟に似せていたから気づかなかった。だが、自分が何故天野の死体を見たかったのか、どうして彼女に死んで欲しかったのかその理由に気付けばすぐに彼女が自分とそっくりだと言うことが分かった。

自分が死んで欲しかったのは自分自身だ。

六年前、母親の死体を見つけて泣くことも出来なかった自分をた
まらなく嫌悪していたのだ。

性質的に似ている人が犯罪を起こせば、その心理状況など、どう
行動するかなど、すぐに分かってくる。

だから彼女が犯人だと言うことが分かったのだ。

後は一つ一つ裏を取ればいい。そして証拠も全て彼女を示してい
た。

「クワトロのレコーディングの時、君はマスターテープを自由に触
れる場所にいた。江田先輩に確認済みだ。それから電車で君に会っ
た時、君は夜中にチェスをしていたと言ったけど、それは嘘だ。あ
れは蟲を回収するために出かけたせいで、睡眠時間が足りなくなっ
ただけだった」

「あら、そんなのどうして分かるの？」

「天野が勝てなかった相手は一樹だよ。一色の樹だから green
なんだってさ」

言いたいことが分かったのか、彼女は肩をすくめた。

雅斗は続ける。

「おそらく君は巫蟲が完成する前に警察に嗅ぎつかれないように、
囷として一樹が犯人に見えるようにわざとあいつの交友関係を狙っ
て蟲に襲わせたのだろう。あいつに恨みでもあったのか？」

天野は、表情を変えずに首を横に曲げる。

「貴方がここまで頭のいい人だと知っていれば一色くんを巻き込ん
だりしなかったわ」

それは雅斗の存在が誤算だったという意味だろうか。それとも、

雅斗を囷に使うつもりだったと言うことだろうか。

雅斗は首を横に振って彼女に問う。

「・・・他にも、続ける必要はあるか？」

「いいえ、結構よ」

目を細めて笑う彼女は人殺しをしてきた人間には見えない。だが
その笑顔は明らかに虚無であり、何もないものに触れているかのよ

うな錯覚を覚える。

「でも、私が犯人だと分かって、それからどうするつもり？ サナギが消えてしまつては貴方の憶測に過ぎない。それに日本の法律では呪いで人を殺しても罪には問われないのよ」

「知っているよ。でも、確かめたかつた」

「何を？」

「動機を」

そう、最後まで分からなかったのが彼女の動機だ。蟲を養つことを怠れば術者本人を襲う。だから人を襲い続けたとも考えられなくもない。だが、それならば羽化させる必要はない。こんなに頻繁に餌を与える必要もない。

彼女は、羽化した蝶を使って何かをするつもりだったのだ。それだけが最後まで見えて来なかつた。

「動機、ね」

彼女は少し失望したように雅斗を見上げる。

「誰かを呪うつもりだった、力が欲しかった、地位や名声が欲しかった。・・・そう理由をつければ満足する？」

「・・・」

「しないでしょね、貴方は。理由なんてないのよ。あつたとしても、誰も理解しないし、無意味だわ」

ぞくり、とした。

彼女の微笑みは何も含まれていない。自分のしたことに、罪悪感も嫌悪感もない。そのくせ喜んでいる風でもないのだ。まるで、息をするのと同じくらい自然に人を殺したかのように。

「人はその時が来れば死ぬの。偶然も必然もなく。殺されても寿命をまっとうしても、それは不公平なんかじゃないわ。それがその人の死ぬ時だっただけのこと」

「だからといって人殺しが正当化する理由になんかならない」

「そうよ、だから理由なんてないのよ」

彼女は短くなった髪を撫でるように触る。

「・・・後悔もしていないんだな」

「どうして？ する必要が無いでしょう。ああ、だけど、亜夜は悲しむでしょうね。それだけは後悔するわ」

「何を」

言いかけたとき、雅斗ははっとした。

蝶がいる。

あの、蝶が二人を取り囲むようにして集まってきていた。

周囲の人たちがざわざわと騒ぐ。

小さい鳥が大量に集まっているときのように鳴き声のような羽音が中庭を騒がす。

「恨んでも、憎んでも良いわ。貴方にはその権利はあるもの」

彼女はいつもと変わらない風に、いつも教室で浮かべているあの微笑みと同じように笑っている。

「さようなら、有賀くん」

「！」

蝶が、雅斗を狙う。

見上げた空は真っ黒になるほどに蝶で埋め尽くされていた。

恐怖はない。

ただ、今まで味わったことの無いような高揚感が彼の中を占めた。それは溶け出すように雅斗の口元を歪め、笑顔を作り出す。

何を感じているのか分からない。

ただ、もう何年も味わったことが無いような異様な感覚が自分の中に流れ込んで繰るのを感じていた。

死ぬのだろうか。

そう思っても恐怖はない。

雅斗はゆっくりと、目を閉じた。

・・・。

・・・。

・・・どこかで、子供が泣いていた。

小さい子供。

雅斗は不意に我にかえったように振り向いた。

どのくらいだろうか、十歳か、もう少し幼いようにも感じる。
泣いている子供は六年前の雅斗にも似ている。

母親の、本当の母親の死を悲しめなくてごめんなさい。
そう呟いたときの雅斗に似ている。

『・・・助けて、・・・を止めて』
子供が顔をあげる。

その顔は亜夜によく似ていた。・・・天野真里に、よく似ている。

『お願い、・・・を止めて』

子供は誰かに向かつて懇願する。

ざわり、と身体の中で何かが蠢く。

腰の辺りが異様に熱い。

・・・姉さん！

どこかで、誰かが叫んだ。

最終話　そして、真実は閉ざされる

大学からいくつもの交差点を抜けて真っ直ぐ行ったところに、珈琲屋というコーヒー専門店がある。今や全国チェーンになった店は元々ここから始まったのだと聞く。他のカフェとは違う雰囲気は少し敷居は高い気がするが、待ち合わせや大学の帰りに度々利用するのだ。

街の中を走り抜けるとメジャーデビューを果たし人気バンドとなったクワトロの曲が流れている。レコード店の窓ガラスには過激なメイクをしなくなったメンバーのポスターが貼られていた。

珈琲屋の店内は香ばしい匂いが立ちこめている。

店員に待ち合わせをしていることを告げると該当の人物が既に来ていたらしくすぐにテーブル席へ案内された。

真剣な様子で何かの書類を見ていた彼はこちらに気付くと軽く笑った。

「呼び出して悪かったな、亜夜」

「いえ、僕も会ってお話でしたかったです。・・・改めておめでとうございます、有賀警視」

現行の法律で最短のルートで警視になった雅斗はやや自嘲気味な笑いを浮かべる。

キャリアになって、周りの人から複雑な感情で見られても彼にはそうする理由があるのだ。

「まだ正式には警視じゃないよ」

「そう、でしたね」

亜夜は促されて座った。

店員にグアテマラを注文して着ていたジャケットを脱いだ。携帯電話をテーブルの上に置くと雅斗がくすりと笑う。

「そのストラップ、まだ付けているんだな」

「ええ、これは唯一の‘姉さん’ですから」

携帯電話にはマスコットがついている。この小さな人形は15歳の時に真里が作ってくれた大切なものだ。十年も付けているからもうボロボロになりかけているが、それでもこれだけは外す気にはなれなかったのだ。

「研究室に入っただって？ 怪しげな超常現象研究班とか名乗るところに」

「怪しげって・・・教授は貴方のお父さんじゃないですか」

「だから怪しげなんだよ」

雅斗はくすくすと笑う。

つられて亜夜も笑った。

彼は出世しても変わらない。高校生の時に大人びすぎていたというせいもあるが、出会った時と彼は殆ど変わらない。

その変わらない彼にほっとしながら、事件の事を思いだしてしまふ恐怖に似た奇妙な感覚にも襲われる。

十年前、病院に大量に蝶が発生したとき、真里は忽然と姿を消した。

中庭には沢山の人がいて、目撃者も多数いるというのに、彼女は蝶に包み込まれている一瞬のうちに姿を消してしまったのだ。

残っていたのは血まみれになって倒れている雅斗だけ。初めは誰もが死んでいると思った。亜夜も、彼が死んでしまったのだと思った。

しかし彼は一命を取り留めていた。

目覚めた雅斗はすぐに何も話さなかった。岩崎刑事達と何か色々調べた後、彼は亜夜にこう言った。

『本当のことを、知りたいか？』

雅斗の問いに亜夜は頷いた。

そして、何日も食事も喉を通らないほどのショックを受けることになる。

初めは信じられなかった。雅斗が自分の罪科を逃れるために嘘を言ったのかと思ったくらいだ。だが、彼が嘘を言っていないことは

嫌でも分かる。

何日も悩み、苦しんだ後、亜夜は彼の言葉を真実として受け入れた。

今でもあの姉がそんなことをしたのを信じられないし、「動機なんてない」と言った言葉も納得出来ない。

だから亜夜の中には優しかった姉と、巫蠱で人を殺して、強い力を得ようとした姉とが存在する。

・・・だから、彼女が人を殺した理由があって欲しいと願うのだ。何か、どうしようもない理由があつたと信じたい。

真里が姿を消してしまった今では真相は闇の中に消えた。

もし、彼女が見つかったなら、彼女は真実を語るだろうか。

どちらの姉が本当だったのだろうか。

姉はまだ生きているだろうか。

どの答えも、まだ見つからない。

亜夜はちらりと雅斗の読んでいた書類に目をやって言う。

「お忙しいようですね」

「現場とは違った忙しさがあるよ。ろくに事件にも関われないし、岩崎刑事があれ以上の出世を拒む理由も分かる気がするよ」

雅斗はコーヒを飲んだ。

「それでも貴方はキャリアの道を選んだ」

「そうする方が早かったからね」

雅斗は少し肩をすくめた。

「皆さん、変わりありませんか？」

「ああ。だけど、彼らの事を認める動きも出てきたから、結構働きやすくはなっていると喜んでいたよ」

「あの事件のせいであれだけ多数の目撃者がいたから認めざるを得なくなっていましたからね」

病院の中庭での出来事。

警察が何百回と調べても「超常現象」を理由にしない限り説明がつかない状況になっていた。

苦し紛れに警察は一連の連続殺人事件を「新種の虫の毒」のせいだと発表し、半信半疑のまま世間が騒ぎ、やがて飽きたように事件の話はされなくなっていた。

実際、警戒宣言が出された後、死者が出なかったためマスコミも騒ぐ必要がないと思ったのだらう。街を騒がせた「連続殺人事件」は「事故」として終わった。

本当の事を知る人は少ない。

亜夜は少し黙り込んだ。

店員がトレイに乗せたコーヒーを運んでくる。

「ごゆっくりどうぞ、と定番の言葉をかけて去っていく店員を見送って亜夜は真剣な眼差しを雅斗に向けた。

「絶対に、姉を捕まえて下さい」

その言葉が出たのは二度目だ。

姉に会いたいからなのか、それとも誰かに罰して欲しいのか、実は良く分からない。分かるのは、彼もまだ、姉を捜しているということ。

「ああ、言われなくてもそうするよ」

十年前も彼は同じ事を亜夜に言った。

泣きたいのか、笑いたいのかわからなくて、亜夜は祈るように頭を下げた。

蝶が舞っていた。

ぼんやりと光る糸で翅の形を創り浮かんだり消えたりしている蝶は人の目には見えていない。それはまるで何かに惹かれるようにゆっくりと暗くなり始めた街の中を彷徨い舞っている。

誰かが、気付いたように顔を上げ、立ち止まる。そして再び何もなかったかのように歩き出す。

蝶は気にする様子もなく、やがて空へと舞い上がる。

街を見下ろしている赤い満月に向かって、ゆっくりと翅を羽ばた

かせて吸い込まれるように消えた。
吸い込まれるように、消えた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1392b/>

死神と蝶々

2010年10月8日14時39分発行